中央公論

本號目次

口繪

◉開眼忙窺

公論　風光三種

◉三大國病の處分　楓　堂

◉升福澤翁逝く　梅　原　融

◉非藝非能論　杉　村　縱　横

◉東清鐵道を論ず　金　華　散　人

海外新潮

大勢　戰敗後の西班牙◉中央亞細亞に於ける英露◉二十世紀の外國傳道

雜纂　支邦の宣教師事件◉淸國の憲法◉金砂末屑

雜錄

◉東京の雜誌界　千　里　行　者

◉排自由結婚　青　柳　有　美

◉藝界漫言　木　海　子

◉教界人物評　哄　堂

詞藻

◉漫遊雜咏外漢詩數十首（町田柳塘撰）◉わか首（桑伯生）寺五首（三子）仝（茂卷）◉俳句紙鳶（坂本四方太撰）

紀行

◉比摩賴耶紀行　櫻　井　箕　峰

◉北極紀行　源　淸　蔭

評論

△社會小觀　日本の世界的人物○已惚國民の自尊主義○婦人と新聞紙○探檢の餘地○鐵道工夫の風紀○年少力士に就て○遊獵と岩崎家（楓堂）○小紛錄（ち、ぜ）

△宗教時事　東京學生界の宗教○佛教各宗の合同○碎言集數件（雅山）

△文學評論　偏頗なる社會的待遇○曖昧なる範圍別○代るものを求めよ○言文一致の新研究○宙外の調和体○淺薄なる美論（春潮）文壇煙のけむり（スイガラ黨）

△政界漫言　憲政本黨の紛擾○三十四年の豫算○增稅と新計畫○在野黨の必用（城陽政客）

◉星亨君に與ふる書（川上淸）

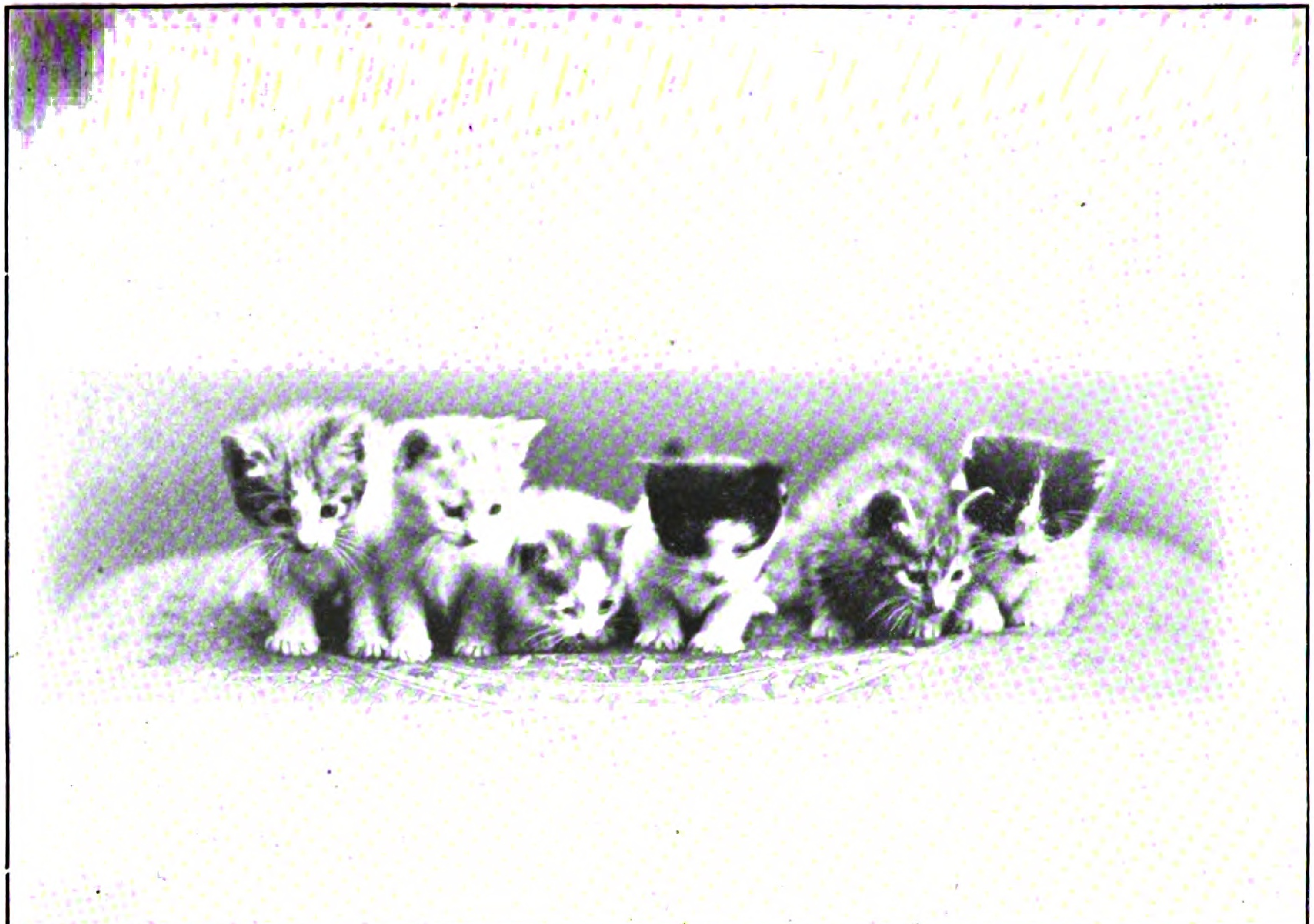
△教育時評　禁酒法案○施行と勵行○市中音樂隊○大町桂月君を戒む○國定教科書論に就て○ちりづか（高島生）

△雜評　目睹耳聞錄　齊　東　野　人

△讀者の文壇

◉赤門天狗一代記◉當世名流雅號考◉俗謠と文學者◉短文

△新刊◉彙報◉廣告



閑 眼 忙 覓

中央公論　第十六年 第参號

中央公論

三大國病の經過

果して其能力が他を支配し得る國民なるか、或は他に支配さるべき國民なるか。十九世紀の終り、初めて世界新興國の一に數へられたる我邦は、今世紀の前半に於て正さしく其資格有無の實驗を公開の舞臺に演ぜざるべからず。此際少しにても其要素に於て欠くるところあり、足らざるところありとせば、宜しく全力を湊注して其資格養成の方法を講ずへきなり。不幸、我國民は種々の方面に於て多くの病弊を持てり、此多くの病弊にして健康の狀態に復せざる以上は、世界列國の中に立て、其嚮導者たり指揮者たるの位地を得る能はざるのみならず、終には追隨して其列に加けることすら能はざるべきなり。特に其の病根の深くして到底一大手術を待つに非ずんば救濟し能はざるもの、曰く我國の文字なり、曰く我國民の體力なり、曰く我國の倫理問題なり。吾人は之を名けて我國の三大國病と云ふ。刻下我國民は如何に此病狀に對し、治療を加へつゝあるか。

其一　我國の文字　　國字國語の改良調査は其聲已に高く、今や不十分ながらも國家事業として其病根を除去せんと計畫せるの時機に達せり。思ふに三大國病中其手術の比較的容易にして其結果の早く見られ得るは此問題ならん。我國の文字か世界第一の難物にして、到底世界的のものならず、彼英米の兒童が僅に五六ヶ月にして文字の習修を畢はりて猶餘りあるに反し。五年十年小學を了はり中學を了り、尚且つ腦力の一半を文字の爲に費やすの不經濟なる、是が爲め日本語日本文の勢力をして一歩も國外に及ぼす能はず、蕞爾たる臺灣の一新領土にすらこれが普及を望むべからずと云ふが如き、千條の不便宜、萬縷の不都合、識者の夙に詳說し讀者の既に諒知せるところ、又吾人の絮說を待たざるべし。

其救濟策として今や漢字節減を實行せんとするものあり。新字の創定を工夫するものあり。羅馬字の適用を主張するものあり。姑息の計、彌縫の策、果決の案、恰も手術の實行に先つて醫師の會議を開けるが如し。

伎倆あり經驗ある國手は、已に姑息彌縫の何の効無きを知れり。羅馬字の適用は早かれ晩かれ世界の大勢をして拒ぎ得べきものに非るを知れり。今後數年多少の研究多少の議論多少の悶着を經て、必ず此果決の案を實行するの日を見ん

其二　我國民の躰力

この問題は我國の文字に比して更に一層の難病に屬す。樂天的經世家は曰く、我國民の躰格は世界各國民に比して決して劣等のものに非ず。其健康の點に於て、其躰質の上に於て、彼等歐洲人の背後に立つべきものにあらざるは勿論、寧ろ遥に其上にあり　現に北清に於ける聯合軍の實况は是を證して餘りあるにあらずやと。吾人も亦斯かく信ぜんとす。然れども單に粗食に堪へ、風土の變化に抵抗し得るを以て標準とせば、支那人は更に日本人の上にあり、南洋や亞弗利加の土蕃は更に數等の上にあらん。人はかゝる單純なる比較に滿足する能はざるなり。暫く自惚れと辯護と曲解の地位を離れて公平に其腦力其躰格を比較し來れば、歐米各國の人種に比して我國民の躰力が、平均上同等以下にあるを覺えざるもの果して幾人ぞ。よしや其腦力や躰質は同等以上にありとするも、其躰軀の短小は慥かに我國民の一大病根に非ずや。果して躰格の短小とその早熟早衰は原人の状態にして、人種の劣等を示すと云ふ社會學上の所説を事實ならしめは、誰か寒心せざるものあらんや。現に我國兵士の身長は世界二十一個國を比較して第二十一番目、則ち其最下位と云ふにあらずや。奈何に贔負目を以て見るも、我國人の躰格は白人中の短軀者たる羅甸族に比しても猶遥に下風に立たざるべからず。之を壯大なるアングロサクソンに比し、頑丈なるスラブ族に對比し來れば、恰も宮相撲と本場所相撲の相違あるなり。リッツルヂヤップス、リッツルブローンメン、ヒユーマンポニー、皆是れ世界の各國より頂戴せる難有尊稱なり。逆鉾荒岩如何に輕捷なるも到底大關の器に非ず、況んやその横綱を張らんとするに於てをや。

我國人の躰格にして若し先天的短小、發達の見込無きものなりせば則ち息む。然れども邦人の躰格は此の如き發達の餘力無きものにあらずして、其境遇其習慣が暫く此の如くならしめたるもの、若し一朝其障碍物を除去したらば、直ちに世界普通の人間と同じく發達し得るものと知らば、鋭意其障碍物を除去して病根を絶たざるべからず。曾て專門の學者に聞く、日本人の躰格は上半身の未發達よりも下半身の未發達にあり。元

來人間の身長は臍下の横骨を中央として上下同等の長さを有すべきもの。然るに日本人は少きは一寸多きは四寸五分、下半身の短きを見る。これ一に座居の弊害より來れり。往昔寺子屋の時代、坐して教育を受けたるものより、今日の小學中學兒童は僅に身長の平均を增し來れるは事實なり。歐米に於て生長せる日本兒童が躰格の上より見て我國に生長せるものより、遙に良好の結果を見るも事實なり。是れ恰も井中に生育せる魚と池中に生育せるそれとは身長に大差あるが如けん若し我國家屋の構造にして改良せられ、座居座業の弊を全く除かるれば、一代五六十年後、日本人平均の身長は確に二寸を增加し得べしと。

其衣服、其食物、其躰育の欠乏、其種々の習慣、悉くこれ日本人の身長をして今日の如く退化せしめたる源因なるべきも、我國家屋の構造が其主因となれるは實に疑ふべからざるの事實なり。

我國民躰格改良の先决問題として解決すべきもの、此家屋改良の問題なり。我國人躰力の劣弱を憂ひて躰育を說き、之を奬勵し之を實行するものは漸く多し。然れども家屋改良の事は未だ問題とならず、偶ま之を說くものあるも空言のみ。只之を社會進步の自然の成行に任さんとす、事素より重大、此の實行は容易ならざるべきも、苟も國運の振否民族の消長に大關係あるものと知らば、國家事業として有ゆる方法の下に之が改良を早めざるべからず。且つ服裝の改良と云ひ、諸種風俗の改良案皆懸つて家屋改良の一問題にあり。是れ必ずチョン髷を廢し帶刀を廢し、暦を代へ藩を解き、幾百年の習慣を一朝に打破したる當年の勇氣と斷行に待たざるべからず。朝野其局にある者の將に大なる準備と決心を以て一日も早く着手せざるべからざるは此問題ならん。要するに此國病はその病根の明白なるに拘はらず、手術のやゝ面倒なるに躊躇して未だ治療に着手せざるものなり。

其三　我國の倫理問題　前の二大國病を以て外科的のものとせば、我國の倫理問題は實に內科的のものなり。特に手術に面倒なる、恢復に手間取るべき悪症なり。前の二大國病の如きは國家の政治、敎育、軍備、實業等に病弊無き後に於て初めて救濟に着手して可なるべきも、此問題は實に一國の政治よりも敎育よりも軍備實業よりも將た如何なる事業よりも、一國の存立上、第一着に講究せざるべからざる地盤問題なり。此地盤にして堅牢ならざる以上は、凡てこれ砂上の樓閣、

國家の永遠の存立は根本に於て望むべからず。

去年八月物故せる倫理學の泰斗、英國ケンブリッヂ大學のシヂイック氏吾人に告げて曰く、現時世界學者の日本に往て研究の價値あるもの二個の地震なり、一は理科の方面より見たる地震、一は倫理の方面より見たる大地震なりと、一場の警語に過ぎずと雖、吾人は實に萬斤の鐵槌を以て腦天を擊たれたるが如きの感有りき。有形の地震はポンペーの市街を埋了せり、四國の一部を陷沒して伊豆の七島を生ぜり、琵琶湖を凹ませて富士山を凸起せしめたり。人類有て以來、其大なる者も猶一地方一都府の覆沒に過ぎず。若し夫れ此無形の地震に至ては、遂に國家の全局を擧げて滅亡せしめずんば止まざるなり。東西兩洋の倫理思想が雜然として入り亂れ、國民を驅て五里霧中に彷徨せしむること、恰も寒流と暖流の合して濃霧を作り、爲めに船舶の針路を失へるが如し。行爲の標的を失ひ、信念の立脚地を奪はれ、四分五裂、暗中の摸索を事とす。政治家も學者も敎育家も國民の大多數と共に相率ひて、一日又一日、恐るべき墮落の嶮崖に向ひつゝあるなり。彼の歐米の各國が宗敎を以て其地盤とし以て人心を統一せること今も昔に換らず。講壇に立て基督敎を排擊する無神論者も、猶敎會の義務を怠らず、强盜殺人の爲に監獄に送らるゝ敎徒も耶蘇の像に逢へば肅然容を改むと云ふが如き、家庭にも、學校にも其他有ゆる社會の各層に通じて、宗敎が人心の根底に浸入せることの深き、吾人をして轉た健羨の情に堪へざらしむ。彼の物質文明と云へる其半面より見れば醜陋にして危險なる、世界の趨勢を牽制し、一定の軌道に依て人間の行路を導くもの實に此宗敎の力に非ずや。我國民の今日は半ば已に此軌道を脫し去れり。感情を統一し行爲を制御する靈性の機關及其用をなさゞらんとす。

災ひなる哉、此紛亂時代に於て新興國の日本を今後に指導するの宗敎未だ興らず。老朽せる佛敎の大部分は文明の潮流に反し、淺薄なる基督敎は全く未だ日本國に同化せず、醫師無く、療法無く、藥餌無く病將に膏盲に入らんとす。

三大國病刻下の經過それ此の如し。文字や躰力の問題はこれを倫理問題に比すれば與に一小手術に價ひするに過ぎず。而も國字に就て計策するもの甚多し、躰育に關して奔走するものは多し、此倫理問題の救濟策に至ては、一部空論家の横議に任せて識者の冷々たるは何故ぞ。これが解決の困難なる爲か、これが手術の

到底及ぶべからざるか爲めか、困難なり及ぶべからずとして決して寸時も放棄し置くべきの病症に非らず。思ふに日本今後の宗敎は世界化せる佛敎の一部が基督敎の實行的方面を採用し、日本化せる基督敎の一部が佛敎の理論的方面に同化し、初めて健全の發達を成さん此兩者が渾然融合、其議論主張の點に於て一致するのみならず、新らしき寺院となり、新らしき敎會となり、儀式となり信條となり、日本國民の中堅となるべき階級が、生れて嬰兒の時代より白髮墳墓の終焉まで、是に依て立ち、是に依て行ひ、是に依て導かれ、禮拜し祈禱し懺悔する時代に到達し、初めて國家の新らしき地盤となり得られたるを信ずるなり。然れども前程猶遠し。此事決して自然の成り行きに任すべからず、又決して頑迷なる今日の佛敎徒や偏狹なる今日の基督敎徒に一任して、これ卿等專門の責任なりとして依賴し置くべきの事ならず。火は既に燒へ上れり、水は已に堤を壞はせり、燒爛か、覆溺か、二者其一に居らざるべからざるの時、苟も一國の先覺者を以て任ずるもの如何なる種類と云はず、如何なる階級と云はず、一齊此問題に走るべきの時なり。獨り怪しむ政治に狂奔し實業に熱中し敎育をも等閑視せざる國民が、この地盤たり根據たる此根本問題に向て何が故に注意を拂はざるかを、國字國語の調査會あり、高等敎育會議ありて未だ一の高等宗敎會議すらも無きは、是れ蓋し手を拱して國家の夭死を待つと同じからずや。（楓堂）

福澤先生

吾人日本國民は今や回復す可からざる一大損失に逢へり、而して其損失とは福澤先生を失ひたること是也。



先生の訃の一度び世間に發表せらるゝや、知ると知らざるとを問はず、苟も常識あるものにして追悼の情を動かさゞるものなく、畏くも上、宮室よりは特に祭粢

の料を賜はらせられ、帝國議會は満場の一致を以て哀悼の決議を爲し、内外各種の新聞紙は其功を稱し、其徳を讃し、以て新日本の恩人を惜しむに躊躇せす、葬送の日會するもの朝野の名士一万五千に餘る、先生德化の人心に浸潤するの深き亦知る可き也。

吾人は今玆に先生の功徳を讃し、又た其人物風貌を紹介して屋上更に屋を架せんとするものに非ず、唯一個の私情に非ず、社會の爲め實に哀悼せずんば已む能はざるを一言せんのみ。

世人は先生が文明の皷吹者として、教育者として、學者として、過去三十年間、新日本に貢献したりし功績を稱す、爾り先生の吾國新思想の開發に於ける、所謂維新三傑の文勲武勲に對比して敢て遜色あるものにあらず、維新の功勞を論すれば、先生の如きは確かに第一流の地歩を占む可きものなり、爾れども先生が其本領を發揮し、天職を悉さる可きは過去の社會に非ずして、實に今日已後の社會に在る可かりし也、少くとも先生が過去に悉されしものよりも今後の社會に於ては更により大に悉さる可きものありし也。

顧れば新日本の刱設は已に三十餘年の昔となれり、今や蒸氣發し、電光照らし、東洋唯一の文明を以て世界の日本と稱すと雖も、幷は唯形式的に於て云ふのみ、其精神的日本に見至らば依然として舊日本の舊社會なるのみ、政府は依然たる政府にして、人民は依然たる人民なり、政府は總ての勢力にして人民は總ての無勢力なり、日夕書卷に親しみ、宇宙の眞理を研鑽す可き學者も、政府に攀緣し、政府の驅使に從ふに非ずんば以て學者としての面目を揚ぐる能はざるか如く、天下の風雲を制し、世界の利益を爭ふ可き商人も、御用商人と爲るに非ずんば一躍して國家の豪富たるに難しと稱す、各種の官立學校は溢れんばかりに生徒を吸集し、學校增設の必要は歳と共に逼迫し來るも、都下私立學校の多數は却て日に落寞を極めんとするを見る、政府の肩書とし云ば正八位勳八等も尚且つ麗々しく名刺の上に光を添ゆるある時は、奚ぞ又た何々學會と稱するものが、嘗て學術に緣故なき、華族號を會長となし、世の人爵崇拜に投せんとするを恠まんや、是の如く人爵に戀々し、政府の威光をのみ仰がんとする國民に在て、假令ひ立憲國と稱し、憲法あり、議會あり、代議士あるも、吾人は到底劣等なる專制國の外何等をも見る能はざる也、而して是の如く卑屈陋劣なる國民に在て、素より清健高潔の德義の流行する理由なく、彼紳

士紳商と稱する者の家庭の紊亂を見ずや、堂々たる首都の名譽員等が、其地位を私して一人ならず二人ならず、十數人相率て破廉耻罪を敢てし今や豫審の進行中なるを見ずや、宗教の勢力は僧侶の腐敗墮落と共に其道德的感化を失し、公義輿論の制裁太だ薄弱にして、新聞紙の如きは單に所謂艷種なるものに依て賣高を增殖するのみ、人心維れ危く道心維れ微、名譽も名譽となすに足らず、富貴も富貴と爲すに足らず、實に福澤先生の所謂燒けば灰と爲すべし、吹けば飛ぶ可きの社會なるもの也、之を要するに形式的新日本は稍く成就したりといふべし、而れども精神的日本の建造に於ては前途尚遠しといふべし、而して當代花の如く雲の如きの人衆、何人か能く此精神的日本を建造し得可き、吾人は之を伊藤侯に望む能はず、又た之を大隈伯に望む能はず、星亨氏伊東已代治男にも望む能はず、天下唯福澤先生其人の如きあり、纔かに依賴す可きを覺ゆる也、

世人の先生を誤解するや久しからずとせず、先生は久しくあるものよりは國家の亂臣賊子と見做されたり、あるものよりは仁義道德を輕蔑する輕薄者と見做されたり、あるものよりは卑劣なる金錢の崇拜者なりと見做されたり、啻に先生を悅ばざるものに誤解せらるゝのみならず、平素或る點に於て先生を强き人也、人物也と敬服し居るものにも往々にして深く知られざる也、蓋し先生の東洋數千年來の舊事、舊物、惡習慣、惡氣質を破壞するに熱心なる、其の語氣筆勢往々にして保守的俗物を驚殺したるものあらん、されども先生は決して亂臣賊子にも非ず、仁義忠孝を無視するの人にもあらず、矧んや金錢を崇拜して守錢奴の陋態を學ばんや、彼等の誤解は畢竟先生の議論文章を讀て、眼光紙背に徹せざるに因るのみ、先生の平生を知らざるに因るのみ、一度び先生の風采に接す、先生の人物は極めて明白也、其溫平たる面貌、其偉大なる軀幹、其溫言寬語、相對して春風に接するの情あり、之を社會にしては、無位無爵の一平民として、王公に屈せず、下民に誇らず、一枝の筆、三寸の舌、保守的俗論に對しては進步の爲め、貴族的威權に對しては平民の爲め、万丈の氣を吐きたること四十餘年、之を家門にしては、尤も善き夫とし、尤も善き父とし、尤も善き主人として、夫人に信せられ、子女に敬せられ、奴僕に服せらるゝのみならず、親戚朋友に渥く、門下の書生に親しく、八面玲瓏として私德の圓滿なる、深く語らずして

薫然薫化されざるもの果して幾人かある。

先生門下の士今や万を以て數へんとす、而して彼等の中には政治界に於て、實業界に於て、將た各種の社會に於て、天下第一等の人傑と稱せらるゝものに乏しからず、新日本の智力の幾分を裁割して先生門下に壟斷すと稱するも過言に非ず、而して是等の人物が先生を信ずるの厚き、先生に服するの深き、未だ曾て先生を非議したるの事を聽かず、先生德量の如何に宏濶なるかを知る可き也

先生をして天下の大先生として、教育に於て、學問に於て、筆に於て、舌に於て、尤も大なる成効を爲さしめたる、素より先生博大の觀察力、鋭利なる批評の才、健全なる常識の力に由らずんば非ずと雖も、其尤も大なる要素としては吾人は其私德の圓滿なる天下多く其類を見ざるに歸せざる可らざる也。

先生は獨立自尊の主義を唱導せり、修身要領二十九條は實に獨立自尊の四字の擴充に外ならず、當時先生の要領を發表するや、世論雜然として褒貶の聲頗る高く、或は哲學的論鋒を以て之を破碎せんと試みたるものもありしが如し、吾人も先生の主義が果して万代の眞理、永世の道德主義なりと稱せず、(先生も亦然かいふに非ず)而れども即ち是れ先生が六十年間自ら信し、自ら行ひ、朝琢暮磨深く自ら經驗したるの主義にして、彼の徒らに批評の空言を弄し、而も自ら世道人心に何等貢獻するものなきと其撰を異にす、吾人は自尊主義の眞理なりや否やを知らず、又た哲學的に合理なるや否やを知らず、而れども今日の如き政府の外に勢力の何たるを知らざる社會に於て、學者の曲學阿世を事とする社會に於て、平民の氣慨なく、婦人の勢力なく、輿論なく、公議なく滔々として腐敗墮落する社會に於て獨立自尊の福音は尤も急且つ要なるものありと信せざる能はず。

先生曾て吾人に語て云へり、予にして若し尚餘年を永うするを得ば、日本家庭の腐敗を一洗し、宗教の改善を爲す可しと、先生享年六十又八、之を普通人にしては功成り名遂け、靜に老の至るを待つ可きの年也、然れども先生の意氣抱負よりせば、先年は僅かに普通人の三十前後にも比すべし、矧んや躰質強健にして、意を衛生に注ぎ、眠食を苟もせず、先生は決して今日に死するの人に非ず、天若し先生に假すに尚二十年、否十五年、否十年を以てしたらんには不潔なる日本の家庭は或は清淨潔白なるを得たらん也、腐敗したる日本

の宗教は或は一大改革を遂成し得たらん也、而して修身要領の目的も之に依て其過半を成就し、精神的日本の基礎も或は之によりて略、奠定さる可かりし也、而して今や先生は其道徳的、倫理的宗教的本領を大に輝發し畢らずして去り、社會は此唯一無二の精神的日本の建造者其人を失ふ、知らず國家は如何にして此損失を償はんとするか、

若し福澤先生を以て社會の燈明臺なりとなさんか、今や社會は依て照らすべき其の燈明臺を失ふたるものなり、若し福澤先生を以て平民の生ける標的なりとなさんか、今や平民はその依て進む可き標的を失ふたるものなり、若し福澤先生をして青年の墮眠を警覺する洪鐘なりとなさんか、今や青年は依て起つ可き洪鐘を失ふたるもの也、東坡曾て歐陽文忠公を哭して曰く天下の爲に慟し、一私の爲に哭すと、吾人が社會の爲め、平民の爲め、又た青年の爲め、先生を哀悼するもの亦是の如きものある也

若し夫れ先生の英靈毅魄は先生と共に、白金臺上の暮烟に附せらるゝものに非す、その文明改進の鼓吹者として、平民の味方として、始わり終わり、一生六十年昂々として社會に横行濶歩したるの意氣精神は、永く天地の間に磅礴して、冥々の間、國民を風化陶鎔するものあらん、矧んや先生が多年涵養訓育したる萬餘の門生は、今や社會の一大勢力たらんとし、先生の遺留したる慶應義塾、及び時事新報は永く平民文明の曉鐘として、社會を警覺するに怠らざる可し、是れ幾ぶ慰す可き也。噫。（梅原融）

非藝非能論

寧ろ如かんや、無藝無能にして悠々時節の到來を待たんには、藝を賣らんとする者は、其の賣られんことを思うて、役々として東奔し西走す、能を用ひられんとする者は、其の用ひられんことを思うて、齷齪として一日も安せず、藝漸く賣られ、能漸く用ひらるゝに及では、乃ち、其藝と能とを恃んで、動もすれば其位に安ぜず、唱ふべからざる不平を唱へ、列ぶるにも足らざる小言を列べて、自ら其天地を狹うす、藝あるものは藝に着し、能ある者は能に執す、猶ほ自ら繩を綯うて、自ら己を縛らんとするに異ならず、區々の藝、屑々の能、這の爛葛藤に拘束纒綿せられて、雄心空しく朽ち、大志徒らに挫けんずる者滔々たる天下皆然り、

夫れ人の眞價は藝に非ず、能に非ず、其能く人たる所に在て存す、其の人たる所に於て身を立て、世に處せんことを思はずして、小藝に衣、小能に食はんとするが如きは、そも／＼末の末也、

小才子の事を誤るは、世皆な之を知る、小藝小能の身を誤ること、如何ぞ之に異ならんや、藝もよし、能も亦よし、唯藝と能とは、之を使ふべき人あつて初めて其全きを成すのみ、藝と能とに頤使雇役せられて、知らず識らず、其人たる所以を沒了するが如くんば、天下の至愚なるものに非ずして何ぞや、世話に「藝が身を助くるほどの不仕合せ」といふことあり、咄、藝によつて身の助かるが如きは、啻に不仕合せなるのみに非ず、明に是れ大なる危險也、一身を危うし、一家を危うし、一國を危うし、延いて天下を危うするもの、皆な是より出でずんばあらず、

現に見よ、其初め海の如き希望と、山の如き雄志とを抱いて其途に上り、天晴れ行末は、鵬翼能く八万里を翺翔しつべく見えたる少年が、其中學に入り大學に入る頃に至りてより、次第に、臆病になり、意氣地なくなり、前日の理想に畫ける所はいつしか烟散霧消し去つて、はては腰を五六十金の月給に屈し、早く妻を迎へ家を作り、愚にもつかぬ口髭なんど生やして得々自ら安ずるに至るは、吾等の屢々出會する所の事實に非ずや、其初めに於て志の徒らに大なりしは、畢竟青春の身、事理を解せず、世故に通ぜざるの致す所なりしなるべし、されども漸く長じて後、早く其安ずべからざる所に安じて、一蹶再び起つ能はざる所以のものは、是れ、其僅かに得たる所の藝能を、少しにても早く賣らんことを欲せるに由らずんばあらず、賣るゝと否とは、其藝能の價に於て甲乙する所なきを、眞個の無眼子之を思はず、只管之を賣り急ぎて、遂に我なから氣まづき地位に甘ぜざるを得ざるに至る也、憫れむべからずとせむや、

無學無識といひ無資無產といふが如き地位に在る者は、外物の恃むべきものなきを知るが故に、一に自己の力に依て云爲言動す、自己の力に依らずんば、世に由るべきものなければ也、此故に彼等の事に當るは、眞面目なり、死物狂なり、其中に生命あり、活氣あり、藝を賣るに非ず、能を鬻ぐに非ず、自己本具の個性を擁して、之によつて事を舉げんとするなり、事若し敗るべくんば、彼は長へに敗る也、此際又彼を救ひつべき、一藝一能の餘裕あるに非ざる也、

更に手近き例を擧けて之を語らんに、世に彼の會社を起し、新聞を初め、病院を立て、學校を作るが如き、此種の事業を起す者は多く大學卒業といふが如き事々しき肩書を有するものに非ずして、名もなき市井の一事業家のみ、其敎育程度を問へば僅に前日中學を卒業したる位に過ぎす、大學出身の大學者の如きは、却て大抵其下に就きて此等無識の徒の頤使する所となる、學校を卒業せる者と其學校を卒業せざる者とを比較するに、飛び拔けてエラキ者は寧ろ卒業せざる者の方に在り、專門の學藝を修めたる者と修めざる者とを比較するに、修めたる者は多く人の雇人となり、修めざる者は却て人の上に立てるが少なからず、肩書ある學者となき學者とを比較するに、眞個斯學熱心にして獻身的に其業に從ふ者は、寧ろ肩書なき者の方に存す、此の實際を具體的に證明せんとせば、われは今の日本に於て德富猪一郎氏を擧げ得べし、朝比奈知泉氏を擧げ得べし、尾崎德太郎氏を擧げ得べし、正岡子規氏を擧げ得べし、野中至氏を擧げ得べし、名和靖氏を擧げ得べし、鳥居龍藏氏を擧げ得べし、

夫れ人世は寄席に非ず、之に處するよ豈になぐさみ半分にして可ならんや、須らく眞面目なるべく、死物狂ひなるべく、背水の陣を布けるが如き覺悟なかるべからず、わが賴とすべきはわが人物に在り、小藝小能の僅に身を支へつべきものを手賴りとして、兎にも角にも飯に食ひはぐるゝとなきに安ずるとあるべからず、人は小康に甘じ易き動物也、世に兎に角飯の食へるといふほど、人の志氣を挫くものはなし、小藝小能小才智小地位小肩書小財産皆な是れ人を小滿足に誘導し、小天地に拘禁する者、之か爲めに勃々たる鋭氣多くは消耗せられ了する也、

己れ大學生で候ふと大威張りに威張りちらしたる者が、僅に高等官七八等の地位にまごつき居る間に、昔て郷里の中學に同窓たりし某々が、或は衆議院の議員となり、或は某會社の支配人となり、或は商法會議所の所長となつて、上京し來れるに會し、己を顧みて赧然たる能はざるを得ざるが如き者世には隨分少なからず、わが知れる者に某なる者あり、彼れ常に嘆じて曰く、吾に一藝の以て一家四五口を養うて餘りある者あり、此藝に依て生活せんは易し、此故に之を固守す、此藝を棄てゝ顧みざらんは如何にも惜し、此故に之を離して他の好位地に轉せんとを思はず、此藝を得んが爲にとて費す所頗る多し、此藝に依て身を立てず

んば恐らくは人の笑を招くべし、此故に之を利用せんとをのみ思うも、爲に自ら此の爲に使役せらる、此藝に基礎を置きて一二事業の企つべきものなきに非ず、而かも此藝は是れわが嘗て專攻せるもの、之に關して失敗を招かば、其耻辱や甚だ大なるへし、此故に寧ろ退いて萬全の地位に止らんとを思ふ、嗚呼吾に此一藝なかりせば、今日豈に一俗吏となつて、兀々刀筆を事とせんやと、われ之を聞く毎に未だ曾て自ら顧みて赧然たるものなくんはあらず、思ふに世間口に然らざるを唱へて、而かも心に感を彼と同うせざる能はざるものの少なきに非じ、貧しき者却て金を吝まず、無學の者却て時に卓扳の議論を吐く、此間の消息を解せば、無藝無能の者往々大事を成すを得るを怪むを要せざる也、

藝と能とは人の得ざるべからざるものにして、又棄てざるべからざるもの也、藝能なきは不可、と雖も、藝能に束縛せられて、其以外に越出し得ざるも亦不可也、名もなき腰辨當者流となつて一生を終らんずる者ならば知らず、苟も一片男子の氣骨を存する者、豈に此の足手纏ひの爲めにひッくりかへるべけんや、

（杉村縱横）

東清鐵道

（所謂滿州鐵道）

東清鐵道布設の結果として露國は滿州の廣野に沈毅なるスラーブ的殖民を獎勵するに至れり、其名義や、鐵道線路の保護と云ひ守備軍隊の酒保商群と呼ぶ而も其實や永遠固定の移民と云はざる可らず。

所謂殖民なるものに二種あり一を政治的殖民と爲し一を自然的殖民となす。前者は近時各國が奮つて施行する所謂國家殖民政策なるものに起因し、或は人口の過大の結果として或は通商的企畫として國家の保護獎勵に係るものなり。後者は近時稀れに見る處にして或は社會上の困厄を逃脫せんが爲め或は宗教政治上の壓抑を逃れんが爲め他邦に移殖するに至るもの。彼れピューリタンの宗徒がメイ、フラワーなる孤舟に乘じて北米の新邦土に流移したるが如き又は彼れ哀々たる朝鮮人が自國々境を逃れ圖滿江を奔渡して南ウヅリー地方に移殖したるが如き即ち其適例ならんか。

政治的殖民なるもの之を分解すれば二種と爲すとを得ん一を侵略的殖民と名くれば他を平和的殖民とや名づ

けんか、平和的殖民は自國の利益を目的とし併て他國の利益を增進するもの即ち自利利他の大乘的殖民にして世界進運の爲め尤も喜ぶべき善良政策なりと云ふ可き也。然るに侵略的殖民は之に反す、單に自國の野心を目的と爲し敢て他國の利害如何を顧慮せず通商上の進步國交上親密を目的となさず我利〱野望を達せんとを努む、東清鐵道線路に對する露國の殖民は果して如何なる種類と爲すか、曰く國家の保護獎勵に係る政治的殖民なり政治的殖民として果して如何なる種類と爲すか。曰く猛虎の飛躍して羊群に入るが如き所謂侵略的殖民なりとなす。

嘗て東部西伯利總督コルフ將軍の東方殖民を献策するや時の宰相ゴルチヤコフは之を拒否して曰く「我露民を東方に移殖せしめ彼の惡むべき共和的國民や又は社會的人民と交通せしむると甚だ危險なり、露國々家の基礎を破壞し東露獨立の叛旗を飜すもの此裡より生ぜざるなきを保せんや」と、前世紀に於ける外交界の花形役者として英名一世を風靡せしめたる彼れ老獪者の危惧嫌惡したる露國東方移民策は今や東清鐵道布設と共に露國上下の熱心贊同する處となり思慮周密なる藏相ウッテの如き叱咤して其急成を切望しつゝあるに至れり。時勢の變遷とは云へ又以て露國の大方針を窺ふに足らんか。

露國新聞の報ずる處に依れば露國は本年六月迄に滿州移民の爲め二万家族を募集せりと。一家族三人とせんか六万の移民は續々滿州に殖民するに至るべし。一家族四人とせんか、八万のスラーブ或は義勇艦隊に或は東亞滊船會社の滊船に乘じオデッサーを發して第二の故鄕に向ふに至らん。露國は其狀況に應じ、家族每に三百留以上の保助金を下附して之を生活資本と爲さしめ而て地所三千「デシヤチーナー」内外を附與し家屋を給し農具器物等を支給し以て彼等の安意永住を計畫せり。滿州中央の大都會たらんとする哈拉賓の如き若くはゴロデコフの如きスイフンの如きチ、カルの如き東清鐵道に於ける重要なる各市街地は彼等移民の絡繹居住する場所たると明々白々たり。

聽ふに滿州の地や之を其氣候に看んか、白雪山野に鎖み堅氷河流を鎖すの寒威は即ち有り。而も其寒威や之をアムール以上の寒威に比すべくもあらず、況んや時期短く比較的温暖なるに於てをや。之を其產物に看んか、交通の不便、調査の不行屆は即ち在り、而も土地の豐饒產物の夥多なると之を荒蕪瘠土の西伯利に比

すべくもあらず、况んや東清鐵道の開通は滿州大野の自然的寶物を排除するに於てをや、然り氣候にせよ、産物にせよ之れを從來の露國殖民地に比較して優勝なり、西伯利地方の露國殖民に政府の豫想を誤らしめ。カシユガル、キータ地方の露國殖民は政府をして嘆聲を放たしめてけり。去れど露國は滿州殖民に於て其希望を滿足せしめ其目的を貫徹せしむるや必然なり彼れ忍耐克己の精神に富めるスラーブの家族等は樂んで移住せんと欲し喜んで永遠の計畫を立てんと欲し嬉々として松花江岸の墳墓に安眠するに至らん就中氷雪を家と爲し困苦に耐へ山野に育ち勇猛沈毅の性質を有しツアル唯一の臣下とも云ふべき彼れコサツクの如きは天上の樂土として滿州の原野に馬蹄を轟かせ以て東清鐵道線路の安全露國移民の安寧を保護することに熱心す可き也、滿州に於ける侵略的殖民の成功は決して遠き未來にあらざるを信す

世界に於ける金の需要は年々增加せんとす、而も其需要に應ずる金の供給やそれ丈け比例的に增加せざるなり。露國は世界第一の産金國として彼れの尤も誇る處、露國は富源の重要物たる金の産出發見を以て尤も緊要なる事業と爲せり。露國産金の八分は實に西伯利より産出する處千八百九十五年に於ける西伯利産出は六万四千二百ハプードの多額にてありき、而して産金地として著名なるは後貝加州チルチンスクの山地一帶を最となしアムールの下流及びゼーヤ河附近の河床之に次げり露國は皇室收入の財源として一手買入を爲し以て産金事業の發達盛大を希望しつゝあり。

去れは近き將來に於て彼の領地となり彼の自由自在に經營せんとを確信せる滿州地方に對し金礦調査を開始するが如き豈に怪むに足らんや、然れども東三省の山河や依然たる淸領なり。縱ひ名義上のみなりと雖も淸國領土として他國の橫行濶歩を許さざる處となす、露國豈に濫りに傍若無人の擧動を爲すものならんや、彼は一の口實を有せり。口實とは何んぞや曰く東淸鐵道布設に關する契約即ち是れなり。

中國鐵路公司章程（東淸鐵道會社條約）第五條に曰く「本公司は鐵路を布設する外淸國の特許に依り線路兩傍に存在する各礦山及石炭坑を調査し採掘し兼て工作商務の各局を設立す可し」と。

露國は此明白なる條項を口實として己れの欲するまゝ自由に金礦を探査し採掘することを得べし。言を換へて云はゞ露國は東淸鐵道に依り滿州に於ける物質的開發

を施行し其經濟上の光明を輝かし以て東亞に一個の商工國土を造出せしむることを得べき也。

單に線路兩傍の金礦及石炭坑と云ふ。之を日本流に解釋すれば或は一里以內或は線路に平行する區域に限れりとなさん、然れども之を露國外交家の解釋に順はんか、恰も彼の旅順大連九十九ヶ年借租を以て永遠無窮の占領地と了得するが如く其の線路兩傍と云ふは北方アムールの河岸より南方旅順の和尙山麓に至る間を稱するならん、隨て滿州全土の各礦山及石炭坑は悉く露國技師の探查する處となり露國財源の根源となり各國人民の熱心する處とならん而已、既に一昨年より昨年北清事變前に至る迄露國は滿州に向つて金礦探查隊を派遣したりき彼等は軍人を以て組織され一行六十人宛にして各地に數團の出發を見るに至りしと聞く。聽ふに松花江沿岸一帶より滿州內地に進入し或は金山或は銀山或は石炭或は銅坑等到る處之を寫眞に採り之を測量し之を調查して後日の材料と爲せしならん。露國か

東淸鐵道布設の結果として滿州に於ける物質的開發に盡力する又感服せざる可けんや。

コロチル、ブラウチの調查に依るに滿州の總面積は三十六萬二千三百十平方哩にして其人口は一千二百十五萬人なりと云ふ、何んぞ夫れ土地の廣漠にして而も人口の稀少なるや、淸國政權の行はれざる安寧秩序の見るべきなく、交通安全の望む可きなし。收歛の官吏上に在りて暴威を振ひ頑愚の住民蠢爾として保守不進の境に困睡す、河川の縱橫に流るゝあり、されど之を利用して交通の敏活商業の進步を計ることを知らず、土地の豐饒山林の森々夥多の產物を藏するあり、されど之を利用し之を拓地して富源を開き人文の進步に資するを知らざるなり。滿州の土地、空しく彼等住民の支配たらしめんか此一大好邦土たる永久其眞價を發揮し其天與の產物を顯はさゞること必然なり。皇天豈に無用の邦土を世に與ふるものならんや、天與の邦土は永く頑民の支配に委す可らず、よろしく文明の光輝を以て其開發を遂行し以て東亞に於ける物質的文明の進運に資せざる可らず。

東淸鐵道は滿州をして文明の光輝に遇はしめ以て其眞價を示さんとす文明的野蠻國とも云ふべきスラーブ人種の國家は勇進熱走して滿州を開發せんと欲し數万の國民を移住せしめ天與の產物を顯示し文明流の經營を施行しつゝあり。東淸鐵道は滿州をして世界の視線を集め熱心なる注意を引かしむ。東淸鐵道の布設を見ざ

らんか、我國民の滿州に對する注意果して今日の如く熱誠なる乎。啻に政治上のみならず苟くも達觀の志士たるもの滿州の將來は商業上大なる關係あることを豫想せん、彼れ米國の如き東淸鐵道に對し尤も大なる關係を有し將來に於て尤も緊密なる商友邦として滿州を敬重せん、而して其結果世界の二大國家たる米露の握手となりて世人をして或は疑惑せしめ或は歡喜せしむるに至らん。

露は宇内の强國なり米は世界の富國なり、彼は蠻勇鐵血的にして此は寛容平和的なり、一を猛鷲に譬ふれば一は丹頂の白鶴と比すべきか、猛鷲や風雲に飛翔し颯然として森林巖石に翼を收む、白鶴や、旭光に舞ひ男波女波の磯邊に鳴く、其國躰上より之を見んか露は君主專制の標本にして米は共和政躰の標本なり、主權在民は米の國躰にして君主神權は露の國躰なり其人種上より之を見んか、沈毅にして猛剛なるはスラーブの特色にして忍耐敏活なるはヤンキーの特色なり。其國土其人口の點を以て見れば露は米を抜くこと數等、其商工業の發達より見れば米は露を抜くこと數百尺、武は露を以て兄となし富は米を以て兄となす。

夫れ此の如く國躰に於て人種に於て氣風に於て進歩に於て兩極端を示せる二大國に向つて古風なる觀察を下さんか、この兩國や決して接近せざるべく握手せざる可き也然りと雖も現今の時勢は現ナマ主義なり犬と猿と親密となり虎と狐と握手するの顯象は決して珍しと爲さず、靈活靈妙なる國際上の接近は如何なる點より來らんも計られざるなり。變時に於ける國家の接近は外交家の尤も苦心する處平和の時に於ける國家の接近は利益通商の關係を以て尤も普通なりとなす、而も平和的關係や永續して變時に至ることあり是れ政家の尤も潜慮を要する處。

米露の握手は果して何處より來らんとするや吾人は信ず、此二大國家の接近は東露に於て起生しつゝあるを而て吾人は信ず、東淸鐵道及西伯利鐵道に關はる米國の利益的關係は一變して米露の平和的接近とならんとを。見よ西伯利鐵道に要する凡ての材料は悉く之を米國に仰ぎつゝあるを。機關車の如き客車貨車の如き軌條の如き其品物たる多くは之れ米國品にあらずや、東淸鐵道に要する凡ての材料は悉く之を米國品なりと云ふも可。六十四封の軌條の如き堅牢なる機關車の如き凡て之れ太平洋を横ぎり來りしものなり。露國は西伯利に於ける石炭採掘權を米人に許可したり、滿州に於

ける米人の企畫は更に露國の歡迎する處たらん。滿州の開發は東亞に於ける米國の一大得意場を來すべし。眇たる日本の如き或は英獨等と競爭せざる可からざる南清地方の如き彼の重きを置かざる處なり。米國將來の大得意は東邦西伯利に在り。滿州地方に在り。滿州の開發は米露二大國家の接近し握手するに至る媒介たる可き也。

吾人は東清鐵道に關し樂天的觀察を爲せり。之れ吾人が平等的眼光を以て觀察したるが故なり。若夫れ差別的悲觀的觀察を爲さんか或は露國の滿州占領は東亞の危機なりと叫び、或は東清鐵道より來る結果は東洋紛亂の基因なりと論ずるに至らん。

つら〳〵我國現今の對外意見なるものを聽く、何れも餘りに悲觀的に餘りに差別的ならざるやを疑へり。是れ吾人が樂天的觀察を試み以て突飛急進なる世論に對する所以なり。要するに滿州の開發は東亞進歩の爲め慶賀す可き處、而て滿州開發は之を東清鐵道に待たざる可からず。東清鐵道工事の狀況は前號詳記したるが如し。浦汐斯德より滿州哈拉賓に至り旅順口より奉天に來り而て西方カイドロフスクニ至る各線路の落成を見る蓋し遠からざる可きか。政治上に通商上に東亞の多事亦想ふ可きかな。(金華山人)

各國の結婚年齡

政府の結婚を許可せる年齡

墺地利	男	十四年以上	女	十四年以上
英國	男	仝上	女	十二年
獨逸	男	十八年	女	十四年
白耳義	男	仝上	女	十五年
西班牙	男	十四年	女	十二年
佛國	男	十八年	女	十五年
希臘	男	十四年	女	十二年
匈牙利	新教徒男	十八年	仝女	十五年
	舊教徒男	十四年	仝女	十二年
葡萄牙	男	十四年	女	十二年
露西亞	男	十八年	女	十六年
瑞西	男	十四年	女	十二年

海外新潮

海外大勢

戰敗後西班牙の再興

十九世紀は逝けり、一世紀は即ち之れ一百年、一百年の長き其間に於て榮枯盛衰の變ある元より怪むに足らずと云へども、過去一世紀の間に於て西班牙の煩悶せる運命の如きはまた異數と謂ふ可きなり、一時は三八時中嘗て太陽の其領土を照らさずと云ふことなしとまで誇稱せられたるサシモノ大殖民王國も當路の施政其處を得ず、朝に一を失ひ夕に二を失ひ、恰も孤城落日の如く米國と戰ひ一敗地に塗れてまた起つ能はず、遂に玖馬を失ひ非律賓を奪はれ、西印度并に太平洋中また一の領土を有せざるに至る、吁憐む可からずや。

更に轉じて内情を顧ればドン、カーロスの亂は今に至つて尚絶えず、内亂は何時爆發するの恐なしとせず、現に數多の府縣に於ては戒嚴を布告して憲法の保障を中止し以て之れが防壓に齷齪たり、また憐む可からずや。

夫れ此の如く西班牙現今の境遇は頗る憐む可きが如しと云へども又一方より之れを觀れば微かに一道の光明を認むることを得可く未だ必しも悲しむに足らざるが如し、今試みに政府の財政現況を見るに昨年度に於て一百四十万弗の剩餘を生じ、本年度の歳入に於ては更に九百三十万弗の増加を生ず可き見込なりと云ふ、同國の各新聞は今回の西米會議（西班牙人の亞米利加諸國と母國との會合にして西班牙の首府マドリッドに開けり）に頗る重きを置き、之れを以て母子の間に親密なる關係を開發するに於て頗る有効なるものと認めたり、若夫其國際的地位に至りては今尚過渡の時代にありて未だ安定に至らずと云へども、西班牙人は心私かに殖民地の亡失を以て却て物怪の幸となすものゝ如しと云ふ、近刊インタナショナル、モンスリ紙上に寄せたるホートン氏の所論中に曰く

若夫此に一外人なり西班牙人に向て微細の點に亘りて之れを問はんか、彼等は尚或は合衆國の不正なる干渉、英國の薄情、并に大陸諸國の確實なる干渉を與へざりしを難ずることあらんも、之れ等は凡て只所謂西班牙氣質の表面を飾るものに過ぎずして、彼等相互間にありては皆殖民地の亡失に依りて却て重荷を卸し得たることを告白せざるなし、蓋し殖民地は從來本國に取りて財政上至大の重荷となり、陸兵或は海兵として本國の壯丁を吸收し、本國各種の産業をして萎微振はざらしめ、加之殖民地行政の腐敗は又引て本國の政界を腐敗せしめたり、彼等は殖民地より得る所之に向て致す所と相償はざるを自覺せり、此思想は今後彼等の視聽をして專ら本國に傾注せしめ全力を擧げて礦山其他の富源を開發せしめ、商業貿易に於ても亦新生面を開き遂に新なる國際的地位を開拓するに至らん、西班牙の新境遇は只に西人米國と商業上并に政治上の親交を温むるに便なるのみならず、又同時に合衆國と互惠條約を結で大に便益を計ることを得可し……又同じ理由により西班牙は今後從來の競爭者或は面倒なる非律賓の隣邦即ち獨乙、日本、支那、露西亞等との交際に於てまた何等の障礙を見ざる可しと云々

中央亞細亞に於ける英露

露國の極東に於ける領域幷に勢力は輓近に於て非常なる膨大を來し、露國は恰も全力を擧げて此に傾注しつゝあるが如き觀ありと云へとも、其ヒマラヤ地方に於ける經營は毫も之れが爲めに弛寛する所あらず、露都のピードモスチーの報ずる所によれば露國の使節は西藏に於て宗教界幷に政治界の元首たるダライ、ラマの優待を受けて互に交情を溫め、ラマが返禮として派遣せる使節は露都に於て皇帝親しく之れに謁を賜ひたりと云ふ、今之れに對する倫敦エキスプレスの所說を見るに。

之に由て之を觀れば我英國の對手たる露國の外交が如何に間斷なく活動しつゝあるかを知るに足らん、露國の注意を吸收すること彼が如く大なりし北淸の事變も尙其ヒマラヤ南下の施設を弛寛するに足らざりしなり、抑も印度の疆界上西藏が如何に重要なる關係を有するかは今更多辯を要せざる所にして、已に一世紀の昔に於てワーレン、ヘスチングは早くも此に見る所あり大にラマとの交情を厚くするに力めたりしが、惜む可し中頃甚だ疎情に流れたり、西藏は富國にして其貿易亦甚だ輕視す可らざるものあり、而して印度は頗る之に接近せるに拘らず、貿易は却て遠く露國に向て開拓せられ、露國の使節は歡迎せらるゝも英國は拒絕せらる、亞細亞人或は英國を以て衰退しつゝあるの國民となさん。

境上國(バッファー、スゲート)たる亞富汗斯坦の態度は常に兩國の注視を怠らざる所なるが、同國は明かに事變を豫期して頗る警戒を加へつゝあるものゝ如し、露都新聞ノヴォエー、ヴレミヤの所論に曰く、最近の英國新聞によれば亞富汗斯坦は今や露國に對する防備に齷齪たりと云ふ、元老會議は戒嚴を布かんとし豫備軍は召集せられ、馬匹及び穀物の輸出は禁止せられ又同時に廣大なる穀倉はカブール、カンダハル、及びヘラットに於て建設せられたり、印度カルカッタの新聞パイオニーアの說によれば凡て此等の活動は露國の侵入に備ふるものなりと云ふと雖、之れ或は他日英國に對するの武器たるなきを保せんや。

伯林のフォーシッセー新聞は印度大守カルゾンが印度王族の特許を得ずして國外に出づることを禁止したるは彼等をして英の敵國と相通ずることなからしむるに於て効果ある可しと云ふ、加之又同時に先決の活劇⬜︎場たるジブラルタル、マルタ幷に其他の印度航路に當れる要所は不意の打擊に備ふる準備怠りなしと云ふ。

二十世紀の外國布教

十九世紀の與へたる敎訓

十九世紀は耶蘇敎の歷史に於て實に外國傳道を以て特筆大書す可きの世紀にてありき、而して其特質とも謂ふ可きは布敎のため彼等が所謂異敎國に渡航せる男女宣敎師の數の非常に多大なりしにあり、過去一世紀の間に於て得たる幾多の經驗は取て以て將來の行動に資す可きもの亦少からざる可し、今メリアム氏が米國評論の評論に寄せたる論文の大要を綜記すれば則ち左の如し

吾人が前世紀に於ける經驗より得たる所の主要なる點は

第一、各國民に對する傳道は主として其先方國人の手によりて之れを行ふ可きこと。

外國傳道者の爲したる貢獻中最も主要にして効果の著しかりしは創業者幷に指揮者としての結果なり、直接傳道者としては改宗せる國人の効果遙かに大なるを認めたり。

第二、其寺院會堂は自ら助け自ら支ふるの必要なること。

この必要は二十世紀に於て益々急なるを見る可く、斯の如くにして始めて耶蘇教は各國に確立せらるゝことを得可し。

此等の經驗上より二十世紀に於ける傳道事業は左の改良を見ざる可からず。

第一、其國々の信者并に寺院の責任をして一層重からしめざる可からず。

此方針に從へば印度并に日本に於けるが如く宣教師并に教務をして全然獨立せしめ、以て事業の發達を妨ぐることありと云へども、斯る運動は寧ろ獎勵す可きなり、之れを國人の手に放任すれば時に或は失態を演ずることなしとせずと云へども、拱手して外國の指導及び資金に依賴せしむるが如きは斷じて不可なり。

第二、然とも又一方に於ては之れに對し益々同情并に補佐を與ふることを怠る可からず。

福音の說教は之れを國人の手に委すると云へども多くの資金と勵精を要する遠大の事業例へば投藥、飜譯并に耶蘇教文學の注入の如きは大に助力を與へざる可からず、

第三、宣教師は說教の才よりも寧ろ教育并に事務に長けたるものを採ばざる可からず。

傳道事業に於ては堪能なる事務の才を要すること從來有數の說教師が事務の才なき故を以て屢失敗を招きたるによりても明なり。

第四、傳道師の駐在は次第に其數を減ず可し。

上述の方法により事務の範圍を次第に國人に讓るときは之に應じて外國傳道者の數を減ずるとも毫も事業の澁滯を來すことなかる可し、經濟上に於ても外國傳道者一人の費用は以て十人の國人宣教師を得て餘りある可き也

第五、耶蘇教國よりの說教巡囘は其人員に於て又其度數に於て大に增加せらる可し。

駐在宣教師は只糊口の爲めに說教するに過ぎずして其効果の見る可きもの少なし、之に反して巡囘說教は說教の外別に大に信仰を鼓吹するの力あることと印度及び日本に於ける從來の成績に徵して明なり

第六、現在の異教國に於て此等の方法全然實行せらるゝに至らんか外國傳道者の永久駐在は最早や其必要を見ざるに至る可し。

以上改良の結果として左の三項を結論することを得可し、

第一、外國傳道組合は永久的性質のものにあらず。

第二、傳道者家族問題は遂に終局の解決を見ることを得可し。

家族の離隔殊に伺父母の慈愛を要す可き幼兒の離隔は傳道行政の上に於て最も困難を感ずる所なるが、上記改良の結果として傳道者終生駐外の必要止み、從て親子離散の不幸を見ることなかる可し。

第三、傳道行政の組織は傳道方法の變更と相應ず可し。

海外雜纂

非耶蘇教國たる日本と黃難

イザベラ、ビショップは有名なる東洋旅行家にして其極東に關する著書

も亦少からず、英國ニューカッスルに開會せる寺院會議に於て日本の宗教事情に關し一場の演說を試み大に世人の視聽を惹きたり、ビショップは日本に於ける耶蘇教の不成蹟を以て無宗教的風潮に歸し業に已に儒教の訓戒を逸出しながら、而かも尙耶蘇教の福音を迎へざる日本國は之れ實にエルロー、ペリル即ち黄禍なり、其文化の進運は實に驚く可きものありと云へども、尙宗教界にありては耶蘇教の福音に俟つの大なる中央亞非利加と等しかる可く或は寧ろ其上に出でん云々と說きたり、神戸クロニクルは之を駁して曰く

ビショップの如き膚き觀察を以てして尙道德は獨り耶蘇教の下に於てのみ保たれ、之れに歸依するにあらずんば即ち黄禍の恐ありと云ふは實に不可思議千万なり、思ふに耶蘇教の英國又は其他の歐洲と非耶蘇教の日本を比較すれば其道德に於て大に優劣あり故に大に之れが傳道に力めざる可らずとの論法なる可し、若し同會議に於て耶蘇教鼓吹のため宣教師を日本に增派せんと欲せば敢て之を止むるの理由なし、恐くは彼等は英國に於ける佛教の布教師よりも日本に於て厚遇せらるゝなる可し、然りと云へども日本を以て中央亞非利加の蠻族と同列にあるが如く主張するに至りては寛假も亦甚だしと云ふ可し、斯る立論は必ずや比較に依らざる可らず幾多の日本人は親しく歐米の社會を觀察したるも一人として其道德の本國に比して優れるものあるを感じたるものなし、吾人は敢て云はんと欲す、生命財産の安全日本に優れるの國あるを見ず、無賴漢の數日本よりも少なき國を見ず、又個人間殊に下層社會に於ける相助の美風日本に於けるが如きは蓋し多く類例を見ざる所なり、列國各々固有の惡俗あり豈獨り日本に於て之れ無きを期せんや、而かも英、米、或は獨乙に比して敢て遜色あるを見ざるなり、從軍宣教師として北清に派遣せられたる日本の耶蘇宣教師歸途大阪新聞の一記者と同車し、之に語て曰く、支那人が歐米軍の下に於てよりも却て邪教國たる日本軍の下に生命財産の安全を保ち、婦女は辱を免れて團欒しつゝある奇妙の現象は君も亦之れを目擊したりやと、然り而して吾人も亦親しく實地に就きて北京に於ける日本軍の占領區域は清人が意を安じて常業に服しつゝある唯一の場所なることを確めたり、先年の戰爭に於ても同樣の現象ありしは從軍者の等しく認むる所なり……私窃の如きも日本軍中には殆ど全く見ざる所なり、之れ清人の喜んで日本軍の爲めに勞を取り却て其侵入を助けしによりても明なり……夫れ此の如し、然るに尙耶蘇教は唯一の人道にして之に歸依するにあらずんば人道は得て望む可からずと云ふことを得るか、云々

列國兵の蠻行に就て

北清に於ける列國兵の蠻行は已に早く我新聞雜誌の大に攻擊を試みたる所なるが、今や歐米の社會に於ても亦漸く非難の嘖々たるものあり、倫敦のジ、スフヰーア、并に、ジ、デーリ、エキスプレスの通信員リンチ氏は連合軍の蠻行は實に想像の外に出づるものあるを說き、日米軍は比較的謹愼なりと雖とも今回の蠻行は各國軍を通じて之れを見ざるなきを報ぜり、氏は神戸クロニクルの代表者に語つて曰く、

蠻行の最も甚だしきは露國兵なり、余は北京進軍の途中に於て多くの支那婦人露國兵のために迫はれ其辱めを免れんとして城壁を飛び降り、爲めに骨を碎きて呻吟しつゝあるを見たり、又余は露國兵の十歲或は十一歲の小兒を恰もフートボールの如く蹴りつゝあるを目擊したり、露兵の劍或は銃を以て殺戮を恣にするは常に絶ゆる時なし、十五人の露兵十一歲の少女を輪姦して死に至らしめたるは有名なる事實

なり……斯の如くにして連合軍は支那人ささへ見れば手當り次第に之れを虐殺したれば今度の戰爭は實際に於て獨乙帝の望めるが如く一人の負傷者なく又一人の捕虜なき戰爭にてありき云々。

而して新聞紙の非難攻擊は掠奪に向つて作鋒最も銳なりウヱストミンスター、ガゼットは叫で曰く、

掠奪の流行蔓延は恰も疫病の如く、先づ兵士の間に初まり忽ち蔓延して將校に及び文官に傳り更に傳播して宣教師幷に公使館員に及びたり此に再び前記リンチ氏の實見談を見るに氏は宣教師の掠奪を以て最も非道暴虐なりさせり曰く、

最も巧妙に私奪を利用したるものは宣教師なり、私奪禁止の命ありて以來英國兵士の掠奪は漸く止みたりと云へさも、宣教師は依然さして私奪を恣にせり、即ち彼等は淸人の一大家屋を橫領し、手當り次第に貨財を掠奪して之れを此に堆積し、以て花客を待ち從て賣れば從て掠奪し來り、始終歸依の淸人を使役して非道の暴利を貪れり、現に余はこの宣教師より百廿五弗を出して貂皮の外套を買へり……

リンチ氏は此等非道なる宣教師の竊盜は歸國の上之れを出版して公衆に示す可きを契へり。

朝鮮の憲法

韓國に憲法の成典ありさは世人の多く知らざる所又知るを要せざる所なり、蓋し韓國の制度たる法文の上に於ては井然整頓せるこさ想像の外に出で、而かも實際に於て其紊亂せるこさ亦吾人の意表に出づるものあり、法文は爲政の準繩規矩にあらずして只反古死文のみ、而も尙吾人が敢て此に之れを紹介せんさ欲する所以は只讀者が際後の一興に供せんがためなり、抑もこれ先年法規校正所の制定せる所にして名けて大韓國國制さ稱し全部九ヶ條よりなる、日本文に譯すれば即ち左の如し。

第一條　大韓國は世界万國の公認したる自由獨立の帝國なり。

第二條　大韓國の政治は由前は即ち五百年傳來し由後は即ち万世に亘りて變ぜざる專制政治なり。

第三條　大韓國大皇帝は無限の君權を享有す公法に所謂自立政體なり

第四條　大韓國臣民にして大皇帝の享有する君權を侵損する行爲あらば其已行さ未行さに論なく臣民の道理を失する者さ認む。

第五條　大韓國大皇帝は國內の陸海軍を統率し編制を定め戒嚴解嚴を命す。

第六條　大韓國大皇帝は法律を制定し其頒布さ執行を命じ万國公共の法律に效倣して國內法律も改定し大赦特赦減刑復權を命ず公法に所謂自定律令なり。

第七條　大韓國大皇帝は行政各府部の官制と文武官の俸給を制定或は改正し行政上必要の各項は勅令を發す公法に所謂自行治理なり。

第八條　大韓國大皇帝は文武官の黜陟任免を行ひ爵位勳章及び其他の榮典を授與遞奪す公法に所謂自撰臣工なり。

第九條　大韓國大皇帝は各有約國に使臣を派遣駐紮せしめ宣戰媾和及諸般の條約を締結す公法に所謂自遣使臣也。

前條に所謂公法とは公法會通のことにして書籍の名稱なり蓋しこれ獨乙の公法學者ブルンチュリーの著述にかゝるジ、セオリ、オヴモダーン、ステートを、漢文に飜譯したるものなり、其中に云へるあり、

邦國之主權有五、自立政體一也、自定律例二也、自行治理三也、

自援臣工四也、自遣使臣五也、凡此五者若行之不違公法則他國不得擅預、
前條に引用する所は即ちこれなり、其教科書的なる所我國民法にさも似たり。

玉屑金砂

◎獨逸の　醫師、頃者老幼强弱平均して文明人の病氣にかゝる日數は一年間に九日と算せり

◎右手の　觸覺が左手より銳敏なるは通例なり、然れども炎と熱に對してはその反對に左手の方銳敏なり

◎人の面　は左側と右側いづれかに强弱の差あること宛も手に左利きと右利きとあるが如し、精密に檢査すれば鬚髮の生へ方に（其多少及生ゆる速力）相違あり、勿論强き方多くして早し

◎聽覺の　機關は動物皆其頭部に在りと思ふべからず、蟋蟀其他昆蟲の種類は前足又は、羽のところに耳を有するものあり

◎人種の　色別けは永久のものと思ふべからず、亞米利加のニグロッは移住以來混血せざるものまでも代々白くなり行き、其故國亞弗利加の同人種とは容易に區別し得らるゝ樣になれり

◎鳥類を　除ひて人間は動物中其體に比して最も長き脚を有す、其足趾も人間程廣きものなし、且つ一脚にて全體を支えて立ち得るは人間のみ

◎少しも　泳ぐことの出來ぬ動物は、駱駝のみ

◎シャボテン草は決して無用の植物に非ず、亞刺比亞人の沙漠を超ゆるに此植物に依て食料を取り飲料を取り、且つ駱駝及び家畜の秣を得るなり

◎濠洲の　土人、十八世紀の終りには一百万人と測定せられしもの、十九世紀の終りには十万人となれり

◎少食人　種は印度人なることを前號に紹介し置けり、その反對なるは露西亞人なるべし、特に露國農民は一日に七回又は八回色々の名目をつけて何かを胃の腑に入れねば承知せぬ人民なり、則ち毎二時間目に食事をなすなり

◎千八百　九十六年、世界各國に製造せる紙卷煙草のみにて四十一億五千万本と算せらる、一本づゝ列べて長くすれば十八万四百二十一哩、地球を七週して猶餘りあり

◎懷中時　計一年間休みなく動かせば、キチ／＼と鳴る回數一億六千零十四万四千回

◎大學の　最古きは埃及カイロー府にあるエルアイハルと名くる回々教唯一の大學校なり、創立以來已に千年以上

◎牛津大　學は百九十種の國語を印刷し得る活字を有す

◎タイプ　ライターを使用する國は漸次多くなり、本元の英字は素より、佛、獨、露、伊、蘭、西、瑞典等を初め歐洲各國大概その國語を此機械に應用す、現今のところ最も面倒なるは露西亞字なり到底永久に望みなきは三万の字數を有する支那字なりとす、漢字保存論者には文明世界に於ける時間と勞力の節減は到底望むべからず

◎國民教　育の普及せるは獨逸を以て第一とす、然れども一百年前の獨逸は最も憐れなる教育にて、地方學校教師の大多數は給料のみにてパンを得る能はず、樂器を携へて戸毎に門附けして一錢二錢の合力にて辛うじて生活せり

◎文明國　と稱する國民は目下教會や學校や文學や平和と建設の爲よりも、軍艦や銃器や破壞と殺戮の目的の爲に二倍の負擔を受く

◉雷雨の日、ジャバ島にては一年間九十七日の平均、伊太利にては三十八日、白耳義にては二十一日、和蘭は十八日、佛蘭西墺地利は十六日、西班牙葡萄牙は十五日、英國と瑞西は七日

◉アルプス山間の氷河五哩以上の長を有するもの二百三十個

◉古錢蒐集家の中にて米國貨幣中最も價高きものとせるは千八百四年の一弗銀貨にて、其數甚た少く、現今の時價一個一千弗、則ち二千圓此頃一個二千四百圓にて讓り渡せしものあり

◉切手蒐集家の貴重せるは全く米國にては一千八百四十六年に發行せるブラッルボロと稱するもの

◉愛蘭人の發明にかゝる「情人呼覺まし機」と稱する自鳴鐘あり、毎夜十時に特別に高き音を發し同時に二個の小扉開かれて裡より大禮服を着けたる人形顯はれ出で、手に「グッドナイト」と書せる札を捧げて敬禮する仕掛けなり、近來珈琲屋などの需用多し

◉ロンドンの中央セントポール寺院を中心として半徑六哩の圓を描くとすれば其圓形中に二百五十六個の停車場あり、若し延長して十二哩とすれば約四百の停車場其の中にあり

◉全市の地下線を除きて、空中線のみにて電線の延長一萬哩

◉犬を顧客とせる專門の裁縫屋あるは巴里のみ、貴婦人飼養の小犬の修飾品を專門に供給するなり

(博識先生)

A Pessimist.

A pessimist, says Puck, is a man who looks upon sunshine only as a thing that casts shadows.

東京の雜誌界

千里行者

我國文化の開發は首府を中心として漸次其波動を地方に及ぼし京都、大阪が東京の思想界と四五年づゝ遲れて進むものならば沖繩や北海道は十年も二十年も遲れるのである、併し遲れたからにもせよ地方人士の擧げて首府の潮流に注意し之が觀察を爲し得る所以のものは全く新聞と雜誌の効能と云はねばならぬ、東京の新聞界は人の多く知るところ、試みに東京の雜誌界を紹介しよう

東京の雜誌は通常三百種と稱せらるゝも實際は二百四十種を出でない、勿論報告や廣告代りの小册子に勿躰振りし名をつけて其筋に屆け出でたるものまで一切統計すれば三百にも三百五十にも上るが、これらは眞面目に雜誌と云ふ名をつけられぬから全く之を省き、左の表を作つた勿論普通の雜誌にて此表中に漏れたるも

のもあるが、その勢力有るものゝ全部と東京雜誌界の大多數を網羅せることは堅く保證するところである。

東京雜誌表　三十四年二月五日調査

社會、政治、經濟の部

中央公論	月一回(一冊十二錢)	本郷四丁目五番地	
英文東亞	仝(十五)	仝上	
太陽	仝(三〇)	日本橋本町	博文館
日本人	二回(十二)	神田雉子町	政教社
天地人	一回(十)	神田錦町一、十、	三才社
東京評論	一回(六)	牛込、南町、三十	
日本主義	一回(十)	芝、金杉濱町、三五	
外交時報	仝(十五)	牛込早稻田	仝社
社會	仝(十二)	芝、新錢座町	
政友	仝(十五)	芝公園	立憲政友會
國光	仝(十)	京橋築地	國光社
東京經濟雜誌	每週(十)	京橋彌左衛門町	同社
東洋經濟新報	三回(十)	牛込東五軒町	仝社
勞働世界	二回(三、五)	神田三崎町	
太平洋	週刊(六)	日本橋本町、三	
經世時報	一回(十)	芝公園内	精華社
明義	一回(一二)	本郷西片町	
革進	三回(七)	京橋南鍋町	
社會時報	三回(三)	日本橋上槇町、一	
三田評論	無定期(九)	豐多摩郡下澁谷四十八	
彰善會誌	一回(五)	麻布市兵衛町	
新世界	一回(三、五)	京橋築地二丁目	
東洋時論	二回(八)	麹町有樂町	仝社

此外監獄矯風等に關する四五の雜誌あり

法學の部

法學協會雜誌	一回(十二)	本郷帝國大學内	同社
明治法學	仝(十)	神田駿河臺	明治法學會
法律新聞	每週(三)	日本橋本銀町	同社
判例彙報	一回(十五)	麹町飯田町	同社
法政新誌	仝(十)	神田三崎町	法政學會
市町村雜誌	仝(十)	京橋弓町三	
法學新報	仝(十)	神田錦町二の二	

此の外四種計りあり

宗教の部　佛教　基督教　神道

佛教	一回(九)	淺草區吉野町十三	佛教學會
新佛教	仝(七)	駒込片町十六、	佛教清徒同志會
通俗佛教	仝(八)	神田駿河臺	光融館
禪	仝(九)	仝上	
通俗佛教新聞	每週(二、五)	芝愛宕町一の二〇	
明教新誌	隔日(十六)	京橋三十間堀	同社
精神界	一回(十)	本郷森川町一	浩々洞
淨土教報	三回(三)	小石川表町一〇五	淨土教報社

十善寶窟	一回	(八)	小石川目白　十善會
政教時報	三回	(二、五)	本郷森川町一　政教時報社
加持世界	一回	(七)	小石川大塚坂下町十七
三寶叢誌	一回	(十)	京橋築地三丁目　令知會
宗報	仝		芝公園七號　曹洞宗務局
日宗新報	仝		荏原郡池上村
三寶	仝	(二)	麻布飯倉五丁目　森江書店
勝友叢誌	仝	(六)	巣鴨千八百八十五番地
法話	仝	(三)	本郷六丁目哲學書院
是眞宗	仝	(四、五)	仝上
寶鐸	仝	(一、五)	駒込吉祥寺内
傳道	仝	(一、五)	芝露月町　鴻盟社
日月	仝	(十)	牛込横寺町二十番地
新世紀	一回	(七)	神田美土代町三丁目三
基督教新聞	毎週	(三)	赤坂榎坂町五　基督教新聞社
正教新報	二回	(四)	神田駿河臺北甲賀町　愛々社
六合雜誌	一回	(九)	芝三田四國町　ユニテリアン協會
護教	毎週	(三)	豊多摩郡角筈村
基督教週報	毎週	(三)	北豊島郡瀧ノ川村
警世	二回	(六)	巣鴨一六二三　警世雜誌社
新人	一回	(五)	神田錦町一ノ八　新人社
眞理	一回	(七)	小石川上富坂町二三　世光社
東京毎週新誌	毎週	(四)	赤坂榎坂町五番地　同社
聖書研究	一回	(十四)	豊多摩郡淀橋　同社
福音新報	毎週	(九)	京橋釆女町　警醒社
大界傳道			巣鴨　福音同盟會
日曜叢誌		(五)	麻布飯倉　聖教社
佛教毎週新聞	周刊	(二、五)	芝　佛教毎週新聞社
福音叢誌	仝	(八)	京橋釆女町　警醒社
大道叢誌	一回	(十)	駒込吉祥寺町　仝社
觀國			麴町有樂町三ノ二
全國神職會報		(五)	本郷五丁目　會通社
神道新誌			豊多摩郡中野町　同社

教育の部

教育時論	三回	(八)	神田美土代町　開發社
教育學術界	一回	(十二)	神田表神保町二　同文館
教育實驗界	二回	(十)	仝上
兒童研究	一回	(十)	牛込、矢來町、三
東京市教育時報	仝	(十)	東京市役所内　東京市教育會
教育公報	仝	(十二)	神田一ッ橋　帝國教育會
日本の小學教師	仝	(十)	神田表神保町一　國民教育學會
教育新誌	二回	(六)	神田南甲賀町　公論社
教育月報	一回		牛込加賀町　同社
教育報知	二回	(八)	神田千代田町　仝社
教育	一回	(十)	神田高等師範學校　茗溪會

文學、美術の部

帝國文學	一回	(十二)	京橋銀座圖書株式會社
新文藝	仝	(十一)	神田表神保町 東京堂
文庫	仝	(十二)	神田 內外出版協會
活文壇	仝	(九)	神田竪大工町五
新聲	仝	(十)	神田錦町二 新聲社
明星	仝	(二五)	麹町上六番町四十五
ほとゝぎす	仝	(十五)	神田猿樂町三一
新小說	仝	(二〇)	日本橋通三丁目 春陽堂
文藝倶樂部	仝	(二五)	日本橋本町 博文館
同志文學	仝	(四五)	本鄉新花町 同 社
今文	仝	(十)	神田駿河臺袋町 古今文學會
日本美術	仝	(十五)	下谷初音町、日本美術院
新詩綜	仝	(十)	麹町三番町五十三番地
意匠世界	仝	(三〇)	日本橋堺町九
國華	仝	(一三〇)	京橋彌左衛門町 國華社
考古	仝	(八)	神田鎌倉河岸 東洋社
評釋界	仝	(八)	神田淡路町一 四海堂
めざまし艸	仝	(十二)	本鄉元富士町 盛春堂
こゝろの華	仝	(仝)	神田表神保東京堂發賣
芭蕉新聞	二回	(八)	麹町飯田町 仝 社
美術畫報	一回	(二五)	神田淡路町 畫報社

此外二三の文學雜誌あり

科學學會の部

哲學雜誌	一回	(十二)	本鄉六丁目 同 社
言語學雜誌	仝	(十)	本鄉駒込曙町十五番地
學士會院雜誌	仝	(八)	上野公園 學士會院
慶應義塾學報	仝	(十)	芝三田 慶應義塾
史學界	仝	(九)	神田裏神保町 富山房
國學院雜誌	仝	(十五)	麹町飯田町五 八 國學院
歷史地理	仝	(八)	本鄉彌生町三 歷史地理研究會
早稻田學報	仝	(十五)	牛込 早稻田學報社
史學雜誌	仝	(十一)	東京帝國大學內 史學會
日本弘道會雜誌	仝		京橋南鍋町一丁目 日本弘道會
東洋學藝雜誌	仝	(十二)	神田裏神保町 敬業社
國士	一個	(十)	小石川下富坂町十八 造士會
地理と歷史	仝	(八)	神田裏神保町 三省堂
東洋哲學	仝	(十一)	小石川原町 東洋哲學會
體育	仝	(十)	麹町飯田町 日本體育會
地質學雜誌	仝	(十二)	本鄉六丁目 同 會
地學雜誌	仝	(十)	京橋西紺屋町 同 會
人類學雜誌	仝	(十二)	帝國大學 人類學會
植物學雜誌	仝	(一〇)	神田裏神保町 敬業社
博物學雜誌	仝	(十七)	神田五軒町一
動物學雜誌	仝	(二〇)	神田裏神保町 敬業社

中庸	仝	(六)	麹町下六番町十七	
統計學雜誌	仝	(八五)	牛込船河原町	
東京物理學校雜誌	仝	(七)	神田	仝學校
國家學會雜誌	仝	(十二)	東京帝國大學內	仝會
東京協會々報	仝		芝櫻田本郷町	

數學に關するもの等此外二三種あり不詳

女學の部

女學雜誌	一回	(十)	巣鴨庚申塚	同社
女鑑	二回	(九五)	京橋築地	國光社
女學世界	一回	(二〇)	日本橋本町	博文館
女子の友	仝	(十)	神田鎌倉河岸	東洋社
日本婦人	仝	(十五)	麹町元園町	帝國婦人協會
婦人雜誌	仝	(四)	日本橋區橘町一	仝社
淑女	仝	(八)	四谷南伊賀町六	紫鸞社
姫百合	仝	(九)	神田北神保町三番地	
女學の枝折	仝	(十)	神田一ッ橋	女子講習會
をんな	仝	(十四)	麹町土手三	大日本女學會
裏錦	仝	(六)	神田駿河臺	仝社
令德	仝	(十五)	神田和泉町一	
婦女新聞	週刊	(二五)	本所横網町一の十九	
法の母	一回		小石川目白	僧園正法婦人會

兵事之部

兵事雜誌	二回	(七)	赤坂丹後町廿六	
軍事新報	每週	(三)	市ヶ谷	軍事新報社

少年及外國語研究の部

中學世界	一回	(十五)	日本橋區本町三	博文館
少年世界	仝	(八)	仝	
今世少年	二回	(八)	日本橋通新石町	春陽堂
少年議會	一回	(九)	神田千代田町	博報堂
中學英文	二回	(五)	神田雉子町卅二	岡崎屋
作文倶樂部	一回	(六)	芝松本町	文學館
日本英字新報	二回	(九)	神田東京英語專修學校	
實用英語	二回	(九)	神田豎大工町	大學館
イーストレーキ英語新報	一回	(十)	神田西小川町	同社
英語世界	二回	(五)	神田裏神保町	同社
小國民	一回	(七)	京橋檜屋町	北隆館
穎才新誌	仝	(六)	神田美土代町	仝社
英文青年	二回	(八五)	麹町	ジャパンタイムス社
少文豪	一回		神田今川小路	仝社

此外獨逸語學雜誌等三四種有り

醫界の部

醫海時報	週刊	(六)	南足立郡千住町	同社
公衆醫事	一回	(六)	京橋南鍋町	同會
私立衛生會雜誌	一回	(二五)	京橋宗十郎町	
婦人衛生雜誌	仝	(一〇)	牛込矢來町	仝會

日本醫事週報	週刊（一五）	北品川宿二四九	
中外醫事新報	二回（十五）	日本橋蠣殼町二ノ十四	
東京醫事新報	週刊（十）	京橋南鍋町二ノ二	
濟生學舍醫事新報	一回（十七）	本郷湯島四丁目	
醫事新聞	二回（十五）	本郷元町二	
順天堂醫事報告	臨二回（十）	本郷	順天堂

此外藥學に關するもの赤十字社に關するもの等三四種あり

實業の部　商業工業農業其他

通商彙纂	二回（二〇）	京橋新肴町	元眞社
日英實業雜誌	一回（一〇〇）	京橋出雲町	東洋出版會社
工業雜誌	二回（十）	京橋區尾張町一丁目	
釀造雜誌	一回（十二）	日本橋區本材木町	同社
水産	仝（十五）	芝三田四國町	水産社
製絲實驗新報	一回（八）	小石川戸崎町	同社
工學會誌	仝（十）	京橋山城町	同社
内外茶業新報	仝（十）	京橋宗十郎町	茶業組合
家禽雜報	仝（八）	神田錦町三丁目	
機械雜誌	仝（十）	京橋山城町	工業倶樂部
保險雜誌	仝（十）	京橋山城町	保險學會
農事雜誌	仝（八）	神田須田町	仝社
交通世界	仝（十）	神田錦町一丁目	仝社
東洋雜貨通報	一回	日本橋馬喰町	仝社
興農雜誌	仝（五）	赤坂溜池	興農園

實業新報	一回（九）	南葛飾郡大島村	同社
電氣の友	一回（十）	京橋南金六町	電友社
鐵道時報	（五）	京橋釆女町、	同社
外國貿易月表	一回	京橋中橋和泉町	鳳陽堂
農業雜誌	三回（五）	麻布本村	學農社
商界の少年	一回（八）	神田裏神保町	三省堂
簿記世界	一回（九）	神田美土代町	簿記研究會
實業の日本	二回（十）	麹町有樂町三	仝社
實業通信雜誌	一回（五）	麹町土手三番町	
工業化學雜誌	仝（十五）	神田三崎町	仝社
商業世界	仝（十）	神田表神保町	同文館
殖業新報	仝（五）	日本橋箔屋町十四	
實業評論	仝（十）	府下南千住町	
工業化學雜誌	仝（十五）	淺草炭前	東京工業學校
工談雜誌	仝（十五）	築地	工手學校
實用商業學科	二回（十五）	日本橋本石町	上田屋

此外商業鑛業牧畜肥料等に關して五六種有り

雜の部

風俗畫報	一回（十二）	神田通新石町	東陽堂
團々珍聞	毎週（五）	京橋銀座四丁目	同社
繪畫叢誌	一回（十五）	神田新石町三	
自轉車	一回（七）	神田小川町	快進社
獵友	仝（十六）	京橋釆女町	狩獵協會

歌舞伎	仝	(十)	京橋南鞘町	同社
圍棋新報	仝	(十)	下谷徒町	同社
圍棋初學獨習新報	仝	(十)		仝社
人情世界	三回	(三五)	神田田代町	日本館
旅行案内	一回	(八)	京橋鎗屋町	庚寅社
寫眞月報	仝	(八)	日本橋本町	小西店
流行	仝	(十五)	京橋彌左衛門町	仝社
海	仝	(五)	京橋築地三	
煙艸雜誌	仝	(十)	京橋新肴町岩崎方	
よろづ報知	三回	(三五)	京橋山下町廿三番地	

通計二百十五種是を各區別すれば

神田區	六十	小石川區	七
京橋區	三十七	下谷區	四
本郷區	二十四	赤坂區	四
日本橋區	十八	麻布區	四
市外巣鴨品川等	十五	淺草區	二
麹町區	十五	本所區	一
芝區	十三	四谷區	一
牛込區	十	深川區	〇

神田、本郷は學校學會の中心即ち、東京の羅甸クヲーターたるが爲に、京橋日本橋は實業の中心たるが爲に、其數が屹然他區の上に居る、市外は亞に巣鴨千住品川新宿等に資金の尠き雜誌が保證金の都合から編輯や發行所を市內に置きホンノ申譯け計りに發行所を市外にするためで、芝で發賣編輯して巣鴨に發行所があると云ふ如き奇觀も往々見ることである、日本橋雜誌の大多數は博文館で受持ち、牛込は專門學校芝は慶應義塾と、それ〳〵中心のあるところは雜誌の數を增す、淺草本所四谷深川の各區に少きは其地が政治實業學術いづれの方面よりも其中心とはならず、且つ其發賣に不便利なると地勢が文筆に從事するもの丶居宅に適せざるとか其大源因であらう、之れにしても深川區の如き一個の雜誌社も無ひとは珍らしき感じがする、

更に部門別にすれば

宗教	四十一	少年及び外國語	十四
實業	三十一	教育	十一
科學學會	二十六	醫學	十
社會政治	二十三	法學	七
文學美術	二十一	兵事	二
雜種	十五		
女學	十四		

是を區に分てば

神田區　○文學十○教育八○少年八○科學七○實業七○女學五○宗教五○雜種四○政治三○法學三

京橋區	○實業十一○雜種八○宗教四○政治四○醫學三○科學二○文學二○少年一○女學一○法學一
本鄉區	○宗教八○科學七○政治三○醫學三○文學二○法學一
日本橋區	○實業四○政治三○文學三○少年三○女學二○醫學一○雜一○法學一
市外	○宗教八○醫學二○實業二○政治一○女學二
麹町區	○文學三○科學三○實業二○政治一○女學二○教育一○宗教一○少年一○法學一
芝區	○宗教五○政治四○學術二○實業一○少年一
牛込區	○政治三○學術二○教育二○宗教一○兵事一○醫學一
小石川區	○宗教三○學術二○女學一○實業一
下谷區	○雜二○文學一○科學一
赤坂區	○宗教二○兵事一○實業一
麻布區	○宗教三○實業一
淺草區	○宗教一○實業一
本所區	○女學一
四谷區	○女學一

神田に文學雜誌敎育雜誌等の多き所以、京橋に實業雜誌の多き所以は誰れも了解するところなるが、宗敎雜誌が本鄉に多きは不思議に思はれる、蓋し佛敎青年會及びその會員、哲學館の出身者、東本願寺學校關係者等の根據地となれるか其源因であらう

各雜誌の發行部數少きは三百多きは一万これを假りに各雜誌一ヶ月千部づゝ平均とすれば二十一万六千部を全國に毎月配布することゝなる、現今發行部數の多きはやはり博文館ものにて其他は盛衰一ならずとても精密の觀察は出來ぬ種類から云ば宗敎ものが第一等にて四十一種全數の約五分の一を占むる其中佛敎二十二基督敎十五神道四の割合である、他の雜誌は各自家の本領に忠實なるに反して宗敎雜誌特に佛敎雜誌に惡口の叩き合をなし泣言の並べクラをなすものが多い、つまり傳道と云ふよりは宗派心の爲に發行するからであらう其上宗敎雜誌の多數は品位の上から云ても時勢を導く點から云ても遙かに他の下風に立てる樣である

時勢を導くと云ふ點からは政治社會を中心とせる雜誌が第一にして、次は敎育科學等の部門に屬するものである、宗敎雜誌數多くして散漫なるに反し、敎育の方は少數乍ら其責務を盡し悉く讀に價ひする樣に思はれる

日本の文學雜誌は自家の道樂で損得に拘らず發行するか、利益を得るを目的で發行するかの二つである、三號雜誌とて誕生早々永眠するものは文學雜誌に一番多い

近時景氣好きは女學に關するものと小中學生を相手にする雜誌、次では社會及び實業向きのものであらう、

右表中第一の古株は明治八年創立の佛敎雜誌明敎新誌

で、躰裁も記事も二十六年一日の如く古色掬すべきの珍雜誌、此元老を筆頭として東京經濟雜誌、教育時論、女學雜誌、教育報知、日本人皆々老人株の一人である

扨てこれから各雜誌の特色や執筆者等を一々紹介する順序であるが本號はこれにて筆を擱く

排自由結婚

青柳有美

血迷ひせる哉、自由結婚の謳歌者や。我れを以て觀れば、世に最も尤もらしくして、しかも最も馬鹿げたること、自由結婚に如くはなし。自由結婚の謳歌者こそ、げに憐むべき痴漢なれ。彼等は結婚の眞味と情愛とを知らず、たゞ詩人の囈語に惑はされつゝあるものなり。彼等にして若し能く之を知り得たりといはゞ、如何ぞ此る淺薄にして淺墓なる論議に悲悅至極なるを得んや。かの福澤先生が、極端なる女權論者たるを得し如きも、大事の〱御臺所の外、多く他の女を知ることなくして、肆に坐上の空論を戰はすべき餘裕ありたればなり。是れ猶ほスコットの女人拜崇に於けるが如しといはんか。共に其皮層の觀察より胚胎せるなり。福澤先生にして若し女學校の教師となること三日、或は又女郎買ひをなし又藝者遊びに耽り、數あまたなる女性に接し、その醜き實躰を一瞥したらんには、必ずや『新女大學』を著はすの無鐵砲なる勇氣なかりしなるべし、我らは深く福澤先生の女郎と藝者とを買はざりしを惜む。世に擧々たる所謂自由結婚の謳歌者とは、なほ女權論に於ける福澤先生と等しく、一種の極端なる空論家なり、『自由結婚』なる稱呼の如何にもミヅ氣多く、ウマ味たッぷりにして蜜の溢れ滋るが如く、何處までも面白く美はしげに見え聞こゆるに迷はされ、非尋常なるまでに之を謳歌するものなり。その片腹いたさよ。されど、昔の世にも同じく此の『自由』なる美名に惑はされて佛蘭西革命と稱ばるゝ一大茶番を、臆面もなく世界の舞臺に演じたるものあり。(女學雜誌「佛蘭西革命の無意義」參看)然れども茶番は茶番なり、遂に何等の寄與をも後世に遺せしことなし。我れを以て觀るに、『自由結婚』の實行者は、佛蘭西革命の發頭者の如く、實に無類の大茶番師なり。滑稽この上なし。あゝ世の空論家と茶番師よ、胸に手を置きトクと考一考せよ。自由結婚は、決して乳と蜜との流れ漲るカナ

ンの樂土にあらず、又イスラエルの民の如く、荒野四十年の苦行を忍びて、これに達すべきほどの價値あるものにもあらず。聽けよ、我れは『新女大學』に與みせずして、舊『女大學』に悦び、自由結婚に謳歌せずして、舊風の强制結婚に悦ぶものなり。

舊風の强制結婚は、當該男女が自由撰擇にあらず、親權を行ふもの丶强制に出で、その間に何等の愛をも宿さゞること、恰も竹を用ひて木に接げるが如く、乾燥索漠、誠に人生の最大慘事にして、男女一生の不幸これに過ぐるものなしとなすこと、これ常に論者の言なれども、此くの如きは我儕勝手なる僻見のみ。借問す當該男女の自由撰擇により、所謂愛によりて成立せるものなりと稱せらるゝ自由結婚は、果して多くの快樂を生み、多くの幸福を人生に寄與せしや否やと。憐むべきかな、自由結婚を企てたるものゝ多くは、今や非常の煩悶に沈み、比々として離緣の慘劇を演じつゝあるに非ずや。然るに却て、古風の强制結婚をなさしめられたるものゝうち、一家團欒和氣藹然たるものあること、豈に驚嘆すべきの至りならずや。もしかの切りに自由結婚に謳歌し、親權を行ふものと、撰擇によれる結婚即ち我が所謂强制結婚を排するやからの言をして眞ならしめば古へよりの夫婦は悉く何等の愛情なくして、甚だ器械的なる生活を送り、今の所謂自由結婚の新郎新婦は、悉く幸なるべき筈なれども、事實は即ち然らず。これ抑々何故ぞや。

論者がまづ、强制結婚によりて成立せる夫婦の間に愛情なしといふこと、是れ第一の誤謬にして、千百の迷想まことに此の間に萠すといふべし。論者もし誠に彼の自由結婚者の間に在立するといふ愛情なるものが、果して如何なる徑路によりて生せるかを見ば必ずや思ひ半ばに過ぎん。自由結婚者の所謂愛とは、決して比較解剖の結果によりて生ぜる者に非ずして、多くは是れ偶然なるチヤンス（命運）により、茲に物ごゝろつきし男と、物ごゝろつきし女とが始めて相遇ふて其間に生ぜる一種の情熱に非ずや。果して然らば、この愛情なる者が、結婚の當夜始めて相見相知りたる男女の、顏赧めつゝ、耻しげに取り交はす一瞥のうちに、豈に又成立せられざるの理あらんや。結婚當夜の一瞥と結婚以前の一瞥と、素より彼是れの區別あるべき筈なし。その一瞥たるや共に一なり。是に於てか知る、夫婦の愛情は必ずしも結婚式以前の相識を必川として始めて成立せらるゝ者に非さるを。我れを以て觀

るに、愛情なるものは、決して心理の問題に非ずして空間の問題なり換言すれば地理上の問題なり。また意識の問題に非ずして生理上の問題なり。凡て肉身ある男と女とは、互に地理的に相接近すれば、特別の例外によるに非ずんば、必ず其間に愛情を生ずるに至るものなり、是を以て、未だ相愛せざりし男女と雖ども、既に夫婦の契緣をなして共にともに双栖すれば、自ら期せずして自由主義者が所謂愛情を生ずるに至るべし。殊に身的近接は、この愛情をして愈々益々深きものたらしむ。それ男女の愛情のみならず親子の愛情の如きも、其極身的の接觸に終る者たるは、人の能く知るところなり。(「バイロンと業平」參看)然るに、この逆定理も又眞理にして、肉身的接觸の終りは、必ず愛情に達するを常とす。是に至れば、肉身的接觸と靈性的愛情とは、其始めや互に相去ること遠きが如くにして、何れも其發達の絕頂に及べば、兩者共に合して一となり、接觸と愛情とは、遂に互に相離すべからざるものあるに至るを見るべし。これ猶ほ三角形の兩邊が、其底部に於て相去ること遠けれども、相頂點に至りて共に合一するが如し。されば、是まで如何に見ず知らずの男女たりしと雖ども、一朝宿緣のあるありて、雙々家を同ふして住ひ床を共にして坐せば、不思議に琴瑟もたゞならざるほどの熱愛を生ずるに至るや、論を待たずして明かなり。故に以爲らく、親權を行ふものゝ撰擇によれる結婚は、決して沒戀愛のものに非ずして、古來の夫婦の、今の君子論客のために强制結婚と目せらるゝものの如き仲合ひと雖ども、意外によく和合し、多幸多福なるを得しもの夥しかりしと。世の年若き友よ、徒らなるアメリカ感冒に冒され、濫るゝ如き愛情は獨り自由結婚の夫婦にのみありと思ふこと勿れ。

それ、愛情なるものゝ、生理的發作を混じたる地理的成果にして、其間に比較解剖と批評となどの入るべき餘地なきは、既に說けるが如し。されば、愛情に依れる隨意結婚の危險なるは素よりいふまでもなきことなり。愛情に浮かされ居る人は、猶ほ酒に醉へるが如きものにして、これに己が夫妻の撰擇を委するは、假令へば醉漢を强ひて事物の是非曲直を判斷せしめんとするに異ならず。此くの如くにして自ら放に撰擇せる對手が、果して好配偶たるを得るの資格あるものならば、素よりこれに優るの幸福なしと雖ども、不幸かくの如きの資格なきものも、愛情の酒に溺れたる醉漢が朧げなるトロ／＼まなこのうちには、鰯のあたまも信心が

らにて、甚だ難有く善美なるものゝ如く誤り觀ぜられ、遂に迎へて妻となし頂ひて夫たるに至らしめ、終生復へし難きの不平と不幸と不快とを購ふに至るなり。故に、寧しろこれが撰擇を智慮あり分別あり、しかも甚だ公平にして正氣なる第三者に委ね、その比較批評と解剖との力を假り、古風の所謂强制結婚をなさしめらるゝの勝れるに如かず。殊にその第三者をして、たゞに親權を行ふものゝみならず、これに當該男女の師事する長者を加へ、互に誤り補ふを得せしめば、庶幾くは全きに近き乎。

諺に曰く『好き逑れ泣きづれ』と。蓋し聽くべく味ふべきの言なり。之をしも强制結婚ならしめば、自ら相和すること能はざるの實を作るに苦しからずと雖ども、その我儘勝手になせる自由結婚なるの故に、容易に相離緣すること能はずして、非常なる苦痛の下に煩悶呻吟し、其肉と血とを枯らしつゝある男女の、如何に今の世に多きかを見よ。しかも猶ほ自由結婚を主張せんとするは、是れ痴なり惑なり。加ふるに、自由結婚者は始めより其夫となり妻となる男女と相知り、既にこれと交りを結び居るを以て、玆に夫婦の緣を結び、一夜始めて相知れる男女の如く、契緣によりて、更らに多くの快樂を享受し得らるべきものに非ず、蓋し、其男女互に相知り相交ることによりて、當然受くべき快樂を受け、早く既に之に慣れ居ればなり。又世には、自由結婚は離緣を減少し、强制的なる古風の結婚は離緣を增加するものなりとなすものあれども、これ又謬見なり。もし夫れ强制結婚たるの口實によりて、離緣を敢てするほどの男女ならんか、如何に自由結婚に於るも、また離緣を敢てするを辭せざるまでの蠻勇あるものなり。我れを以て觀るに、我が帝國に離緣多き所因のものは、必ずしも强制結婚の行はるゝが故に非ずして、邦人の結婚道德を重んずることチユウトン人種の如くならず、且つや其性癖甚だ癇癪持ちなるところあるためなるが如し。强制結婚と雖ども、愛情を生ずへきものたるは、既にすでに述べ論ぜるが如くならずや。

又自由結婚者は、その結婚によりて來るべき快樂と幸福とを豫想すること、古風結婚者よりも夥しきを以て、結婚後の狀態なるものゝ、意外にも無意味にして索漠たるものあるに失望し、その配偶者にアキを來らすることの如きも隨て多く且早し。これに反し、古風の結婚者は、多きを其夫たり妻たるものに求めず、た

ゝ單一なる目的のために結婚するが故に、結婚後に於ける愛情の發生により玆に其目的以外の快樂と幸福とを味ひ樂むを得て、非常の悦びに入るを得るなり。故に、離縁のことの如きも、勢ひ强制結婚に依れるものに少なくして、却て自由結婚者に多からざるを得ず、是に於てか、愛情の完成のために結婚するものは、失望に沈むこと多けれども、肉情成就のために結婚するものは、必ず能く滿足すと、フヰンクのいへるはまことなり。

されば、徒らなる空想に驅られて、愛情完成のために、我儘自由に結婚せしむるが如きことなく、男女相接觸して子を生み、且つは民法に所謂共同生活なるものを營まんことを目的として、この二ヶの目的に適當なる男或は女を配する樣、智慮ある第三者の撰擇を待つて始めて結婚する我國傳來の强制結婚法こそ、實に萬國無比天下第一等の結婚制度なれ。徒らに詩人の迷夢に誤られて、此る貴き古法を破壞せんとする今の物知り茶番師どもの憐れさよ。されど、我れを以て戀愛を非定するに至れるものなりとなす勿れ、戀愛は戀愛なり、結婚は結婚なり。これ全然別物なりと知らずや。結婚とは到底、子を生むことゝ家を成すことの二意義に過ぎざるものなり。故に以爲らく、身的の接觸と共同生活とを單一の目的として結婚せば、意外なる愛情この間に起り、愉快なる生活を送るを得べしと。されば、詩人いかなる韻律と詭辯とを弄して、巧に之れを飾るも、妻とは遂に下女と娼婦との變形に過ぎざるものにて、夫とは有機性の金庫に外ならざるなり。

藝術界漫言

木海子

審査　下

審査といふのが、元來不適切なものであるが、これの的確にゆかぬものなる點につけいつて、いろ〳〵と依估のことをやる、情實にからまつた審査、乃至は歡迎的擬賞、復讐的擬賞とが今の美術界に行はれて居るといふことは、一寸前にいふた。そこでそれについて事實といふ風なのがあるものだか、どんな鹽梅にそれをやつて居るかといふとを、少し萬朝じみるがおげやうと思ふ。こゝに先づ復讐的審査に屬すべき、尤も適切な事例がある、事は少し古りた氣味はあるが、あまりに惡むべき仕打でもあつたし、また局外には一向知ら

れぬ人も多からうから、それをまづ御話しやう。
某團躰、名丈けは可愛さうであるから、格別の御慈悲を以て言はずにおいてやらう、其團躰が、嘗てある涙人の藝術家、この人一介の書生ではあつたが、實に斯道に忠實な男で、技倆も亦頗る得難い誠に末頼母しかつた男だ、かういふ畫家を如何にもして自分等の陣中へ引きずり込まうとしたことがあつた。すると丁度その頃、その團躰で開設した展覧會へ、この男がすばらしい傑作、今になつて見れば、その繪はこの男の生涯の佳作であつた、女兒が飼鷄のさまの繪を出品した、この繪は中々上出來であつたから、元より當然だが、會はこれに最も數少き優等の賞與をした、そしてこの男に向つて、この會の評議員に任じたからどうぞさう思ふて居てくれと、押付にまづこれ程の優遇の方法を講じて居た。しかるにこの男が、その後幾ばくもなくその道の官立學校へつかへる樣になると、例の團躰では、その頃尤もこの官立學校を恨みに思ひ、尤も多くそれに對して、惡い感情を含むで居た時であつたから、太くそれが癪にでも障つたものとみえて、次回の展覧會へこの男が、隨分宜い出來の渡頭晩景の繪を出したのに、極々平凡な褒狀を與へ、酷い隅の方か何かへ陳列して、そして剩さへ前に押しつけにして頼だ評議員を剝奪し、除名といふ通知までも送つて來た。但しこの男の繪畫に於けるやり方、考へといふものが別に變つた譯では元よりなく、前回の飼鷄と同一筋のもので、藝術上からは毫厘もそんな擯斥をうける程の點はないのであつたし、殊にこの男が團躰に對ふての方は日本畫で、學校へつかへたのは西洋畫の方であつたのだ。もしまたかりにこの時この男の作品が、事實まづくてそれの價値しか無いものであつたとすれば是非もないが、それならば何故に無理に頼だ評議員を剝奪するやうなことをした、何で除名とせねばならんだのか、これ一向に分りかねる處だ、どう見てもこれは腹いせに一番目に物みせてやる的の審査でないといふ譯には決してゆかぬ。この男は實に正直者であつたから、いたく其仕打を憤つて、藝術家を侮辱するも甚だしいと慨いて居たが尤も千万なとではあるまいか。さてこの男は誰れであるか、小坂象堂といふ、今はこの世を去つてしまつた惜みても惜かつた青年畫家のことだ。
幕のうちの連中には、くだらぬものへも何とか名目をつけていゝ賞をやる、黒幕のうちから指圖をして思ふやうになる迄審査をやり直すこともまた、この團躰の

得意でやる處だ。また美術協會では、頑固連がひどく閥をかためて居る上に、文人畫の御大將が控へて居て、一々采をふりまはし、容易に外からいふ言などはおとりあげにならぬ、先生筋や、門人の都合で作品よりは、貰ふ人の資格をやかましくいふのは、實にこの會の尤も固くとつて動かぬところだ。だから今年は大抵誰々がこれ位の賞與にありつくだらうといふ風說が、ちやんと前から分つて居る。また場合によつては、御買上筋の都合で、うりつけてからは御馳走に、それ前には御思召を招く樣につけるなどゝいふ、誠にはや御世辭のいゝ審査や擬賞もこの會に行はれるさうだ。

或はかういふ外に、素人の見物人に審査投票を求めたものもあつた、これも實にくだらぬ話で、客ひきや人氣とりにはとにかく、新聞屋の美人投票でもあるまいし、一口にいへば、素人は百人でも素人、分らぬものは千人よつてもやはり分らぬ譯だ。嘗てでもない此間のことだ、佛蘭西ゆきの美術品のときには、事務局でがやがやいはすまいとの思ひつきで、新聞屋先生を百圓づゝとかで買ひしめて、審査官にしたのも、隨分かひしめ的とか何とか名づけてこの種の一類のものになる筈だ。

審査はもとより眞面目に出來うる次第のものではない、所謂眞面目にやつても實は宜い加減なものだ。そして以上あげたのは何れも皆この宜加減から生ずる處の流弊であるが、今凡そ日本の審査などゝいふものに、この弊害の附加して居ないものは決してない。何ぼうまた名聞がほしいとて、これ程の樂屋の機關、しらじらしいてれんをやつてそれで知れきつたものを貰うてどれ位うれしいものだか、商賈ならば廣告にもならうがなんだその廣告にしたい先生が多いッて、成程さうか。

審査をし賞與をやらねば後進の奬勵にならぬ、出品者のはり合がない、といふものもあらうが。實に後進の奬勵がすさまじい、後進に早く自惚を出さしたり、御爲筋の弟子の御機嫌とりにしたり、等するのにはこの上もない方法だらう。からくりの御褒美に預り度いばかり、それがなうては、痴氣筋の老人に一々鑑査して貰はねば、出品をするのが嫌だ、畫をかくのに氣がのらぬ、そんな意氣地のない藝術家はどうせうだつのあがりッこはあるまい、さういふ連中はどうか遠慮なく氣をちでもして死んでもらいたいものだ。

僕等は少くとも、油繪では白馬會、彫刻では彫塑會、

日本畫では天覽會等が、少數の會員ながら、審査といふことをやらぬといふのに甚だしく同情をもつて居る。

教界の人物

哄堂隱士

（五）　ニコライ氏（露國宣教師主教）

始めて東京に入り、新橋より鐵道馬車に賃し、萬世橋に至るものは先づ當面の高丘に於て、巍乎として雲を突く圓形の大建築物の帝都を俯瞰して兀立するを見る可し、即ち是れギリシヤ教の會堂所謂ニコライなるもの也。

ニコライ氏露國の一僧侶を以て吾邦維新前始めて北海道に渡り、吾邦に在ること四十餘年、一意力をギリシヤ教の弘布に用ひ、其教線今や全國殆んど及ばざる所なく、現在信徒の總數を審にせずと雖も蓋し十万に達するものあらん、露國政府の勢援與て力あるは素よりなりと雖も氏が堅忍不抜、意力に頼るに非ずんば奚ぞ此の如くなるを得ん。

吾人嘗て氏の傳記を讀むに左の如きものあり、

其間に副島伯を經て外務省より外國語學校の露語教師に雇はれんことを氏に問合す、其報酬として年給二千圓と官宅とを進めた、ニ氏考一考の後斷然辭していふには「二千圓も要し、官宅も要し、併し余は身を全く宗教の事に委ねたるものなれば假りにも政府の雇員となりて語學教授に從事するなどは自ら恥づる所です」

と、氏が宗教家としての抱負の如何に尋常外國宣教師輩に異るかを見る可く、氏の今日ある實に此精神に基因するものといふべし。

ギリシヤ教は露國政府と尤も親密の關係を有するを以て世人に畏れらるゝや久しからずとせず、而れどもギリシヤ教にして世人の想像する如く假令ひ若し露國の爪牙となりて人國を奪はんとする隱謀ある者とするも宗教を以て今日の吾國を畧せんことは到底出來ざる事なるべし、此點に於て敢て畏るゝの要なし、然れどもニコライ氏の布教は極めて沈默の間に行はる、他の廣告的吹調的なるに反して世人の多く知らざるの間に一歩を進め又一歩を進め次第に宗教的侵畧を試みんとするはニコライ氏の布教手段なり、故に佛教若しくは新教諸派が紛々擾々徒らに始末の運動に日も維れ足らざ

るの間に彼等を横歴する一大宗教的勢力の全國各地に樹立するや未だ必ず測る可らざる也。

唯ニコライ氏の信徒は分量に於て勝る可き々質に於て大に他の耶蘇教諸派に及はざるものあるか如し、彼の宏々として滿都に震轟するの破鐘を聽て集るもの、中現代に地位あり勢力ある人物なるもの果して幾人あるか、ギリシヤ教の未だ重を教界に爲す能はざる或は此邊に存す、ニコライ氏漸く頽齡に近かんとす、氏たるもの今に於て一考し置かずば死して倘瞑し得ざる時あるべし。



（六）釋雲照氏（眞言宗僧侶、目白新長谷寺住職）

之を頑固と云へば云ふ可し、然れども其所信を輝發して老て愈屈せざる雲照律師其人の如きは但に教界の珍たるのみならず、薄志弱行守一の精力に缺ける日本社會に於て尤も偉大の一人と云はざる可らず。

師の始めて東都に來る、第一流の僧侶としては原坦山氏あり、島地默雷氏あり、小栗栖香頂氏あり、大内青巒氏あり、南條文雄氏あり、而して爾來十乄餘年の今日に在ては原先つ歿し、島地老ひ、小栗栖病み、大内南條すら地廻り演説に汲々たるに際し、師のみは依然として白馬臺上に盤踞し、氣餤老て愈熾んにして門頭常に貴人豪富の車馬に依て塡充せらる、貴族佛教を皷吹するの師に在て尤も大なる成効ならずや。

雲照

師の成効を見るもの師を稱して或は智あり策ありといふ、吾人は信せざる也、蓋し吾人より見るに師は現今の僧侶に於て尤も愚にして略なきの一人なるか如し、彼の「國民の教育」なる一書、如何に師が愚にして向ふ見ずなるかを證す可く、仁和寺門主としての失態は如何に師か策なきかを伺ふ可し、而して是の如くして倘師をして能く大都の中央に兀立して一世の歸仰を壟斷せしめんとするもの智力に非ず策略に非ず、實に師か淸嚴なる戒德と護法の熱力炎々人を燒かんとするとに在る也、其能く山縣を服し、大隈を服し、井上鳥尾を服し、三浦の如き武骨漢をして心折の厚き師か草鞋を

執るも敢て辭せざらんとせしむるもの、皆其戒德と其熱誠とに打ち勝れたる也。

想ふに戒律を嚴守し、清高自ら持するの老僧、真言宗のみに於ても尚其數に乏しからざる可し、然れども一意戒律を守て失はざる程のものは率ね白雲に高嘯し、世人と風馬牛たらんとするを以て世に知らるゝの機會太だ稀にして其感化力も從て大なるを得ず、而るに雲照律師の如きは戒香愈薫して愈、世と忘れず、濟世の念、護法の熱と相結び七旬の老軀をして尚山に入る能はざらしむ、此戒律の清嚴に兼ぬるに此の炎々の情熱を以てす師の紛々たる數多の枯木死灰的律僧に特拔して雄を當代に振ふ所以也とす。

吾人嘗て師を七里恒順師に配して佛門の二大偉人とせり、而して七里師已に去て今唯師のみ在り、師の自惜自愛を請はざる可らざるは勿論なから、已に八旬に垂んとする師の餘命も亦久しかる可らず、噫、佛教の前途も亦寂寞なるかな。



詞藻

漫遊雜詠（下）

源　清蔭

華德路古戰場

獅子山高入半空。登臨駐杖憶英雄。士人指點當年迹。都在寒烟蔓草中。

獨逸

一代恩威遍四隣。中原盟主富經綸。勿言興廢唯天命。輔弼有人魚水親。

發澳國

萬里征途不暫閑。歸期已促向鄉關。千秋勝蹟空相送。一髮青螺伊國山。

埃及途上

夕陽迢遞望平沙。處々封泥便作家。一隊駱駝椰樹外。西風吹雪木綿花。

改羅

興亡一夢感無窮。獨上荒城立晚風。烟靄半遮金字塔。蒼茫落日望王宮。

行遍東西三萬里。弔來興廢五千年。茫々沙漠望無際。
明月一輪中碧天。

賦一律以代總評
輪囷詩膽使人驚。深入不毛題姓名。氷柱衝天何矗々。
水旋澱雪太晶々。嚙氈蘇武在犂保。犯斗張騫難弟兄。
萬里雲濤三寸筆。縱橫製得幾艅舲。

春日懷人　　石川藍石

酒家宵影夕陽邊。墨陀春色十分妍。木母寺邊花似雪。
水神祠外柳如烟。雨晴語燕棟泥墜。風暖芳洲鷗夢圓。
欲與故人謀一醉。故人空隔幾山川。

如讀鱸松塘詩。木母梅兒。古人用之。水神木母。未經人道。

書懷

滿眼春光獨掩扉。長安米貴似珠璣。辭樽綠蟻不相訪。
生翼青蚨何處飛。自分蓬蒿甘落托。任他桃李鬪芳菲。
窮來唯怪趙公句。咀嚼新詩難療饑。

趙甌北句。老夫近得休糧法。咀嚼新詩當餓腸。

窮巷蕭條客不來。滿階春雨長青苔。孟光知我無聊甚。
典却荊釵辨酒杯。

前聯過巧却失。後聯雖平凡。自見眞情。

落魄風塵十歲餘。身閑總與世齟齬。奇窮畢竟憑文字。
猶忍飢腸購蠹書。

文字結習、餓死不悔、何顧迂愚之譏、

寄蘆堂蘆洲二子　　捫蝨道人

我性迂且僻。功名不可期。閉門只求古人道。十年未嘗
廢唔咿。且以斗酒澆磊塊。任他窮鬼相追隨。三日不食
猶歡笑。一夕不醉便攢眉。酒債山積歲云暮。一家生計
何以支。幸有故人在。天涯屢贈貽。半償酒家債。半供
讀書資。架有縹緗樽有酒。且飲且讀興淋漓。君不聞古
人漢書爲下物。我輩風流何讓之。

個中滋味、肉食者所不知、唯吾輩數人領略焉、

詠史　　鈴木春江

浪華津詠一枝梅。文物粲然從此開。終見春風滿天下。
流芳何讓百花魁。　王仁

階前萬里九重陰。獨對春風悲且吟。一夜梅花飛渡海。
殘香淡々月沈々。　菅公

貂蟬滿殿整威儀。我國梅花看不遜。東虜風流無匹敵。
詞鋒凜々破國歸。　安倍宗任

箙裡插梅風送香。挺身酣戰虎驅羊。百花魁與千夫傑。
第一先登名姓芳。　梶原景季

此種筆墨、似屬兒戲、然使讀者不覺呼妙、

電氣燈　　清水夢山

纔搖隻手滿堂明。疑是長繩縛日行。偏喜人間無晦朔。
不知天上有陰晴。廣寒當面嫦娥舞。暘谷現前魑魅驚。

窮巷寂寥眞可憫。一燈如豆夜三更。

菊三溪得意題目、後聯可稱其後勁、

歳晩五律 節錄

梅原龍北

節到窮陰感轉深。江湖落々少知音。人間唯酒供青眼。
天下依誰話赤心。客舍風霜侵四壁。隣樓絲竹散千金。
少年豪氣鎖磨盡。獨對寒燈似痖瘖。
草莽何時報聖明。偏歎斯道長榛荊。政因貨賂分朋黨。
利競錐刀忘弟兄。霜柝打更人未睡。寒尨吠影月初生。
滿腔憂悶無由遣。徒向毫端訴不平。

一肚皮牢騷之氣、皆勃迸毫端、作者平生、温顔如玉、而其中磅礴如此、豈歎々々、　柳塘妄言

贈龍北詞兄

柳塘生

曾聞張子房。容貌似婦人。慷慨震天下。博浪椎暴秦。
我接君眉宇。和氣藹生春。今誦君詩句。叱咤驚鬼神。
須知丈夫志。一屈又一伸。子房時未利。韜晦全其身。
圯橋捧履處。含笑不敢瞋。

詩課題

詠櫻花

各體隨意

《用箋郵便はがきに限る》
《三月十五日〆切》
《東京谷中三崎町十八番地町田柳塘名宛にて投稿》

わか草

秦伯生

名ならでは見じと誓ひし山河に
やれたるきぬを振ふかなしさ

わだの焚く篝火消えてあり明の
月かげうすしからのやま〳〵

あだはゝや千里の外に退きて
ゆき只しろし西伯利亞のはら

牛のせのすみの俵にむめさして
ひきゆくわかせ霞むあさかな

酒をうる家はと問へば乙女子の
云はでゆびざす桃のひとむら

もゆるわが思はなどて三十餘り
一文字のうちに云ひ盡くすべき

思ひつゝ寢にける物を春の夜は

夢さへいと〻おぼろなりけり

よな〳〵に月を宿して人知れず
戀をさ〻やぐたにかはのみづ

秋風にちぎれ〳〵て飛ぶくもの
うかべる心わがもたなくに

あた〻かき春のこ〻ろも振袖を
まだきさらぎの若くさのきみ

寺五首　　三子

青松の森の木ぬれに岡寺の丹塗の塔の雲しぬぐ見ゆ

寺の庭に椎の木ぬれの葉をしげみ夕暮小鳥さわかしく鳴く

寺の庭にむらたつ松の葉を刈る　危き枝に梯子かけたり

寺の庭ひろうに植ゑし秋菊の八千色菊に朝日か〻やく

朝鳥夕鳥なく山寺の森の下庵住めは思ひなし

仝　　茂春

荒寺の庭の石碑石裂けて鐫りたる文字の讀みかてぬかも

雨を含む雲たちこむる比叡の山夕をつけて鐘なりわたる

年ふりて傾きたてる山寺の背向の森に鴉なき集ふ

山寺をわかとひくれは紅葉のにほへる庭に犬ねふる見ゆ

立覆ふ木立の奥の古寺は晝も小暗く蝙蝠のとふ

俳句　　四方太選

野に出で〻凧擧げにけり小半日　愚哉

あちこちに紙鳶擧げて居る畑哉　臨川

大凧の糸のもつれや人だかり　柚笠

金時と達磨の紙鳶の喧嘩哉　菩花

いらたちて糸切れにけり掤紙鳶　吐霓

紙鳶の尾の柳にすれて上りけり　ちやふ
刷毛書きに龍の字太く紙鳶　嚴子
凧あげて人草に坐す牧場哉　橘人
しやくられて稍揚りけり奴凧　逸笑
紙鳶揚げて踏みあらしたる畑哉　同
凧店やうら〳〵として雪照る日　洋々
大なる凧持出すや人だかり　仝
新開の十戸の村や紙鳶　柳家
土手に出て大紙鳶揚けぬ村の者　仝
凧の尾の引すり勝や春の草　青子
切凧や覗ひて見たる塀の内　仝
名も知らぬ村をすぐるや凧　寂村居
塀高き異人屋敷や凧　仝
さびしさの御屋敷町や凧　霞松
長閑さの向ふ端山や凧　仝
糸きれて凧の行方や覺束な　秋子
凧の尾のもつれながらに上りけり　仝
松の内を染屋の庭や凧　耕村

大凧の糸のたるみや向う屋根　耕村
凧の尾のもつれんとしてほどけたり　仝
寐ころんで雲見て居れば紙鳶　寒樓
旅籠屋の夕餉は早しいかのぼり　仝
妻倶して急がぬ旅やいかのぼり　仝
かゝり凧骨をこそとて惜みけり　吾空
大凧のあたりを拂ふうなり哉　仝
凧の尾の長き短き氣にかゝり　仝
大凧や向ふ高なる片在所　鬼水
夕凪や凧の糸くる橋の上　仝
凧の尾のはなれて嬉し宮の森　仝
日曜をうれしき凪や紙鳶　削玉
駄菓子賣る店や紙鳶などつるしあり　仝
紙鳶揚げて足袋をよごして戻りけり　仝
仰ぎ見る凧に西日のまばゆさよ　稻青
色さめし去年の凧を揚げにけり　仝
凧あげるうしろに付いて走りけり　仝
風向の變りて寒し紙鳶　松濱

淺ましき様となりけりかゝり紙鳶　仝
上りきらぬ紙鳶に夕日となりにけり　仝
二階から遠き紙鳶をぞ眺めける　晴月
百間の橋のあなたや凧　仝
學校の運動場や凧　仝
風向の變りし凧や午下り　生巢
凧の繪の眼玉のまはる仕掛哉　仝
凧寺の門内廣くして　仝
大紙鳶を揚げに出てけり裏田圃　啞子
藪入の土産に紙鳶を貰ひけり、　仝
兄弟は仝し武者繪の紙鳶　仝
切紙鳶は雲に入りけり晝の月　翠涙
引きむしる梅の小枝やかゝり紙鳶　仝
紙鳶の尾をつぎ足しにけり片重り　仝
北風のはげしき日なり紙鳶　眉月
大紙鳶の隣村から揚りけり　仝
窓あけて見ゆる田圃や紙鳶　仝
凧あけて堤を西に走りけり　時雨

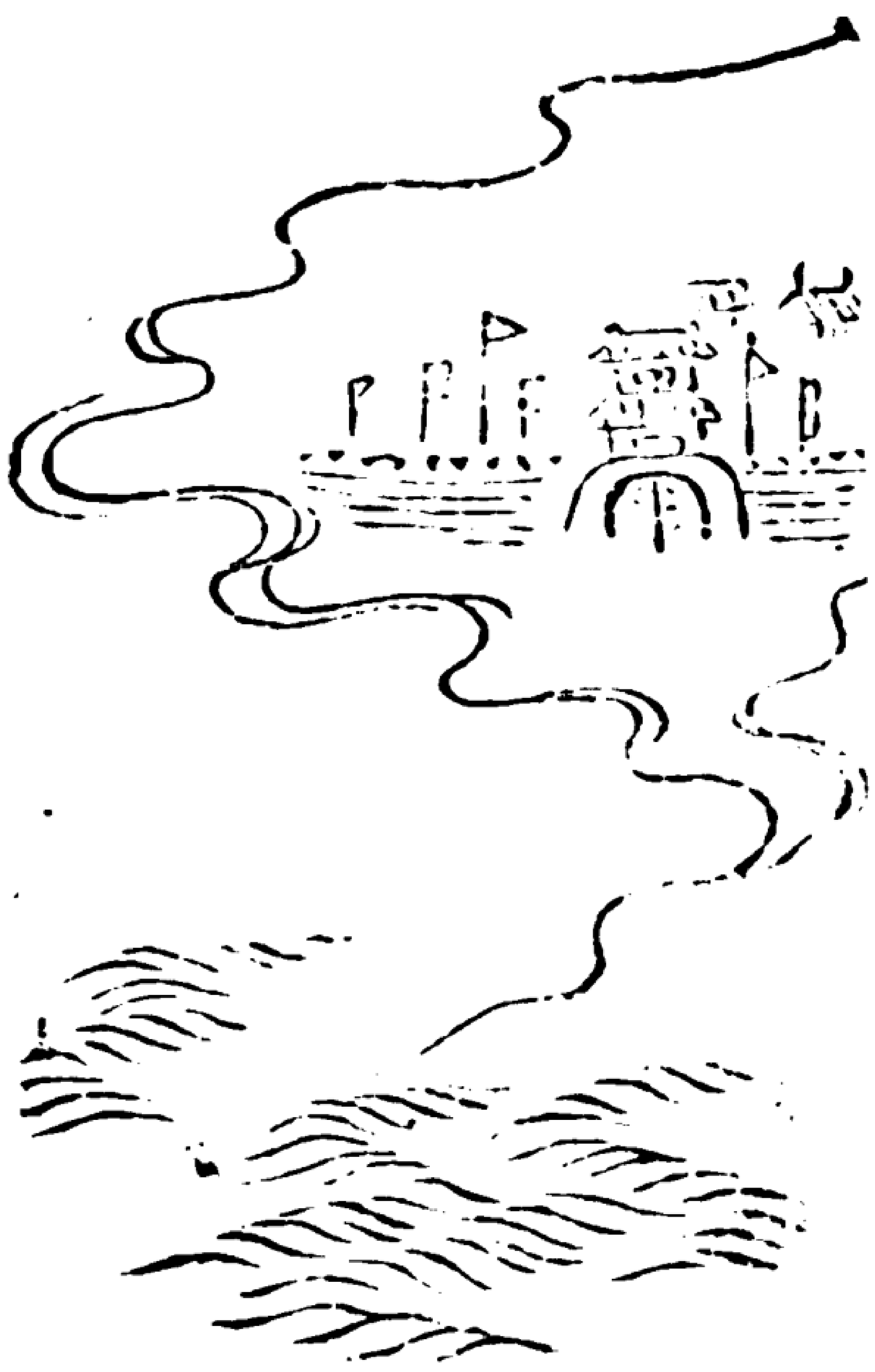
もどかしき糸の縺れや凧戰　仝
荷車の引て過ぎけり凧の糸　仝
東風吹くや造り上げたる五枚凧　仝
菫野の雨うちはれぬ凧　紫涙郎
美しう紙鳶の尾引くや草の上　仝
凧おろす名殘や森の夕霞　仝
凧あげて草に坐るや靜心　仝
日曜のそゝろ歩行や凧　一村
凧揚げる侍町や北の風　仝
凧揚げて寢轉んで居る芝生哉　仝
切れ紙鳶のぶら下りたる榎哉　仝
邪魔になる隣の屋根や紙鳶　虛靜
居處のきまらぬ紙鳶や廻り風　仝
吹き募る風や凧の尾繼ぎたしぬ　仝
糸卷の糸のありたけ紙鳶　仝
煤けたる大きな凧も揚りけり　天風
春寒き川原に凧を揚げにけり　仝
凧切れて遠き畑へ落ちにけり　仝

わが凧に邪魔する凧を憎みけり　仝

苗代　三月十二日まで

藤　四月十二日まで

十句を限る



紀行

比摩賴耶紀行（續）

櫻井鶯峰

二十七日午前二時再度臥虎丘(タイガーヒル)に向ふ、昨朝騎行の危險に懲りて、徒歩星光を踏んで發す。

四時半に達せり、此地より近きは二三十哩、遠きは數百哩、四方大山脈の限り無く連れるを見るのみ、只東南の一角やゝ低くして打ち開けたるあり、此一大パノラマの中に收めらるゝ連嶺一万呎以上のもの二十五、その二万呎以上のもの八、試みにその驚くべき高さと廣さを有せる各嶺の中より二万呎のものを擧ぐれば

	高度	距離
エベレスト	二万九千二呎	百七哩
キンチンジヤンガ	二万八千百五十六呎	四十五哩
ジヤヌ	二万五千三百四呎	四十六哩
カブル	二万四千十五呎	四十哩
チユマラリー	二万三千九百四十四呎	八十二哩
ポーハンン、リー	二万三千百八十六呎	未詳

ドンキヤ、リー　二万三千百三十六呎　七十二哩
カンチエンジヨー　二万二千五百九呎　六十九哩
チヨミ、ユイモ　二万二千三百呎　七十哩
パンヂム　二万二千十七呎　三十六哩

キンチンジヤンガは北方に、エベレストは西方にあり、千山萬岳此二大峰の中間及び前後を點綴す。

天將に曙ならんとす、白雲除々に山脚に收まり、連山悉く天を摩する一大黒塊なり、忽ち見る當面のキンチンヂヤンガ、其絶嶺紫色に變じ一道の紫光吾人の目を睥せんとするを、蓋しベンガル大平原の地平線に出でたる旭光の先づ其頂きを照せるなり、其時山は其上部紫色に、中間は黒塊、下部は白雲の大海なり、暫くにして上部の紫は淡紅に、腰部の黒塊は紫色となり、又暫くにして淡紅は琥珀又は黄金色となり、紫色は淡紅に變じ遂に全山紅光を帶びたる銀世界となる、一秒又一秒、一分又一分、日いよ〳〵出で、變化いよ〳〵甚しく、距離の遠近に從ひ、峰より峰、山脉より山脉に、其變化の傳はり行き、赤きもの紫なるもの金の如きもの銀の如きもの、一時に眼界に映じ來る。

連嶺悉く旭光を浴せるの時、猶背後に一大黒峰の屹然として立てるを見る、蓋しこれ百七哩の距離を有せるエベレスト峰の猶太陽を迎へざるが爲なり、待つこと數分時、數條紫金の光輝エベレストの頂きより爛として群山を照すあり、此時連峰悉く紅色となりて獨りエベレストの紫なるを見るのみ。

あゝ壯嚴か、雄麗か、人は皆此時恍然たる一種異樣の感に打たれ、其景其念と共に言慮の外にあり、到底筆舌の景容を許さゝるところ、恐くは千古の大詩人が畢生の心血を注ぐも此宇宙無比の大觀に對しては其萬分一をも彷彿し得ざらん。

恍惚立つこと一時餘、予と同じく此景に對し只時々嗟聲を漏らし居たる男女八名の英人は、此時世界第一の高山と此絶大の壯觀に接したるの喜びに堪へずとてタイガーヒル頂上に舞蹈を初めぬ。

九時半ホテルに歸り夜來の疲勞を醫せん爲め暫く寢に就く。

陀士林見聞雜記

午後ダーヂリンの酋主、シツキム亡國の王を訪はんとす、現時王はツムロンと云へる舊首府の地にありと聞き息む、土人王を「ギヤルポ」と呼ぶ、西藏語にて王樣との意なり、此圖は王及び妃の肖像なり、王は自らの兎唇を耻ぢて寫眞を採ることを嫌ひ。此寫眞は生涯只

一度のものなりと云ふ、妃はシッキム王歴代の慣例に依り、西藏達頼喇嘛の重臣中より嫁せるもの。(一)

「キンランジヤンガ」又は「カンチンジヤンガ」、西藏語にて「五藏山」の意、頂上の五峰其最高のものは梵天の黄金を藏せる所、他は銀と寳玉と穀物及び經文を神が納め置ける靈山と信ぜらる、その黄金の藏と思はるゝは日出日沒の時最高峰が最も黄金色を放つに依るものにして、キンランジヤンガの山神は福の神として、家々に其肖像を藏すること、我國の七福神を祭るが如し、各連峰到底人間の足蹟を印すること能はず、土人畏敬の種となること多く、山に關するの迷信擧ぐるに遑あらず。(二)

マウントエベレストは第一の高峰なるに拘はらず、其れに關する信仰尠きは英人の發見するまでこれが最高の峰なることを知らず、且つ其位置の人目に觸るゝと少なき地方にありしが爲めなり、英國政廳の派遣せる大測量隊がニポール方面のヒマラヤ山脉を測量せる時、則ち千八百四十九年の十一月より千八百五十年の一月の間に於て、北緯二十七度五十九分、三、東經八十六度五十四分、七のところに二万九千二呎の高峰、則ち世界第一のものを發見し、其測量隊の指揮官サー、ジョージ、エベレストの名を採て命名せるもの、ニポール人は古來此山を「デバダンガ」神座山と呼べり。(三)



(シツキム王及妃原圖寫眞)

纍きに二万四千呎以上の山嶺比摩剌耶中に四十八個あることを云へり、單に峰として精密に數へ來れば全山脉中二万呎以上のもの一千一百峯あり、これをアルプス山が一万五千七百八十四呎を最高として一万四千呎以上のもの僅に六峯に過ぎざるに比し、如何にヒマラヤ山脉の大なるかを想見すべきなり。(四)

野犬の一種。凍死せる二ポール人を食ふ



（原圖寫眞）

陀士林附近に於ても象、虎、豹、犀、麝、熊、ヒマラヤ猿、狽、山犬、野猪等を初めヒマラヤに發見さるゝ大小の動物は大概これ有り、特に其害の多きを豹を以て第一とし、虎狽之に次ぐと云へり、ニポール人のボーイは予に告げて云ふニポールは虎の害最も甚しと、シツキム全躰の雄雞が時を作らず全く啞の如きも奇なり。（五）

植物は有名なるヒマラヤ松と稱するを初め大古の深林種々有要の材有り、ヒマラヤ探險の元祖フーカー氏が二万二千呎の高所に發見せる蘚苔は、地球上最高所の植物なりと云ふ、ヒマラヤ山間特にニポール地方に有名なるは石南樹の長さ三丈の上に及ぶ大木にして紅黄白赤其花に種々あり、時には滿山此樹を以て掩はれ段々の綿繡眞に美觀なりと云へり、土人此樹の種或種類の花瓣を食料に供す。（六）

土人特にレプチヤ人中にムルワと稱する酒有り、太き竹の筒に穀物を入れて釀造するものにして、其筒の儘手に携へて其一端に細き管を通じて吸ひ上ぐるなり、其味はウイスキーとビーアの中間にして更に淡泊、アルコール分の少きものと云ふ、老いたるも若きも男も女も好んで之を飲むと我邦人の茶を飲むが如し。（七）

ヒマラヤを下る

夜來ホテル主人の催しにて旅客一同の爲に、西藏の芝居を演ぜしむ、種々の假面を被りて奇妙なる身振りを、なし恰も我國の太々神樂と能狂言をつき混ぜたる如し、樂器は支那の演劇と同じく非常に騷がしきものなり。

二十八日午前九時ダーヂリンを發し來路に復す、車中西藏のラツサに駐在せし西印邊務總辦の一行數人の淸人が同乘せるに會す、云ふ三年間西藏に在り、今任期を終りて本國への歸途なりと、又云ふ二十三日前西藏首府を發程せり、西藏北京の往復はダーヂリンよりカルカツタに出で滊船に投ずるを最便とすと、種々西藏の事情を聞くを得大に益するところあり。

二十九日午後二時カルカツタ着、再びスペンスホテルに入る、

左に同行武田無堂氏が雪山の吟を揭げて此紀行を畢る、　（ヒマラヤ紀行の部畢）

陀士林望雪山

無堂

矗々又矗々、側々又側々。矗々側々千萬重。一道山脉自西北。」爽昧雲氣濃。埋壑又遮峰。蓬勃搖不

定。倏忽變萬容。寒風面如裂。毛髮凍欲折。旭光閃雲間。一瞥如電掣。紫氣散萬峰。白雪作紅雪」少焉雪全消。天豁氣寂寥。驚見千峰萬峰外。更有高峰戴雪凌碧霄。「叫奇喚快聲未了。忽復亂雲所纏繞。萬峰如巖雲如濤。恍疑萬里水淼々」我來懷古又傷今。痩馬曉發陀士林。雲爲衣兮雪爲帆。驟忽欲遊雪山岑。寒劇不可留。景奇不能撫。掉手謝雪山。仙緣從此訣。」

遊北記程（三）

源　清蔭

七月十五日曇五十九度

午前六時ハンメルフエスト着航程百六十哩、朝食後直ちに上陸して市街の後方にある岩山を攀ち、眺望臺にて小休し、次て市街を過ぎ二哩を阻てたる岬角に遊ぶ、此間の海岸には一帶に木棚を設けて無數の鱈を乾燥せり、岬角には銅製の地球を戴ける一碑ありて北緯七十度四十分東經十一度三分、千八百五十二年露帝と諾威王相携へて此處に遊眺せし紀念として建つる旨記せり、午後壹時拔錨

ハンメルフエストは世界最北の市街と稱す、人口三千餘此地も亦漁業貿易を以て名あり、産物の主なるものは鱈、鯨、アザラシ、海馬牙及白熊皮、馴鹿皮、角等なり

五時右舷にヒエルムッソーを見て通過す、此島一個巨大なる岩石を以て成り、所々に洞穴多し、又別に二百尺計りの一岩角海中に直立す、船は洞穴に向て二發の砲と三發の火矢を放つ、洞の内外に在る數万の水禽一時に驚飛するの狀甚た壯なり、此島を過ぐる頃濃霧襲來忽ちにして咫尺を辨せず、頻りに警笛を鳴らす、此時前方と後方に二隻の滊船あり、前方の滊船は濃霧の中を急行せしものと見へ、少しく船影を見たる頃には既に本船を距る數十メートルの處に在り、本船は咄嗟の間に進行を止めて船首を回轉し、危く衝突を避けたり、此船は獨逸より發せし探勝船なりと云ふ、濃霧滋深くして四顧暗憺甚た不快なり、八時四十分停船九時半頃霧少しく散すれば咫尺に陸影あり、拔錨間もなくノースチープの沖に投錨、航程六十哩

濃霧、危險の爲め上陸を見合せ船上より眺望す、北岬は一帶の巉岩にして半腹より上は全く雪にて埋められた

り、又岬の東北端には犀角に似たる奇岩突出す、此をホーチツトと名く、一望中濃霧は断えす往來して忽ち岬影を認れば忽ち模糊の中に失す、景物甚だ凄愴たり、十時半端艇に乘し陸に近けば我れに先ちて一瀬船の碇泊せるありて、此船よりも亦探勝者の上陸せんとする時なり、絶壁の下に方一町許りの傾斜せる空地あり、粗末なる棧橋を設けて上陸に便す、之を攀ぢて直ちに登山を試む、海岸より二百尺計りの高さに至る迄は險峻なる坂路なれ共、是より上方は全く直立の岩石なれば、頂上より、數十の鐵柱より釣下けたる綱を以て攀ち上る、六百尺計りの處に達せば積雪脚を沒し、行歩甚だ困難を極む、漸く頂上に到れば下方は全く濃霧に鎖されたりと雖とも、天氣晴朗少許の雪影を見ず、頂上は平坦なる沙礫茫々として天に接し、時に沼澤あり、又處々に鮮苔植物の紅色細花を見る、此高原には鐵線を張りて踏標とせるを以て、兩船よりの探勝者百數十名は列を作りて進む、行こと二哩計りにして岬の北端に達す、此地はニフスクロエッチンと名け北緯七十一度十一分東經廿五度四十五分四十五秒に位し、海を拔く一千五呎、中央に石碑あり、七十三年諾威王登覽の紀念となす、碑邊に八角の木造家屋ありて探勝の候には北岬の名物と稱し、シヤンペン酒及紀念郵券等を賣る、小憩後岩角に立てば雲霧海洋を蔽ふて凝て動かず、遠く碧天に接す、此中夜の日陽は漸く北方に落ち、將に雲中に沒せんとして徐々と上天に向ふ、探勝者殊に火藥を携へ來りて中夜の銃砲に代ゆるものあり、轟然一發万壁鳴動す、或は瓶を倒して歌ふものあり、或は口碑の祈禱を捧くる、或は撮影に餘念なき、或は植物採集に熱心なる、亦た是れ天上の仙遊に類す、翌日午前一時下山端艇に移れば濃霧晦冥本船の所在を認むるに苦み、僅々の距離に約一時間を費して歸船すれば、船員の注意に依り夜食の準備を整へるを以て卓に就く、滑稽なる一英人あり我々にはミツドナイトサンよりはミツドナイトサツパーの勝る万々なりと、滿堂哄笑登山の疲勞を忘れ、飢渴を醫して三時入褥すれば、船は直ちに抜錨せり

七月十六日曇五十九度

濃霧の爲め駛行意の如くならず、頻りに警笛を鳴らし、徐行また停船す、船長は不斷船橋に在りて運轉手等は幾回となく潮流温度海底の土質を檢するに多忙を極め居れるに反し、船客は無聊を醫せんか爲め、試みに釣を垂れて捕獲の多きに誇る紳士あれば、垂鉛の銅線を

水夫に代つて上くる貴女あり、斯の如く自他相慰めて終日を消し、午後八時より音樂會を開く

七月十七日曇又雨五十二度

午前三時船員に呼醒されて甲板に出で、所謂アイスベークを見る、此時船は進行を止めしが、前頭一帶に銀河の如く、廣袤數十哩の氷塊あり、又其破片の種々の奇形を爲して船に近き漂流せるあり、寒氣を感ずる甚しきを以て須臾にして再船室に入る、十時甲板に上れば寒雨霏々として時に氷塊の漂流せるを見る、晩食の時船員の談に依れば今曉三時半より北方に突進せしが氷塊に支られて再び南下し、七十二度三十五分の處に漂流し、再ひ航進を初め氷塊を避けんか爲めに西方に進み、墨西其暖流に乘じて午后七時より北方に進行するなりと、十時北風猛烈雨を伴ひ來る

七月十八日曇五十二度

午前九時甲板に出れば大小無數の氷塊は流れ來りて船側に觸れ戛々として聲あり、或は顚倒し或は破碎す、十時右舷に一大氷塊を見る、船は方向を轉じて西進し再び氷塊に支れて停船し、午後四時東北に航進す

七月十九日曇又雨五十一度

一昨日來天候陰惡船は東西南北に漂流して殆んど其所在に迷ふものゝ如し、船長は晝夜船橋を下らず運轉手は朝暮の別なく不斷に測量に從事し、偶ま喫茶時間に入り來るものに船躰の所在を問へば、單に滑稽を以て答ふるの外要領を得ず、船客は漸く英氣を沮喪せしむるも、力めて其色を見さず、讀書運動に他意なきものゝ如し、正午僅かに日光を見、滿船忽ち活氣を生す、然れとも其効もなく須臾に雲霧の爲めに沒す、午后七時初めて右舷にスピッベルゲンの陸影を認む、時恰め食事に際せしが、船員の話に本夕は此處に投錨し、明朝ベルサウンドに着すべしと、船客の内卓を敲き歡呼し踏舞するものあり

七月二十日曇五十三度

午前六時拔錨八時甲板に出ればスピッベルゲンの山岳七十餘峯に分れ、各雪を戴きて屹々天表に聳え、其沿岸は全く氷結して一望銀を抹するか如く、船側は無數の氷塊を以て塡充せり、十時ベルサウンド（英稱ビユチフルサウンド）の灣口を過ぎ徐々と灣内に向ふ、四圍の風景真個の銀世界なり、十一時北緯七十七度四十九分十九秒の處に投錨、航程は北岬より七百九十浬なれ共漂流の爲め更に長距離を進行せしものならん

晝食後灣の西岸に上陸す、此處は少し平地にして泥沼

の上に蘚苔植物瀰漫し、一棟の鯨角納屋と昨年探遊船の建てし紀念碑あるのみ也、約半哩を進みて山麓に近けば、融雪の凝結したる一大氷河あり、銀盤の上を歩するに異ならず、左手に海を抜く千七百呎の一峯あり、試みに攀躋し、其半腹に到れば嶮峻にして殆んど板を立つるが如しと雖ども、幸に積雪あるを以て反て足を運ぶに便なり、千尺計りの處に達すれば峻岩直立して少許の雪をも止めざるを以て、又登臨の望みなし、此處より下脚を望めば、氷田は遠く天に接して一大湖に銀を堪ふるが如く、處々の峯巒は氷田の地平線より其頂上を露すのみ、雪中に躊躇し小憩後此峯を下りて前頭の氷田を横斷し、海岸に出んとす、時に他の一隊は登山を爲さんとして氷田を跋渉し、半途より皆歸路に就く、且つ余等に向ひて早く歸船せよと呼べり、其處に達せんと欲し氷田の上を急行、約二哩回顧すれば猶後峯の麓にありて前路の四分の一にも及ばざるが如し、初めて覺ゆ此邊は空氣純潔なるが爲め、音響の透徹速かにして眼界の甚しく近縮する事を、此時天色暗憺として漸く疲勞を感ずるを以て、目的の海岸に向ふ事を止め、最も接近せる岩礁に出で端艇を喚んで六時歸船す

（未完）

評論

社會小觀

日本の世界的人物

楓堂

米の國、茶の國、生糸の國、織物の國、漆器の國、陶器の國、支那に勝てる國、藝者の國、女郎の國、日本の名稱はや、世界に知れ渡れり、然れども個人としての日本人は未だ一人として世界に知れ渡れるものを生ぜざるなり、福澤翁は實に我國近世の偉人なりき、而も島帝國四千万人中の偉人なり、世界には何の影響をも與へざりき、大勳位伊藤侯爵は神武開闢以來の大豪傑ならん、而も世界の人民がこれを記憶するもの果して幾人ぞ、世界の事情は掌紋を見るが如くに精通せる米國「評論の評論」の主筆すら、伊藤博文侯と伊東祐亨氏との區別を知らざりしに非ずや、大隈伯は亞細亞のグラッドストーンならん、山縣元帥は、東洋のモルトケならん、福島安正君は大冒險家ならん、井上哲二郎君は大

哲學者ならん、釋雲照律師は大宗敎家ならん、北里柴三郎君は大醫術家ならん、擧げ來て雲の如き花の如き我國の大名士大達物世界は如何に之を認め居るぞ、蔭辨慶の內擴がり、世界より見れば侯爵博文閣下の名聲も、川上音二郎、さだ奴の方遙に其上にあるにあらずや、セメテ二十世紀の、世界人物傳中に顏を列ぶるものを出だし、世界歷史の一行一節にても占領し得る人間を出だし、或は少くとも其逝去がルートル電報にて萬國に報ぜらるゝ丈けの人物を出だすに非ずんば決して太平洋の英國などゝ威張るべからず、記憶せよ人間の產物今日の儘ならば長へに世界的女郎國、世界的藝者國を以て滿足するの外無きことを、

己惚國民の自尊主義

日本人は公德に欠乏せりと云へば西洋人は私德に欠くるに非ずやと反駁し公德私德兩つながら欠け居ることを何とも思はず、日本は醜業者多しと云へば西洋の密賣は猶盛んならずやと打ち返へして白晝遊廓に入る、力めて萬國の弊害欠點のみを探りて得々とし其長所には毫も目を着けざる一類あり、彼等の偏狹と剛腹なる、新しき說、新しき習慣に對しては理非の見別けもつけずして反對し、到底胸襟を世界に披ひて萬國の長所を取る能はざるの輩なり、婦人に高等の學術は不用なり、宗敎の感化は敎育に害あり、公娼廢すべからず、自轉車乘るべからず、耶蘇恐るべし、雜居忌むべし、昔しのランプ亡國論、今の漢文保存說皆これ同一思想圈內の產物、

婦人と新聞紙

各社記事の方針一定

萬朝記者は前月十二十三兩日の紙上に跨り「婦人と新聞紙」と題し、我國の社交に婦人の無能力なるを慨き、我國婦人を、交際の花たらしむる一方便として、多く新聞を讀ましめ以て談柄を作るを得せしめんと云ひ、且つ曰く、

吾人は尙ほ婦人が讀むべき新聞紙を選ぶに注意すること、新聞紙自身も亦其の編輯に心を用ひんことを希望せざる能はず、歐米人は新聞紙を以て家庭に缺く可からざる必需品と爲すと共に、新聞紙も亦苟くも品格を墜すか如き記事を揭ぐることなし、英語國人が平生使用する語句の清新にして優美なる模範として倫敦タイムスを讀むが如き、新聞紙が

自から居るの地歩も亦高しと謂べし、然るに我が新聞紙中には、屡々しく醜業婦の醜態を書きて掲ぐるあり、善き新聞紙を作りて多く世に行はれしめんとはせずして今日の時勢に有るまじき、殊に新聞紙として有るまじき醜業婦の投票などを行ふもあり、新聞紙自からの着眼低くして精神の卑しき嘆ずるの外なしと雖も、之を讀むもの亦能く其の取捨を嚴にすべし、然らずんば折角婦人の地位を進むべき新聞紙も、効なくして却つて害あらん。

これ吾人は夙に云はんと欲せしところ、双手を擧げて賛せざる能はず、之に就て吾人は各新聞社に望むところあり、想ふに各社の編輯上共に苦しむところは男女の情事或は花柳種を特に露骨に書き顯はさゝれば讀者の氣受け惡く賣行善からずとの事是なるべし、新聞も又一種の營業なる以上如何に社會改善に就て親切心深きも、爲に賣行を減じては何の効もあらず、一社或は二三社が改良案を立てゝ大に此種の記事に注意することあるも、同時に他の各社が今日の儘の筆鋒なりせば只馬鹿を見て自滅するの外あらず、吾人の希望は此際東京各新聞社の聯合して男女の情事花柳種の記事に關する程度に一定の規約を定めんこと是なり、かくして各社同時に記事の改良を實行せばいさゝか刻下の新聞時弊を救ふを得ん、

現に婦人と新聞紙を第一面に論じて右の如く說ける萬朝も同日第三面の紙上には大々の矛盾あり、特に「榮華物語」「男傾城人でなし」「色男の鉢合せ」「女中の同盟辭職」「此親にして此子有り」「代議士の奧樣下女に閉口す」等の雜報に至ては、到底母子兄妹同座して讀むべからず、かゝる談話を無盡藏の寶庫として婦人が談話の資料となるが如きことゝなりては大變なりと云ふべし、

吾人は敢て萬朝を責むるに非ず、これよりも甚しきもの都下新聞の大多數悉く然りと云ふべし、只吾人の望むところは各社聯合の上一日も早く此種の記事に就ての矯正策を講ずるの機に逹せんこと是なり、特にかゝる發議は有力朝報社の如きものに依て提出せられんことを切望せざる能はず、

探撿の餘地

亞弗利加も南洋も世界の各部は悉く十九世紀に探撿し盡されて、二十世紀への宿題として殘れるもの只兩極地方と支那の一部則ち西藏地方のみと云ふ、兩極探撿

は世界の各國より年々非常なる熱心と勇氣を以て探撿されつゝあり、後進日本國の今より着手するも其經驗到底白人に及ばず、只それ西藏の探撿に至ては白人に比し我國人は多くの便宜を有す、我國冒險家の手を着くべきはこれ西藏なる哉此秘密國を世界に公開するの鍵は日本人に託されたりと云ふべし、吾人は益西藏探險熱の盛んならんことを望む、

鐵道工夫の風紀

鐵道の新に敷設せらるゝ沿道の村驛、必ず其男子間には賭博盛んに女子に私生兒多し、素朴なる田舍人を生意氣にし惡知慧を付るも鐵道工事に若くものなし、蓋し、これその工夫が縱横無盡に風俗壞亂のバチルスを植ゑ付けつゝ進み行くが爲なり、茲に於て鐵路の開通は一面文化の開發をなすと同時に剛健なる國民の中堅を腐らす機關たり、其實例九州に於て北陸に於て其他到處にあり、鐵道工夫風紀問題は遞信大臣の決して閑却すべからざる問題とす、

年少力士に就て

板垣伯に望む

相撲の盛んなること今日の如きはあらず、吾人も亦相撲好きの一人、無邪氣にして弊害少き娛樂はこれに越すものなし、然れども其盛んなるに從て力士の需用多く、普通良家の子弟にして軀格偉大尋常以上のものを見つかる時は大抵力士にせんとするの風潮有り、これ大に注意すべきの事なり、本人が成人して一通りの敎育を受けたる後、本人の志望にて力士となるが如きは素より批難すべきことに非ざるも、僅に十二三才心志未だ定らさる時に於て直ちに力士の仲間に投ずるは、實に人の子を損ふものなり、

力士の盛時僅に十年、年齡三十前後にして既に老境に向ふ、廢業後年寄となりて尋常の生計を營み得るは誠に少く、多くは惣身に知慧の廻り兼ぬる無藝大食の廢物、其多數は人夫となり土方となりて終るなり、現に幕内錚々の力士たりしものが車の後押しとなり、鑛山の工夫となり下れるを聞く、况んやそれより下の力士輩に至ては憐れ果敢なき晩年を送らざるべからず、かゝる階級に良家の子弟を投ず、恰も女兒容貌の美を

見込んで[illegible]者。女郎に賣り飛ばすと同一の罪悪にあらずや、

近時埼玉縣より足立山大五郎なる十三才の小年が板垣伯の手に依りて友綱の門に入れるあり、吾人は回向院に此未來の力士を一見し相撲道の今後益す隆盛なるべきを喜びしと同時に、更に彼が晩年の悔を想像し一種異様の感に打たれたりき、思ふに力士が地方巡業中に連れ還る少年力士は今後益多からん、板垣伯は最も相撲に熱心なる人にして又一方に風俗改良會の主唱者たり、此際此等の弊害を除き、力士に必ず普通の教育を受けしむること、彼等が放埓に流るゝ弊を防ぐこと、廢業後彼等の生計に對する方法を講ずること等に一臂の力を致し、改良の實を擧ぐるを得ば、其幸福獨り力士のみに止まらざるべし、敢て伯の一顧を請ふ、

遊獵禁止岩崎家の家憲となる

遊獵が紳士の爲すべき娯樂にあらざるを說くは我社十六年來の持論なり、昨冬來遊獵家の誤て其妹を殺せるもの其子を殺せる者弟を傷けたる者相次で生じ、特に岩崎康彌氏の大學生稻垣長三郎氏を誤殺せるは多く世人の視聽を引けり、今回岩崎家は長三郎氏の父が潔白にして誠意ある忠告に感じ、斷然遊獵禁止を以て岩崎家永久の家憲としたりと、(彙報參看)是れある哉吾人はこれを以て當世遊獵紳士の龜鑑となさんとす、

●小紛錄

（ち、　せ、）

△敢て內務省に問ふ、今日若し世界博覽會を日本に開くとし、世界の彫刻家より無數の裸体諸裸体彫刻を出品し來らばいかに之を處置せんとする　吾人敢て雜誌「明星」を辨護せんとするに非ず

△敢て內務省に問ふ、今日若しゾラの小說を悉く直譯し出版せんとするものあらばいかに之を處置せんとする　吾人敢て册子「戀愛文學」を辨護せんとするに非ず

△敢て內務省に問ふ、今日若し各日刊新聞の艶種を纏めて一卷となさんとするものあらば如何に之を處置せんとする　吾人敢て小說「破垣」を辨護せんとするに非ず

△吾人は前號の本誌非風俗壞亂生なる人の投せる鶴ヶ岡祠畔の女人石なる一文を讀み、大に同情の念有り、リンガ崇拜の痕跡は我國到る處に殘れり、第一聖天樣と云へる淫祠の本尊の如きは先づ大に取締るべきものにあらざるか

△一小册子の淫猥記事を取締るより先づ日刊新聞の三面記事を取締る

の要あらざるか

△然れども吾人かゝる本末の轉倒を以て不平とするにあらず、只いさゝか物足らぬ心地するのみ、文學の神聖とかに假託して、駄小說に獵りがはしき事を書く病的小說家の如きは今後も遠慮無く征伐せんことを望むものなり

△吾人も又「破垣」を讀みたるの人、公平に言へば内務省の處置は當然なり、只社會にてそれよりも甚きものが尤めを受けずに殘りて居るを遺憾とするのみ

△自由廢業問題以來風紀に關する有松書記官の功勞は吾人の實に多とするところ、希くは今日の方針をして永く各種の方面に應用されんことを

△未成年禁酒法案の成功せざらんとするは恨事なり、然れども吾人が先づ政府に乞ふところは賞杯の廢止なり、賞杯の事業こそ野蠻時代の遺習、その昔し「何々の前」など云ふ美人に添へて下されしものに非ずや

△教科書出版書肆の運動員曰く、府縣の檢定委員会にてごまかし易きは三十代の人、五十以上のものは賄賂の利目少しと、三十代は肉慾に驅られて最も金錢に渴するの時代なるこれ一の源因、明治年間の新教育がかゝる人物を作りたるこれ他の大なる源因

△大和田建樹、ジョンバールに壓倒せらる、鐵道唱歌のストライキ節に壓せられたるを云ふなり

宗教時事

東京學世界の宗教

衆山

單純なる唯物的傾向のみにて、毫も宗教倫理などの考へ無く、修養など云へることとは全く無頓着、唯規定の學科さへ修め得らるれば上の部にて、他は滔々として墮落し、宗教や哲學は世に實用無き人間が法螺の爲にイヂルものとのみ心得たりし東京學生界思潮も、近時やゝ自己の修養、行爲の統一などに注意し、隨て宗教を聞かんとするものゝ多くなりしは事實なり、左の觀察は重に本郷神田を中心としての事なれども、以て東京學生界の宗教を代表するものと見て差支へなかるべし

●學生を分ちて單に唯物的傾向の者と、自己の修養行爲の統一を注意する者との二大別として、後者の中自ら非宗教的と宗教的の二類あり、非宗教的なるは

一、哲學的なるもの　所謂倫理的實在などを立脚地となさんとし、頻りに韓圖あたりを窺ふもの、

二、大學の文科を中心とす、其數極めて少し
二、武士道的なるもの　男兒須らく區々屑々の事に拘泥すべからずと、强て粗放家らしく粧ひ、冷酒をあをり、吟詩一聲劍舞を試むるなど東洋流豪傑肌を養ふもの、大に尙武の風あり、弘道館流の感化を受たる者等に多し、單純直截心事の淡泊なるは此種の長所なり、前者に比ぶれば其數多し

宗敎的なるは

一、汎爾なる宗敎研究者　佛とも限らず基督とも限らず、苟も宗敎的敎訓に對しては忠實に之を研究せんとす、此類最も多し

二、純粹佛敎主義　眞宗、禪の、二者を信ずるものあり、其他は殆んど無し

三、純粹基督敎主義　新敎多し、日曜毎に敎會に出で洗禮を受けたるものあり、佛敎主義者よりも信仰堅實なり

●學校の種類その專攻の科目に依りて宗敎に遠きものと近きものゝ生ずるは免かるべからず、高等學校を以て例せば一部二部に宗敎に對する信者多く、三部に少數なるが如し、三部醫科の比較的宗敎心あるはゲーテ、シルレルなどを讀み、文學思想より引て宗敎思想に及ぶ故ならん、兎に角、近來尋中の生徒に至るまで宗敎書類を手にする樣なりしは著しき傾向なり

●基督敎と佛敎の勢力を比較するに基督敎遙に佛敎の上にあり、其重なる原因は

一、佛敎の敎會堂無きこと
寺院は青年の出入に適せず、よし寺院に行くとも感服すべき說敎のあるところ一個所もなし

二、學生に向ての說法者無きこと
少數ながら無きに非ず、敎會堂無きが爲基督敎の如く每週一回の福音を宣傳すると能はず

三、學生の讀むに適する佛書尠きこと
これ大なる佛敎の欠點

神田の青年會館を初め、三田の惟一館、本鄕の中央會堂等青年學生に對する基督敎傳道の場所は到處にあり、信仰問題に苦悶し、佛敎も基督敎も併せて聞かんとするも、佛敎には場所無く、人無く、書物無し、故に於て本鄕ならば手近き臺町の基督敎青年館、壹岐殿坂敎會などにて每週海老名彈正氏等の講義說敎を聞くなり、近來下宿屋の二階又は學窓にて每朝氣靜かなる時聖書(バイブル)を味ふもの多し、これらは佛敎の經典を求むるも堅くるしくして齒に合はず、餘義無く手近き聖書を

讀むなり

●佛敎青年會、基督敎青年會、集まる人數の上よりは佛敎の方多し、高等學校を中心とせる德風會の如き百人の會員毎回四五十の出席者あり、然れども佛敎青年會の中には

一、自身の父母佛敎信徒なりしと云ふ關係より

二、佛敎の術語或は哲學的の部分を研究せんとの念慮より

三、自分が寺院に生れたるか或は關係ありとの事より

入會し、出席するもの多く、比較すれば信仰の爲に出づるもの少し、勿論基督敎を聞く仲間にも英語獨逸語の研究の爲め、或は聖書を文學研究の材料の爲に講讀するものあり然れども佛敎の側は概して散漫にして輕浮に、基督敎の方は堅實にして眞面目なりとの斷案は下され得べし

●學生間に宗敎を皷吹する重なる人

基督敎

內村鑑三、松村介石、海老名彈正、横井時雄、巖本善治、押川方義、本多庸一、井深梶之助、諸氏

佛敎

村上專精、清澤滿之、前田慧雲、島地默雷、南條文雄、井上圓了、釋宗演、織田得能、諸氏

吾人は試みに八氏づゝを擧げたり、基督敎の方は決して之に盡きざるも佛敎の方は是にて盡きたり、特に學生傳道に向て基督敎の態度は常に進擊的なるに反し佛敎は常に受動的にて、招聘にあらざれば出でず、質問に非ざれば說かず、其間非常の相違有り、且つ佛敎の方一二氏を除ひて今日の科學を應用して學生の耳朶に入り易からしむる能力に乏し

●內村鑑三氏の求安錄、松村介石氏の修養錄、大に學生間に愛讀せらる、海老名氏の基督敎要領講義も學生感化に與つて力有り、雜誌、六合雜誌、聖書の研究、警世、新人悉く學生間に愛讀せらる、村上專精清澤滿之前田慧雲諸氏德風會を感化す、前田氏は日猶淺し、村上氏の活氣有る講義と新佛敎の皷吹、清澤氏の因果法より割出せる論理的信仰、學生界に佛敎を注入する二大源泉たり、佛敎雜誌として青年向きのものは、新佛敎、精神界の二有り

●釋宗演氏の麟祥院に禪海一瀾を提唱するや、學生の來るもの多く、中には參禪せしもあり、然れども多くは禪宗は意氣な宗敎だとか、膽力を練るに必要だとか

云ふに過ぎざるが如し、注意すべきは高德雲照律師の如きも學生間には一の感化も無きことなり、蓋し舊日本の舊人物に適合し全く青年の腦髓には骨董品として見るより外無ければなり、今後眞宗が一層平民化し俗化し、今日の如く他宗の儀式や服裝を眞似ずして、東京の各所に新しき敎會堂を持つに至らば、初めて青年の出入し得る佛敎敎會にならん

佛敎各宗の合同と云ふ事

佛骨を暹羅に奉迎し、或は印度錫蘭を巡錫せし佛敎各宗の高僧達は如何に感ぜられしやを知らず、苟も常識を具へたらんものは南方佛敎國の狀態を見て、いかにも情け無き兄弟を持てることを覺れるならん、南方亞細亞亡國人の國は確に宗敎中毒なり、其宗敎中佛敎も其一分たることは爭ふべからず、日本佛敎の中若し世界に向て活動を試みんと思ふものあらんか、彼等を改革して然る後提携するならば知らず、今日の南方佛敎國に向て連合提携などは決してなすべきにあらず

日本の佛敎、眞宗を除ひて他は悉く南方佛敎と同一或は類似の弊源を持てり、眞宗が他佛敎各宗と合同するが如きは眞宗の自殺を意味す

此心此眼を以て今日大菩提會の如きものを見る確に亡國的行動

◉碎言集

▲今日の佛敎本山　をして世界的ならしむるは猶早しセメテ東京的ならしめよ

▲學校敎師　を作らんとす、師範學校を出づる前實際に生徒を敎へしめて其伎倆を認め然る後卒業證を與ふ、醫師たらんとす醫科大學は生徒を患者に接せしめ、實地に熟せしめたる後に非れば醫學士たらしめず、佛敎各宗の學校果して此實地修練をなせるものあるか

▲神學者　の宗敎家と異なるは、倫理學者の道德家と別なるが如し、今の宗敎學校神學者のみを作りて宗敎家を作らず

▲基督敎徒　大學傳道の結果として九州に一大學を興さんことを計畫し、日刊新聞を東京に創めんことを計畫す、資金募集員は已に米國に向ふ、青年學生間の傾向前に言へるが如く種々の畫策又此の如し四五年後基督敎の一新紀元を作らん

▲北京にて得たる　西藏藏經の原版一は宮內省に一は東本願寺に山口師團長りよ送り來れり、我邦一の國寶を加ふ

文學評論

偏頗なる社會的待遇

春潮

さきに文士保護の論唱へられ、今また美術家保護の議傳へらる。文士保護の論は。輕佻なる文家先生のために、是非を究むるに及はずして、冷笑の裡に葬り去られ、而して、美術家保護の議は、堂々たる代議員の手によりて、衆議の案に上らんとす。

文士の保護は、何が故に否定せられて、美術家の保護は、何が故に肯定せられたるか。案ずるに、文學は美術の一科なり。文學と、文學以外の美術、すなはち美術家保護論者の所謂美術といふものは、美を目的とするに於て、決して差別あることなし。美術家の保護にして、肯定せらるべしとせば、文士の保護も、また肯定せられざるべからず。しかるに、さきには、これを排斥して、今は、これを歡迎せんとするは何ぞや。同一の美術に對して、かくの如く社會的待遇の輕重あるは、吾人のはなはだ服し能はざる所也。

曖昧なる範圍別

美術家保護といふ。而して、その保護すべきもの丶中には、すでに美術家の一たる文學者を除けり。美術家保護を唱ふるもの丶美術家といふ範圍は如何。そもそも美術の種類は多し。繪畫、音樂、詩歌、彫刻、舞踏の純正美術は勿論、實用をかぬる者としては、陶器、鍍金等の工藝美術あり、また泰西になくしてひとり我國にのみ存する挿花その他の美術あり。知らず、保護論者は、これらのいづれを以て、その所謂美術なるものとなすか。また、その保護を與ふるにあたりては、これらの凡てを擧げんとするか、もしくは、その中の二三を拔かんとするか。吾人は、敢てこの議の是非を問ふものにあらず。されど、かくの如き曖昧なる範圍別は、後に至りて或は誤解をひき起さんことを恐る。

先づ代はるものを求めよ

中學校に漢文科を存するか、もしくは存せざるかの是非は、教育上の見地より判斷すべきものにして、吾人の立脚地より論議すべきものにあらず。こ丶を以て、吾人は、その教育上の利害に關しては、しばらく口を

噤んではざるべしといへども。漢字そのもの丶存廢、ことに目下たゞちにこれを廢止せよといふものに對つては、いささか說く所あらざるべからず。はかるに、廢止論者が、廢止の理由として擧ぐる所は、漢字の使用はなはだ困難にして、これを習得するに不便少なからずといふを以て、その主となすに似たり。漢字の使用はなはだ困難にして、これを習得するに不便少なからざるは、まことに、そのいふ所のごとし、しかれども、たゞ、この理由を以て、目下たゞちに廢止すべしといふは當れりや否や。漢字、名は稱して漢字といふといへども、上世一たびこれを輸入してより、三千年の間、久しく使用して、今はほとんど國字といひて不可なきに至れり。學者が高遠の思想を表はす著述はもとより、普通國俗が日常の意を傳ふるものに至るまで、悉くこれによりて、その用あまねく天下に布けるを見る。この時に於て、容易くこれを廢止せんとせば、何を以てその用を充たすべきか。かくいはゞ、論者たゞちに應へていはん、新國字あり、假名字あり、羅馬字あり、と。されど、新國字や、假名字や、羅馬字や、これら果して漢字に比して勝るものなるか。或は漢字が有する困難と不便とは免るゝことを得ん。されど、これに代つて、なほ他の困難と不便とを生ぜざるか。況んや、新國字の如きは、國字改良の會、わづかに成りて事業いまだ緒に就かざるに於てをや。かくの如くにして漢字の廢止を唱ふるは、あまりに早計に失したり。敢て廢止を唱ふるものに告ぐ。漢字を廢止せんと欲せば、すなはちまづ、これに代るべきものを定めよ、しかして後、これを叫べ。しかる時は、これを廢止せずといへども、輿論は靡然として、その佳なるものに赴かん也。

言文一致の新研究

新聞紙は最も時代に直接するもの、隨うて新聞紙の文章は、最も時代の思想を表示するもの也。我國新聞紙の變遷を知れるものは、新聞紙が時を經るに從つて、いかさまに進步し、而して進步するとともに、その文章が、いかに變化したるかを見るべし。就中、三面記事は、新聞紙が讀者の範圍を擴大して、下層社會、別言すれば低級の國俗に及ぼせる時に於て、初めて發生したるものにして、而して、下層社會を目的とするが故に、その文章が、いかにこれらの讀者に解し易からしむべき平俗の文躰を擇ばれたるを見るべし。試に今

日の新聞紙を展開せよ、その三面記事の文章が、いかに一面もしくは二面記事の文躰と異なりて、婦女童幼にだに解し易からしむべき平俗の文躰を以て記されたるぞ。案ずるに、三面記事の文躰は一種の新躰也。雅俗折衷にあらず、言文一致にあらず、折衷、一致の二躰をさらに調和したるものにして、名づくれば、かりに新聞調ともいふべきか。修辭上の嚴密なる批判を以てすれば、その文疵は、もとより累々として數ふるに遑あらざるべし。しかも、この文疵あるものにして、婦女童幼にだに、一讀たゞちに意義を領せしむるを以て見れば、この躰に、何等かの特長あるを否むべからず。これ實に折衷體及び一致體の遠く及ばざる所にして、ひとり、この體のみ、その功を擅にする所以也。この體は、何人か創始したる。嚴密なる考證眼を以て新聞紙史を稽査したらんには、これを創始したるものはなしといふとも、少なくとも、その以前の文體をしてこの方面へ向はしむるに、與つて力ありたるもの、思ふに、或はこれなきにあらざるべし、しかれども、これ、もと、新聞紙の發達に伴ふ自然の必要よりして、かくの如き効果を生みしものにして、決して個人の力によりて成就したるものにあらず、すなはち、讀者の範圍擴大なるに從つて、折衷體以外、一致體以外、さらに、この體の發生を促したるもの、この體は實に文壇に於ける一種の新體といひて可なるもの也。

このごろ、國字改良、國文改良の議、喧しきに際し、文體に關して研究を試みるもの漸く多し。言文一致會の如き、また、その一也。しかも、言文一致會は、文體の各方面に向つて研究せるに關はらず、いまだ、これにつきて着手したるを聞かず。吾人は仝會の諸君に向つて、これを研究せんことを勸告す。

宙外氏の調和躰

新聞調すなはち三面記事の文體より發明したるにあらざるべしといへども、これと同一の體をとるものを、小説における後藤宙外氏とす。宙外氏の文體は、雅俗折衷にあらず、言文一致にあらず、折衷、一致二體の間にあるもの、換言すれば、二體をして一層調和せしめんとするもの前の新聞調に對して、かりに、これを宙外調ともいはんか。

氏が、この體を初めたるは、三面記事の文體が、いまだ今の如く明かに、その體を成さざりし前にあり、故を以て、氏はもとより三面記事によりてこの體を得來

りたるにあらず、氏が一家の識見よりして、創始したるものなるべしといへども、氏と、三面記事者と、ともに、撰を一にするを以て見れば、この體が、折衷體以外、一致體以外、別に優る所あるを愈々信ずるに足れり。

吾人は、ふたゝび新聞調とともに併せて氏の文體を研究せんことを國文研究者に告ぐ。氏の文體を見るべきものは、創作集『かけらふ集』あり。

淺薄なる美論

博士井上哲二郎氏の學が、いたづらに博くして精しからざるは、常によく人のいふ所なり。このごろ『帝國文學』に見えたる「人工の美と自然の美」の一篇は、また、實に世評の當れるを示すものにして、氏が博きを貪つて、淺きを顧みざる學問の度をうかゞはしむるに足る。「人工の美と自然の美」といふ主題は、美學上の好問題也。しかるに、氏は、これを解說するに、輕々常識上より論下して、嚴かなる科學的說明、いひ更ふれば、美學上の說明を以てせず。讀むものをして、皮を撫して核に徹せざるの憾あらしむ。もし、强いて、この篇の探るべき所を擧ぐれば、學者以外の讀書家、すなはち俗をして通じ易からしめしといふにあるのみ。博士の名によりて公にせられたる美論としては、はなはだ淺薄なりといふの譏を免るゝ能はず。しかれども、これ僅に六七紙面の文字、或は初學者のためにせんとして說きし所なるやをはかるべからず。吾人は氏がさらに、蘊蓄をひらいて、眞の美論をものせらるゝの日あらんことを望む。

喜ぶべき也

このごろ、美術に關して記實の筆を執るもの二人を得たり。一は『帝國文學』の高山氏にして他は『讀賣新聞』の局外閑人飯島虛心氏なり。高山氏は主として奈良時代の事實を稽査し、飯島氏は、概ね浮世繪の傳系を考證せり。高山氏の稽査や、必ずしも精しからず、飯島氏の考證や、また實に『浮世繪編年史』の抽出に止る。ともに、いまだ完を以て許すべからず。しかれども、今の如く美術的智識の幼稚なる今日、二氏が、この種の研究に從事せるは、はなはだ喜ぶべき也。

●文壇烟草のけむり

スイガラー黨

既に陣笠連あり、豈ハイカラー黨……オツト、スイガラー黨なかるべけんや、即ち投す。

◉日く漢文科存置請願、日く美術家保護請願、日く言文一致採用請願、二十世紀になつたら、いろんな請願が出る。かういふ請願が出るやうでは日本も大分文明國になつた、と、息子のハイカラがいふのを、阿父さんが聞いて、それでは俺も帶刀の請願をしやうかの。

◉「彼の所謂批評家なるものの言を聞くに、徒に作家を苦しむることをのみ自家の本領と心得、罵詈讒謗あらゆる無責任の言を羅列して以て得々たるのみ、」西片町の虐待法學士ぢやあるまいし、オホン、憚んながら研醜を分けていつて貰ひたいれ、試に問ふ、旭東子、お前は?

◉「馬鹿にかまふは尙馬鹿とは梔白小僧の棒ちぎりに裏店のお神さんが撫慰する詞と思ひしに計らざりき、廿世紀源頭、亂槃なる太陽記者に對してわれと自ら叫ぶべき語なるべしとは、」成程、そこで「へヘンお朕で茶の沸く次第といふべきのみ」か。

◉風俗壞亂、罰金二十五圓、人生字を知るは借金いや罰金のはしめか。

◉「自分でも小說家を以て任する程の伎倆がない、人情の至微を描くやうな纖細な筆がない、例へば男女の間を寫すにも荒づかみで細かい人情の面白味などを書くだけの力量がないと思つてます、其代りに人情の描寫といふ垣か越えて危なく猥褻に近づくやうな處は少しもないと思つてました、」眷庵氏、よく己を知るもの。

◉なぃ〳〵、アーピングの『スケツチブツク注釋』はないか、と、本屋の店頭に立ツたインバ子スがいふのを、注釋はいろ〳〵あるが、何になさるので、と、番頭が聞くと、何さ、歌舞伎座へ來た泰國俳優がリツプ、ヴハン、ウ井ンクルをやるので、其筋書をかくのさ。

◉一、花道を廢する事、二、鳴物は舞臺の後にて奏する事、三、佛國にて學びし泰西の演劇を折衷する事、これ川上オツペケが吹く所、てな事をつしやいましたよ、とは、伊勢屋の小僧も知つてるよ。

◉「あゝ雪池の如きは竟にこれ前世紀のハイカラ黨か、」雪池先生、地下にハアクショしていはく、俺のことを惡くいつて居あがる。

◉「名娟なる自然、」「摺博なる時文、」「樵典の文學、」ちよいと、どんなものでしやう。

◉「小櫻威」が再刊したとさ、須らく飯田四丁をよけて通るべしかれ。

政界漫言

城陽政客

憲政本黨の紛擾

增稅問題は憲政本黨に大打擊を與へたり。大隈總理は增稅贊成演說を爲して其意見を堂々發表せり。日本現下の事情は經濟上財政上外交上の三點より增稅の止む可らざるを說き以て黨員の一致協力して將來の準備に從はんとを欲せり。然るに非增稅派たる東北地方の代議士及び舊革新派の代議士三十四名は斷然脫黨して其意志を貫徹せんとを以てせり。名は增稅問題に對する

紛擾なりと雖も其內面を覗んか之れ舊進步派に對する舊革新派の反抗なり、非增稅を唱へ或は脫黨を煽揚し或は政務委員を攻擊するもの多くは之れ舊革新派の連中にあらずや、楠本男の脫黨の如き何ぞ夫れ滑稽なるや、世人は冷笑して曰へり。之れ裏店に於ける夫婦喧嘩のみ仲裁人なくして自ら平和に歸せんと予は寧ろ異分子排除を以て憲政本黨將來の爲め幸福ならんと考ふるもの、此際大隈總理の强硬ならんことを祈る

對外硬とは何ぞや

近時外交問題に對し所謂對外硬なる好文字を見る、そも〱對外硬とは何ぞや、口に激語を爲し手に劒を振ふの云ひか、急務激言を叫び無責任なる擧動を爲すの云ひなるか、靈活なる外交上の駈引如何に頓着せず筆に口に當局者を困窮せしむるの云ひなるか、東亞の大勢を知らず其實勢の移動する所以を究めず漫然國家の危急存亡を唱ふるの云ひなるか。近時對外硬を標榜して起れる團躰あり。國民同盟會と云ひ、青年同盟會と云ひ其外二三の曖昧なる團躰あり彼等は滿州問題を捉へ來り盛んに對露政策の硬ならんことを絕叫す。對外政策は凡て自利主我を以て現今の通義と爲す、强硬手段に出づるも可。溫和手段を採るも可、要は國家前途の大計を考慮し大勢移動の路程を計量し而て後ち之を實行す可きのみ、對外硬を眞正面に標榜するをを止めよ、國家の外交は一定不動に非ず群犬の喧々たるより一犬の疾走猟獲を爲すにしかじ

三十四年度豫算の删減

明治三十四年度歲出入總豫算は衆議院を通過したり、政府の要求額と議決額とを比較するに左の如し

歲入	要求額	二億五千四百五十一万九千五百十五圓
歲出	要求額	二億五千二百九十三万三千四百三十圓
歲入	議決額	二億五千四百六十万五千五百八十一圓
歲出	議決額	二億五千〇五十一万八千六百八十二圓
差引		
歲入	增加	八万六千六十六圓
歲出	減額	二百四十一万四千七百三十八圓

二百四十餘万圓の删減額少からずとせず而て、如何なる事項に就き删減したるか其重要なるものを擧げん

府縣俸給及旅費	六十万圓
內國徵稅費	二十七万圓
臺灣兵營建築費	五十万圓
海軍軍事費	八万圓
裁判官俸給	四十八万圓

遞信費　十三万圓
南清貿易擴張費　廿三万圓

余輩の尤も悲む處は府縣俸給費削減に在り、物價騰貴民間事業勃興の今日に於て尤も憐む可く尤も同情を表す可きは實に地方判任官なりとす、彼等生活の狀態を見よ何んぞ憐むべきの甚しき。彼等は薄給なるが故に機會もあらば民間事業に投ぜんとす。行政不振の基因は、實に玆にあり、故に今日の急務は勅奏任俸給を削減して之を判任俸給に増加するにあり、人民代表として議院に在るもの薄情にも地方人民に直接の關係ある是等小吏の俸給を刪除す、何等の無情ぞ、幸にして貴族院に於て復活せんか邦家人民の幸福何を以て之に如かんや

増税と新事業計畫

國家の増税を行ふ誠に已むべからざる形勢に遭遇すればなり。北清事變は世界列國の尤も重大視する處帝國の位置として永遠なる計畫を爲し以て東亞に於て帝國の位置を確保せざる可らず、而て之に關する費用の豐富を示すの必要あり之れ増税の已む可らざる所以。財政紛亂の實あるは當局尚之を口にす、伊藤侯の財政整理會を設置せんとする實に之が爲めのみ、而て紛亂を整理する歳入計畫に待たざる可らざるや明白なり之れ増税の已む可らざる所以、其外公債償還の如き資金融通の如き財政上經濟上緊急切要なる事多々なり。去れば今日に於て緊急欠く可らざる事業の外政府は新に事業を企畫するが如きを愼まざる可らず、然るに彼の呉製鋼所設置の如きは果して如何。六百餘万圓の大計畫を爲し以て財政困難の我邦に益々負擔を加重せしむるに至る、何等の不法ぞ。八幡製鐵所の起る我邦軍器獨立の必要上より製鋼業を爲さんが爲にあらざりしや而て既に其落成を告げ製鐵に製鋼に其製造を開始せんとしつゝあるに當り又も軍器獨立を口實として呉製鋼所設置を觀るに至る余輩は政府の傍若無人なる手段に驚かざるを得ず、幸にして貴族院の在るあり。此の如き不急の事業費は斷々乎として之を否決せんことを切望す

大在野黨の必要

憲政本黨は分離せり、帝國黨は氣息奄々たり、中立派は呆然として何等活動の見るべきものなし、此時に當り獨り揚々として天下に横行するは政友會なりとす、

若し伊侯の宣言書の如く活動しつゝあらんか邦家の幸福何を以て之に加へん、唯だ悲む可きは政友會近時の擧動は之に反す砂糖消費税に關する態度の如き譬ひ十月説に可決せりと雖も苟も堂々たる大政黨が二三商人の爲めグラ〳〵然と動きしが如き何等の醜態ぞ、一億六千万圓餘の經常歳出を三分間にて決議したる如き何等の輕擧ぞ、而て彼等黨員なるものを見よ利慾問題に關し狂奔執着たゞすがら賄賂の少からざらんことを恐る内部の腐敗活動の不公平、一に繋つて政界獨占に在り。今日の必要は在野黨の活潑なる運動にあり。而も憲政本黨と云ひ帝國黨と云ひ一として政友會を警戒するに足る實力を有せず余輩は彼等が對外問題に一致するを機會として各派解散の上更に有力なる一團幹を成立せしめんことを希望す、大隈伯の首領に適せざるは既に明白となれり、起る可き大在野黨の首領として貫目あり手腕あるもの果して誰れぞ玆處に一人あり曰く近衛篤麿君

星亨君に與ふる書

河上清

星亨君足下

僕足下と一面の識あるに非ず。而かも敢へて足下に向て一言せんと欲する所以のものは、洵に足下が磊落の偉才を懷き、蓋世の意氣を持して、猶一世の指彈を被り、天下の擯斥を受くるを惜めばなり。足下夫れ僕が悃々の情を諒として、少しく省みる所あれ。

星君足下、足下が一代の奇傑たるは誰か之を認めざらんや。曩きに自由黨が山縣内閣と提携して、却て爲めに侮辱せられ、醜弄せられ、蹂躪せられて、進退殆んど谷まらんとするや、終に能く局面を一轉して、自由黨をして今日の盛運を致さしめたるもの、實に足下の力に依らずんばあらず。東京市疑獄事件の起るや、足下亦醜類の一人として某の爲めに告發せられ、其極や終に遞信大臣の地位を抛たざるべからざるに至れり。而かも足下は忽ちにして捲土重來、政友會の牛耳を握て、隱然として其の首領たるが如きの觀あり。藤侯の政友會を組織するや、總理獨裁を以て其の大方針大精神と爲し、黨の指揮運用一に總裁の手中に在りと宣言したりき。而かも這の宣言や久しからずして一片の空言に歸し、今や總理の實權は足下の双手中に掌握せらるゝの觀あり。收賄事件の餘波は、自由派の市參事會

員及び市會議長を獄裡に拉し去て、市政に於ける自由派の勢力に一大頓挫を來したり。されど足下が一たび起つや、忽にして頽勢を挽回し、足下自ら市會議長に選擧せられ、市參事會員の補欠選擧亦盡く自由派の勝利に歸せり。觀來れば、足下が政界に横行濶歩するの狀、實に壯快なるものあり。噫、磊落の奇才、蓋世の意氣ある者に非ずんば曷んぞ能く玆に至るを得んや。惟ふに、足下の才と氣とに感嘆する者獨り足下の友のみに非ざるべし。足下の敵と雖も、豈に足下に對して多少感嘆の念を抱かざる者あらんや。

然り世人は咸な足下の技倆手腕の非凡なるに感嘆せり。而かも足下は終に世人の敬服と親愛とを買ふ能はずして、却て其の指彈擯斥する所となるは、寧ろ怪しむべきに非ずや。看よ、苟も正義を標榜し道義を主張する者は、一人として足下を蛇蝎視せざるは無きなり。宗教に關係し、教育に從事する者は、大抵足下を惡魔視せざるは無きなり。之を要するに、世人の眼に映したる足下は、實に正義の敵なり、道德の破壞者なり、最獰最惡の暴漢なり。是を以て足下往々善行美擧を爲すと無きに非ざるも、空しく嘲笑罵理に葬り去らるゝの恨あり。足下が東京市教育會長に選擧せらるゝや、世の教育家は如何に之を苦笑したるぞ。足下が麻布中學の開校式に臨んで教育の演說を試むるや、世人は如何に之を嘲笑したるぞ、足下が「謹で社會公衆に告ぐ」の一篇を公にせるや、世は如何に之を罵倒したるぞ。而して世人は今又足下が東京市教育會に於て教育演說を爲さんとするを聞て、啞然として言の出づる所を知らざるものゝ如し。世は實に足下を以て、正義を談り、教育を論じ、道德を說くの資格なき者と爲すなり。嗚呼、是れ果して世人の誤解か、抑も亦足下の罪か。

星君足下、足下は果して惡魔の類か。僕不明にして未だ世評の眞僞を判斷する能はず、不敏にして未だ足下の眞相を觀破する能はず。然りと雖も足下一代の偉才を抱て、加ふるに平生の私行頗る潔白なるを以てす。縱令其の道義德操一世に標榜するに足らずとするも、又敢へて世人の想像するが如き沒道義漢に非ざることを信ず。今や擧世滔々として婬樂に耽り、學者と言はず、政治家と言はず、官吏と言はず、實業家と言はず、盡く花柳の街に出入し狹斜の巷に翺翔するの時に當り、足下獨り卓然として此間に處し、曾て聲色の慾を貪らず、淫卑の遊興を事とせず、閑あれば則ち汲々として東西の書籍を涉獵し、廣く知識を萬邦に求む。是れ豈

に凡人の企て及ぶ所ならんや、是れ豈に一個毅然たる信念なき者の能くする所ならんや。嗚呼、世人、足下に對する批評は、夫れ終に誤れるか。僕甚だ惑はざる能はず。

星君足下、世人が足下を悪魔視するは、一は足下の罪なりと雖も、抑亦足下の股肱とする所咸な權策詐謀を悦んで正義人道を固持する者なきの致す所ならずんばあらず。彼の權策を弄し詐謀を悦ぶの徒、素より今日の政界に必要ならざるに非ずと雖も、足下が獨り此の輩を手足として、正義高潔の士を容れざるは抑も謬らずや。看よ、島田三郎の如きも曩きに足下に書を寄せて「足下の配下頗る無賴漢に富む」と公言せるに非ずや。然り、彼等無賴漢は足下の徳を傷くると極めて大なり。足下何ぞ少しく省みて交を正義高潔の士に求めざるか。昔者英の偉傑コロムウエル詩聖ミルトンを尚書として、其正義に感化せられたると尠なからざりき。僕未だコロムウエルの信念と膽略とを以て足下に許す能はずと雖も、而かも足下が潔白なる素行と非凡なる才氣とを以てして、徒らに鷄鳴狗盜の徒を親愛し、以て空しく世人の誤解を招くを惜まずんばあらず。足下の言に曰く、「大丈夫の事棺を蓋ふて後知るべし、予の自ら處するや屑々己を飾りて時俗に迎合せんとせず」と。然り僕亦敢へて足下をして時俗に迎合せしむるを好まず。但、足下今に於て大に悟る所なくんば、縱令棺を蓋ふも一人の足下の心事を知る者無きを憂ふ、足下の爲めに謀るに、上は高徳卓識の先進に交り、下は正義剛直の後進を誘掖して、清高潔白の圜中に己を處くに若かず。是れ世人の疑惑を解き、兼ねて足下の品性を高むるの良策なり。

星君足下、豪傑(ヒーロー)たるは易く、大人(グレートマン)たるは難し。足下は稍々豪傑たるの資質を具ふる者の如し、努めて而して怠らずんば、大人の域に進むこと必しも期し難きに非ざらん。足下何ぞ自ら省みて大に奮勵せざるか。敢へて一書を呈して足下の參考に供す。(一月十三日)

教育時評

未成年者飲酒禁止法案

竹友生

昨年の議會に、未成年者喫烟禁止法案を提出したる根本正氏は、今期の議會へ、未成年者飲酒禁止法案を提出し、今や委員の手に於て、調査中なりと聞く。吾人

は、彼の喫烟禁止法案の如く其速に可決せられ、施行せられむことを冀ふものなり。

飲酒喫烟の人を害することの多大なるは、敢て吾人の喋々を要せざるところ、未成年者に於て、特にその然るを見る。しかも、吾人は、今これを未成年者に對して禁止せむとするに當り、その何れを先にし何れを後にすべきかを問ふものあらば、禁酒須らく禁烟の前ならざるべからざるを言はむと欲するなり。否、吾人は、既に昨年喫烟禁止法案施行の當時、本誌上に於て、その事の極めて適切なるを賛し、且つ、何故に飲酒禁止法をも同時に施行せられざりしかを怪しみ、建議者が物の本末を顚倒せしを遺憾とし、當局者が事の緩急を誤りしを悲しみき。然るに、爾來一ヶ年の後、今や此の重くして急ならざるべからざりし禁酒法案が、後れ馳せながら、禁烟法案と同一の建議者によりて、議會に提出せられたるを見て、頗る愉快に堪へざるなり。」されど吾人は、禁烟といひ禁酒といふ、總べて這底の事は、是れ法律の力を以て、殆ど强迫的にその實行を促すべき性質のものにあらずして、各人をしてその害の恐るべき所以を自覺せしめ、他の言に待たずして、自らその非を悔いその愚を慚ぢ、斷然これを禁止するに至らしむべきものなりと信ずるなり。しかも、今此の法案の提出を見て、これを歡迎する所以のものは、少しく理由の存するあるなり。

凡そ未成年者を敎導し訓誡して、その眞善美の點を助長發揚せしめ、以てその僞惡醜の點を去らしめむと、是れ豈謂はゆる敎育なるものゝ任務にあらずや。謂はゆる敎育は、獨り學校に於てのみその効果を收め得べきものにあらずして、家庭及び社會は、また此の點に於て偉大の力量を有するものなり。若し家庭の主長たるもの、能く敎育の眞精神を理會し、學校の敎師、能く德化の材能を備へ、社會また多少の光明の存するあらば、未成年者は、最初よりかゝる害毒を近づくるをなさゞりしならむ。然るに、家庭無力、敎師不能、社會闇黑、而して遂に今日あるを致せるなり、法を以てこれに涖む、蓋しまた眞に止むを得ざるところ、吾人が、此の法案の速に可決せられ施行せられむことを冀ふ所以のもの、實にこゝにあるなり。

施行と勵行

未成年者喫烟禁止法案施行せられてより僅に一歲、その間、果して若干かの効果を收め得たりしか。否、現

に街上烟を吹かしつゝある未成年者の多き、一年以前と何の相異るところぞ。此くの如くむば、縱令千百の法令雨下するも、遂に無用の空文たるに了らむのみ。家庭無力、教師不能、社會闇黑の時、たゞ纔に法律によりてだに、一縷の光明を長へに傳へむと冀へるに、その法律また空文たらむとするに至りては、嗚呼、また止みぬるかな。

冀くは當局の士、少しく反省するところありて、禁烟法を勵行せよ。若しまた、禁酒法案が議會に於て可決せらるゝあらば、直にこれを施行し勵行せよ。

市中音樂隊を利用せよ

吾人は、ストライキ節の跋扈を慨き、鐵道唱歌の滅亡を悲しむものなり。蓋し、俗謠と風教とは、その相關するところ、決して尠少にして止まざればなり。

頃者、市中音樂隊なるものを見て、鐵道唱歌の彼の如く速に流行し、ストライキ節の彼の如く速に跋扈するに至りし所以を解し得たり。彼等曩には實に鐵道唱歌の鼓吹者にして、今は實にストライキ節の奬勵者なり。彼等の奏樂(?)するところ、兒童こゝに集まりてこれに唱和し、彼等の通行するところ、兒童その後を追うてこれを學ばむと欲するあるに似たり。若し、此の市中音樂隊をして、卑猥なる俗謠の樂を奏せしめず、代ふるに教育的道德的なる歌のみを以てせしむるに至らば、世の風教、或は意外の好果を結ぶなきを保すべからざるなり。

寄席の取締を勵行せむとせる賢明なる當局者(その實些の取締をもなさゞれども)は、此の市中音樂隊の取締りをも、忽諸に付せむとはなさゞるべし。

大町桂月君を戒しむ

(中等教育の漢文科存廢について)

筆が達者で、そして中等教育に經驗のある大町桂月君は、二月發行の『太陽』の時評欄で、「文部省を戒む」といふ題を揭げて、文部省が、中等教育の漢文科を廢にしてしまはうとしたのを攻められた。大町君が、文部省を攻擊したからッて、なにも我々が飛び出すにはあたらない譯だが、中等教育のことについては、聊か話せるだらうと思ッて居たところの大町君が、かうまで我々と考が違はうとは、眞以て意外である。餘り意外だッたものだから、ッイ一言失敬して見たくなッたのである。

冒頭に「敎育とはたゞ簡易速成をのみ望み實業に差支へざるまでにして間に合はせの人物を作るの謂にあらざる也」と喝破して、そして、中等敎育から漢文を除かうとした文部省を攻められた。さやう。敎育とは、間に合せの人物を作るといふことでない位は、敢て大町君のお講釋を待たないでもわかッて居る。しかし、中等敎育から漢文科を除いたからッて、それですぐ、文部省では、敎育を間に合せの人物を作るといふことだと、思ッて居るのだとは言はれまい。それがそうだと言はれなければ、大町君の議論の根柢とも言ふべき、冒頭の此の喝破は、お氣の毒だが鐚三文の値打もない。イヤ却ッて目觸りになるから、さッさと取片づけて貰ひましやう。もし又、中等敎育から漢文科を除いたのを以て、間に合せの人物を作るのだと言へるなら、大町君のやうに、中等敎育に漢文科を存じて置かうといふのは、即ち、漢學者を作るのが敎育の目的である、といふのと同じだとも言へるだらう。

そンなつまらないいさかひは、マアおやめにして、さて大町君は「文學に於て學術に於て道德に於て事業の智識に於て品性の修養に於て漢學から我國民の得るところは少くない」と言はれたが、成る程御もッとも、とりやア全く漢學の賜である、しかし、漢文の功ではない。漢學の内容は漢文でなければ傳へることが出來ぬといふならしかたはないが、實際は、何國の語にでも文にでも言ひ表すことが出來るのであッて、日本人のためには、日本の語や文は、殊に都合が善いやうである。して見れば、漢學が、どれ程「我國民の性格に適合し易」からうが、「我國道德の大半の基礎」となッて居やうが、中等敎育から漢文科を除かうといふ理窟は、それを是認した上に成立つのである。又大町君は「漢學輸入せられて玆に殆んど二千年（中略）漢學より來れる國民が精神上の産物の多きこと殆んど本國の支那に譲らず」と言はれたが、これも全く御無理のないところである。しかしこれだからッて、漢字も漢學も漢文も、一ッからげにして、日本以外に放逐でもしやうといふなら格別、たゞ中等敎育から、漢文科を除かうといふ理窟を打破す程の、道具とはならない。

次に大町君は「元來人は何事をも知らずんば止まずといふ傾向を有するものなり幾十萬卷の古典を徒に高閣に束ねよと強ふるは人心を束縛するも亦甚からずや」と憤慨せられたが、一體どうすりやアこンな勘違が出來るものだらう。中等敎育から漢文科を除いたから

ッて、なンで漢籍を讀むものがなくならう、なンで漢文を作るものが跡を絶たう、誠に餘計なことまで心配したものではある。漢文は、漢學でもなければ、漢字そのものでもない。中等教育は、中等の教育であッて、高等の教育でもなければ、専門の教育でもない。此の中等教育から此の漢文を除くのが、マアなンで不都合だらう。イヤサ、教育者の手數と勞力とを省く點に於て、被教育者の時間と腦味噌とを節する點に於て、誠に當然の處置といふべきではあるまいか。

大町君が、「文學上より見て絶對的に漢文排斥に反對す」と叫ばれたのも、漢文排斥の範圍を推し擴めて「日本教育の全體から」としてなら我々も異存はないが、今はたゞ「中等教育から」といふ極狹い範圍でのことをであるのだから、大町君の折角の咆哮も、惜しむべし無用の贅言となり了ッたのである。

國定教科書論について

（大町君に一本參る）

ついでに一本參るのは、大町君の「國定教科書を非とす」といふ論についてゞある。第一、國定教科書である以上は、政府自身これを賣下げて何が不都合だらう。又教科書專賣所を設けるのも、極めて妙である、これによりて得る利益は、編纂員の手當となり、專賣所の經費となるから政府はそのために懷を痛める患はない。否、民間書肆のやるやうにやれば、政府の懷はこれがために幾分か肥える譯でもある。若し、これに附する一切の費用の出る道があるなら、教科書を出來るだけ安く賣下げるのも、教育普及の一方法である。又、政府自身が賣下げることを嫌ふなら、一書肆に販賣を託するに、手間も暇もいッた話でない。販賣請負を競爭入札に付して、より多く教育の普及といふ本領に適ッた條件を提出した書肆に託しても善いし、又豫め數戸の書肆を選ンで置いて、一年交替位に一手販賣をさせるのに、何の難いことがあらう。

國定教科書が、縱令、最良最好でないとしても、各科教科書の間に、統一を缺くといふやうな弊害が少くなるといふ一事だけでも、その値打は十分である。文部省必ず勝れた教科書を編み出すとは限らないが、從來のやうに、修身は甲書肆のを採り、讀本は乙會社のを用ゐるといふやうにして、間々その教材に撞着矛盾したのがあッて、教師を苦しめたり、生徒を迷はせたりするといふやうな、そンな失態はなくなる。勿論今ま

でも、文部省で撿定をするのだから、そンな擁著や矛盾はあるべき筈はないのだが、人の作ッたものを撿定させるより、直に自分で作る方が、どの位近道だか知れやしない。

全國全一の教科書を用ゐさせることの出來ない事情もあるが、北海道とか、臺灣とか、琉球とかは、勿論特別に編纂しなければならぬ。必ずしも日本全國、どこやかしこも同一の教科書でなければならぬとは言はない。その土地の事情に適合するやうな教科書を作ることに便なのも、矢張り文部省である。民間の書肆がさう幾種も教科書を編纂する丈の、力はよしあらうとも、謂はゆる運動費がさうはなか〳〵續かない。特に運動の結果として、北海道に適切の教科書が、却ッて九州邊で採用されたり、關西向きのものが、關東で用ゐられることゝなッたりして、恐にもつかない結果を生ずることもあらう。

審査採定の弊を剿絶しやうため、教授の統一を計らうため、教育の普及を計らうため、比較的良好の教科書を得やうため、我々は飽くまで教科書國定の論を唱へるのである。そして大町君のこれに對する反對論は、何の力もないものであることを明にしたのである。これとても、決して澤柳氏の提灯を持つ譯でもなンでもない。國定教科書論は我々の宿論で、既に昨年二月の本誌の上にもこれを論じてある。

●ちりづか（一月二十日より二月十九日まで）

◉漢學者の盲動　漢學者のやうに、事理がわからなくッても困つたものだ。いや、甚だ怨然の至りである。縱令、中等教育から、全く漢文科を除き去つてしまつたとしたところで何とある。況や、まだ全くこれを除き去つたさいふ譯でも何でもないに於てをや。それよりは、謂はゆる周道の衰へたるこさ久しいもので、ごこからも、こゝからも、社會陵落の叫び聲が聞えて居るではないか、かやうな根本の大問題をよそにし、末の末のずつさ末の小問題に、余力を傾注して騷ぎ廻るなごは、マア何たる狼狽てかたどらう。迂さか腐さかいはれても、一言の申譯が立たなからうではあるまいか。寧ろ、迂腐々と吹きだしたい位のものである。

◉言文一致會の活動　一時內輪もめがあつて、一頓挫を來しかゝつた同會も、年と共に新元氣を振り興し、總會を開いて基礎を固め、公開演說を催したり、作文の稽古をしたり、議會へ建議したり、その働きぶりは、なか〳〵花々しい。

◉矛盾したる二建議　今期の議會へ、矛盾して居る二つの建議が提出せられた。一つは漢學者から、漢文保存を願ひ出たもので、一つは言文一致會から、國語調査會を設置して、言文一致の實行を、國家事業にして呉れいといふ請願である。チョット見ただけでは、矛盾さも思

はれないが、その根本精神は、たしかに反對の基礎の上にたッて居るのである。議會で、兩方とも採用されたといふことになつたら、頗る變なもので、若し、何れか一方だけを取りあげたといへば、其のときは、即ち六百の頭腦の腦味噌の味の知れる時である。マア何にしても、面白い現象である。しかし、言文一致會の請願が、縱合握り潰されても、一向心配するにはあたらない。現今でさへ、新聞でも雜誌でも、言文一致体の文章の、三ッや四ッ出て居ないものはない位だから、何とも言はなくッても、遠からず言文一致の世の中になるであらう。たゞその前に、言葉の一定（標準語）といふことを、研究し盡して置かなければならない。

◉二大學增設と增税案

大學の增設は急務で、東北大學もよからう、九州大學も惡くはない。政府もどうやら、今期の議會へ、右二大學增設の追加豫算を提出するさうだ。これを聞いた時、取り敢へずそれは結構だと贊成の意を表したすぐ後から、「實は九州と東北との人々の地方的利益心に訴へて、大學と增税案とを交換しやうといふ野心である」と聞いて見りやア、根ッから葉ッから有難くも何ともない。學校も、教育のために設立されないで、地方の利害や、政府の御都合で建てられるやうになッては、もう末である。アヽ。

◉學制研究會

では、二月十三日の會議の結果、小學校教科書審査會を全廢し、國費を以てそれを編纂するといふこと、及び貴衆兩院に向ッて、これを建議することを可決したさうだ。是非さうなくてはならないこッた。

◉全國中學校の現況

全國各府縣で、中學校令によッて設備した中學校は、總計百九十一校で、内本校百六十七、分支校二十四、その教員數三千八十三人ださうだ。

◉教育勅語撤回云云

誠に奇怪な風聞である。多分文部省所定の漢字中に、朕といふ字がないところから、漢文科廢止一件で、眞ヤケの氣味になッて居る迂儒輩が、故意に造り出した根なしごとであらう。

◉忠孝と金と女

漢學者なんてものゝ馬鹿さは、まるで小供のやうである。「漢字を廢すなンて以ての外である、忠といふ字を見て居れば、何となく忠義の心が起り、孝といふ字を見て居れば、何となく孝行の考も出るものである、漢字を廢した日には、さういふことがなくなッてしまふ」だッさ。ハ…。そンなら金といふ字を見て居ると、金が欲しくなッて來て、盜賊でもやりかねなくなる、女といふ字を見て居れば、獸欲が熾になッて來て、不倫の所行に及ぶかもしれない。だから漢字は廢さなければならぬと言ッたら何とするつもりだ。勅語撤回云云も、大概こンなところから、割り出した寢ごとだらうよ。

◉伊藤圭介翁逝く

我國で、植物學の開拓者といへば、誰でも理學博士伊藤圭介翁と合點する。實に翁が我國の植物學界に貢獻せられたことゝいッたら、なか／＼並大抵なことではない。その翁が去る一月廿一日を以て、遂に逝去せられた、誠に悲しいことである。翁年九十九才、殆十九世紀と終始せられたと言つてもよろしい。

◉福澤諭吉翁逝く

近世の大教育家、明治の一大平民、三田の聖人、獨立自尊の先生。嗚呼、福澤諭吉先生は、去る二月三日を以て永眠せられた。我一人としては、悲しまずに居られない。國家社會の上からは、惜しまずに居られない。一たび先生の訃を聞くや、全國の新聞雜誌が、筆を揃へて、その德を頌しその死を悼んだのを見ても、先生の、如何に高く如何に大きい人物であつたかといふことが、ほゞ想ひやられるのである。

◉大學第二醫院の慘事

これは一月廿九日の朝のことである。神田和泉町の第二醫院が。たゞ最も小さい傳染病室と土藏と丈を殘して、

その他はすつかり燒き拂はれ、入院患者の內、二十餘名の燒死者と、多數の重輕傷者とを出したのは、實に慘中の慘なるもので、近來の一大珍事である。それについて、菊地大學總長、青山院長、佐藤副院長は、共に進退伺を出したが、院長と副院長とが、譴責せられた丈であつた。

●女子美術學校　といふものが、本郷元町に設立せられ、來る四月から授業を始めるのださうだ。

●書籍と雜誌　『小學校教授の原理』(山口小太郎、佐々木吉三郎兩氏共譯)、『學生俱樂部』(育成會)、『新撰教員文庫』(帝國通信講習會)、『倫理界』(開發社)、『をんな』(大日本女學會)、『婦人と子供』(フレベル會)その外に教育書解說を以て名ある育成會では、『倫理彙編』(井上哲次郎、蟹江義丸兩氏編)といふものゝ出版をするさうである。

雜評

目睹耳聞

齊東野人

●先月十八日都築馨六は朝比奈知泉、淺田德則、室田義文、有賀長文等と相携へて伊勢參宮に往つた△栗野愼一郎も一行の跡を追つて伊勢に行き、島村久も大阪より來りて一行に加はつた△當世の政治家連が揃ひも揃つて伊勢參宮とは、オツなとをする、是には何か曰くがあるだらうと思て、聞いて見たら之は都築が四十一の厄拂ひの爲めの參詣で、他の人達は其の御相伴をしたのだとサ△都築は今歲丁度四十一の厄年に當るので、北堂は非常に心配され、「馨さんや、御前は今歲は年回りが惡ひから、是非大神宮樣に參詣して、厄拂ひをしておいで」と連りに勸めらるゝので、都築も止むを得ず厄拂ひの伊勢參宮といふ古風な後生願をやつたのだとサ

●職服潜用事件で有名となつた平沼專藏の禮服は、彼が曾て五万圓の海防費を献納して從五位に叙せられた時、東京の櫻井洋服店に注文して調製したのだ△平沼も其一家中の者も職服と位階服との區別を知らないから、櫻井洋服店が奏任官の職服を仕立てゝ來たのを怪まずに其まゝ受取り、是迄數度着用し、舊臘二十五日の帝國議會開院式にも平氣で之を着けて參院した△處が金山書記と式部官とが平沼の着服の相違して居るとを認め、彼を別室に招きて、金山より「貴下の着服は奏任官の職服にて位階服に非ず、萬一他より故障でも起りては不都合なれば、陛下の御前に出るとは遠慮あるべし」と注意し、自から着し居たる禮服を示して位階服との區別を說き聽かした△平沼も此の注意を受けて

始めて心付き、別室に控へて式場に出でず、陛下御還御の後、悄々と退院した△其後四五日經て東京の松本尙道といふ者より、職服潜用の廉を以て告發するが示談にしては如何だと、平沼に申込んで來たけれども、平沼は返事もしなかつたので、松本は終に檢事に告發した△聞けば松本といふ男は宮地茂平などの中間なさうだから、平沼を告發した目的などは言はずとも知れて居る△余輩は敢て平沼を辯護する譯では無いが、彼が少しも夫と氣付かずして職服を着けて居たのは、寧ろ憫れむべきとで惡むべきとでは無ひ、余輩が平沼を惡むのはコンナ區々たる所には無いのだ

●星亭が病氣の爲め新年以來引籠つて居たが、珍しくも先月二十一日淺草公園の草津亭で開ひた神谷傳兵衛の當撰祝に出席してコンな演説をやつた「世間では余も收賄事件と關係あるかの如く思ひ居れど決して然らず、豫審既に終結し醜類(とはまさか言はなかつたらふ)も其れ〳〵有罪と決定した上は、余は公私の交を彼等と斷じて余の潔白を明にすべし」醜類と交を斷つたとて星の潔白が明になるかは疑問である△星が病後態々此の會に臨んだのは、豫審終結に依て醜類の罪惡明白と爲つて郡市懇話會派の元氣大に沮喪したから、此際一威勢付けん爲でもあつたらふが、是には別に曰くがある△其れは郡市派の神谷傳兵衞が此の頃淺草から府會議員に撰ばれたのは、全く吉原の百六十票が同派に歸した爲めだから、其の御禮旁々首領の星を吉原の醜業者に紹介する手筈であつた△だから星は當日出席して居た吉原の鉄砲菊や大坂菊など云ふ連中に叩頭して御世辭を振り撒ひた、國務大臣とも爲つた身が女郎屋の亭主と同席して、剩つさへ之に叩頭するとは隨分呆れたものじや△併し星とても醜類の親分と呼ばれてるから、醜業者と列席するのも、矢張同氣相求むるのかナ

●常期の議會で議員の發言先登者は、例の進行掛で有名な恒松隆慶で、而かも例に依て第一議事日程の委員附托を叫んだのであつた、今年は前年にも增して大に進行的手腕を揮ふ積りと見へる、重寶な人物だ

●野口寧齋は正月の始めに「今年は丑の歲だ、丑の字は君の字の不完全なのだから、甚だ面白くない、何でも今年は外國の君主の中に不吉な事が有るに相違無ひ」と言つて妙に氣に懸けて居たが、果して英國の女皇が御崩御遊ばした、是では世の中に御幣かつぎの多ひのも尤もだ

●渡邊洪基が大に今の政客を罵倒したとは、前號の「道聽途說」の中に書ひてあつたが、あれは渡邊が大阪毎日新聞記者に談つたのだ△自由黨の連中は渡邊の罵言を聞きつけて、真赤になつて怒て、一時は除名騒ぎでも引き起しさふな勢であつた△現に去月二十四日の總務委員會で二三人の者は渡邊の言は甚た怪しからんと喰て懸つた、スルと洪基和尚は無邊俠禪のやふに心機一轉とは言はずに「拙者はソンな事を言つた覺へが無い」と辨解した、夫れで自由黨の連中も渙然氷釋したらしい、△洪基といひ國武といひ、共に渡邊で、共に同じやうな原因から自由黨の激昂を買ふとは妙な事もあるものだ

●一月二十日頃であつた、貴族院議員は華族會館に新年宴會を開いた、會する者二百數十名あつた中に平沼專蔵が見へなかつた△アンな押の强ひ男が自ら遠慮して列席しなひ筈が無ひと思ふて聞て見たら、是は貴族院議員が、平沼のやふな破廉恥漢と齒するのを嫌つて故意と案内狀を出さなかつた爲めなさふだ△斯くまで人に輕蔑され嫌はれても猶貴族院議員に爲つて居たひとは、平沼もよく〱諦めの悪ひ男だ

●福澤翁の教育主義は「先つ獸身を成して、而る後に人心を成すべし」といふので、非常に躰育を重じたものだ△夫れだから翁は自分の子供を教育するにも、先つ十分に身躰を發育させて、夫れからソロ〱學問を仕込む、六七歳の小兒にセッセと學問を注ぎ込むなどは翁の禁物とする所であつた△現に其息子なども十歳までは何もさせずに遊ばして置いて、十歳を超へてから始めて就學させたが、果して成績が好かつた△翁の孫などが學校の試驗に成績が好かつたと云つて悦んで來ても、翁は少しも喜ばず、知らん顔で居るけれど、若し遠足やなどに長途歩行ひて歸つたとか、運動會の競走に勝たなどいへば、翁はホク〱喜んで孫共に褒美を遣るといふ風であつた

●井上角五郎は政友會の總務委員になりたがつて密々運動してるが、中國派の面々は井ノ角が政治家やら實業家やら分らぬからと云つて彼を總務委員にするのを喜ばぬ傾がある△スルト井の角は「イヤ僕は政治が本職で實業は只其の土台を作るために遣つて居るに過ぎなひと」言譯してる△けれど實業家連に向へば、我輩は實業家で、政治の事などはホンの内職じや」など丶て實業家の機嫌を取て居る底で井の角の兩天秤といふ評判が生じた

●駐英公使林董がミニスターの地位からアンバッサドルに進めらるゝと云ふ風説が、先頃佛國にあつたので、「倫敦エキスプレス」記者は林を訪ふて其の事實なるや否やを問ふたが、其問答の中に一寸面白ひ節がある△林は、英國にアンバッサドルを送るといふ上に就ては、四五年以來本國の議も有つたが、未た決定した譯では無ひ、とエキルプレス記者の問に答へた後、笑ひながらミニスタアとアンバッサドルとの區別を説て曰く、「アンバッサドル」と爲つたとて、唯身分が違ふ丈けで、實益の上に於ては何もミニスタアと異る所は無ひ、若し强ひて有るとすればマア斯んなものでせふ、例へば拙者は當英國の外務省に往て外務大臣に面會を求むると、先つ四十分間位は當然待たせられる、漸く四十分も經てもう面會が出來るかと思ふ頃何國かのアンバッサドルが遣て來て拙者より前に面會を濟ましてしまふ、扨て其のアンバッサドルも還つたから今度は愈々拙者の番かと思ふ所へ、又他のアンバッサドルが來て、僕の前に面會して行く、夫でも拙者のやふなミニスタアは不平も鳴らされず、我慢して待て居らねばならぬ、マア斯んな所を見ればアンバッサドルと爲るのは頗る德です、拙者も早くアンバッサドルに爲り度いと思て居ますが、本國には未だ中々其様な評議が無ひやふです」

●林はまた一月發行の倫敦「毎月評論」に「日本の進歩」と題する一篇の論文を寄せた、是れは林が英國の雜誌に寄書した始なので、文章にも誤謬が有つたから、該評論記者は餘程筆を加へた△前項のエキスプレス記者が林を訪ねた時、丁度此の論文の載つてる雜誌が机の上に在つたので、林は之をエキスプレスに示して、「原稿で見た時には、モ少し文章も善かつたやふだが、斯う立派に印刷されて見ると、餘計に欠點が見へて、文章が大變拙くなつたやふです」などと言つて笑つて居た

讀者の文壇

赤門天狗一代記

角帆生投

入口の赤きもの、鼻の高きもの、豈獨り岩屋天狗のみならんや、驚く勿れ卒業生既に八千幾百人、悉く天下

の愚物を煙に捲かんとする大先生を出だす、此先生の估券近來果して奈何と仰々敷書き出す程の事も無ひが、一ッ角帽昨今の現況を話して見よ——

明治二十年頃から段々卒業生に變りものが無くなり、多少人材らしきものが減つたと云ふ世評はドーモ辯護が出來ぬ、我ながら、意氣が乏しく希望が平凡であると云ふことは白狀する、萬人一樣丸でステレチ、タイプと押付けて製造した樣、此點から云ふて東京の大學よりも京都の大學の方が創業である丈け今後の望が多ひ樣に思はれるが、先づ東京大學の方から身の上話しを始めん

第一期角帽の嬉き時代　ヤット高等學校の難關を胡魔化しつけ花の都に押し登り、本郷の何々館と云ふに尻落付けて「小生事無事何々科に入學表記のところに下宿仕候」と諸方の友人や親戚にはがきを出した時の嬉しさ、唐人が「金榜掲名時」とて進士及弟の嬉しさを人世四大喜の一に數へたのもかゝる時の事を云ふかと思はれて、寄席に入るにも角帽を被り、汁粉屋にも金ボタンを振り舞はし、尋中や高師や他の私立の學生に對しても何となく幅の利く樣に思はれ、一寸同窓を紹介するにも此君は文科何年級の何々君にて候、此人は二年後の工學士たる某々氏にて候と、何から何まで大學風を吹かせて見たく、ソレハ／＼齒の浮く樣なことを計り、他人から見れば冷汗の出る樣でも本人は中々濟まし切つたものである、併しかやうな無邪氣なベニチーの外何物も無く學科と云ても苦めらるゝ程の事も無ければ天下泰平、後から思へば一生得意の絶頂である、

第二期角帽の古くなりし時代　二年三年夢の間に過ぎて、卒業近くなる、角帽だからとて辻待ちの車夫が値段を安くして呉れるでも無く、書物屋の小僧が餘計に頭を低げるでもなく、自分に思ふ千萬分の一も人は思ふて呉れぬと悟つて見れば、何となう之を被るもうら耻かしき心地して、成るべく之を着けぬ樣になる、併し浮世の事はマダ／＼無我無中のノンベラ坊、角帽の戀しかりし時代が何々學士と云ふ學位でもなんでもなき肩書が戀しくなる時代となりしと云ふまでゝある、大學は登龍の門戸、彼の青雲梯して上るべし、よしや踏みはづしたりとも潰しの利く身躰であると高を括り、堅實なる希望も計畫も抱負もソッチ除けにして雲を攫む樣な幻想に浮かるゝ計りである、一寸此時代

の心事を描き出さふなら

唯何かなしに早く學士の名刺が印刷して見たく、(三年前文科の某君は卒業前二ヶ月文學士何々の名刺を美濃屋に賴んだ)國に歸つてエラクなつたと親戚故舊からホメられて、ナーニコレカラダヨと濟まして見度く、結婚の相談をもちかけられて見度く、妻君を撰擇して見度く、新婚旅行がして見度く、フロックコートが着て見度く、帳場車に乘て見度く、マニラやエンチヤンテレスを吹かして見度く、コスメチックやパスタマックが使つて見度く、

と云ふ樣な工合で一切夢中で此時代を終るのである、

第三期東奔西走時代　已に卒業證書は握つた、いざこれより浮世の戰場と來ては中々學生時代の樣な呑氣なことでは濟まぬ、今の大學は人の獨立心を皷舞せないで、雇人根性を養ふことを力めた結果、一ッ卒業後は獨立の事業を初め理想を實行しよーと云ふものは一人も出來ぬ、大學者も大野心家も大實業家も大敎育家も大宗敎家も到底今の大學では望まれない、ダカラ出るものも出るものも揃ふて政府に雇れたい、學校に雇れたい、會社に雇れたい、雇れて獨立の階梯となし下地となすではない、終身雇れずめに雇れたい、そして雇れながら位記も得たい金も貯へたい、恰も獨逸などにある僕婢學校のヤ、毛色の變つたと云ふまでゝある、かゝる雇人根性で滿ち充ちた卒業生であるから、電線に絕り蔓を攀ぢ、口入屋に頭を低げ、桂庵に額をすりつけ、東奔西走の有樣中々見苦しくも又、奇觀である、

卒業してすぐ東京にてパンに有付くは上の部にて、誰れも彼も田舍に引込むを喜ばずして東京に殘りたがる一時間三十錢の切賣授業でもよし、辯護士の下働きにてもよし、書物屋の編輯人にてもよし、政府や會社に口を探り當れば猶更よしと云ふ有樣にて、四十圓五十圓の口に有りつけば幸運兒の一人である、僕が桂庵とか口入屋と云たが腹を立つかも知らぬが、實際田舍廻はりの酌婦でも一ヶ月四五十の收入があるではないか、正に諸君は松源の女中よりも落語家の前座よりも女義太夫の切前よりもより少き收入に甘んぜねばならぬ、而も彼等は自家の腕前で獨立して行く、諸君は諸君より若し何々學士と云ふ呆者嚇しの肩書を取り去りその腕一本に依賴するとせば四十五十の價は素より差引借金となるてはないか、論より證據 賣口の惡き藝者が田舍に流れ行くと同じく、諸君が東京には踏止まる

こと出來ずして地方への身賣相談は毎日耳にするところにあらずや

第四期田舍埋沒時代　宿昔學窓に於ける靑雲の志は白髮を持たずして蹉跎し、短きは卒業二三ヶ月、長きは二三年地方身賣の一條となる、一時賣口の善かつた工科も近來下火となり、法科は滔々として裁判官となり、文科や理科は地方中學の校長や教師となる、最も廉きは三十圓、最も高きは一百圓、近來地方中學増設の爲め教師の需用は先づ景氣の好き方である、中には田舍に引込むは本意ならず、一時糊口の爲めとのつもりなりしものも、一年二年は夢の間に過ぎ適には當初自家の專門に忠なる志を有せし人も、三年も田舍に機械的の勞力をなしたる揚句は、世間からは忘却され、自らも中央文化の潮流には遲れたるが如き心地して、知人仲間にも學士會の名簿を擴げし時偶然に思ひ出され、年に一回の年頭端書を取りやりするが關の山、人も推さず自らも出ず、古色蒼然の村夫子　無名の花はやッぱり無名の人を葬り了はるのである

あゝこれ赤門天狗大多數の一代記如何に大天狗金天狗の少くして小天狗木葉天狗の多きことよ

●當世名士雅號新考

比巴爵者

○含雪　山縣大將の雅號なり、嚮きに板隈聯合の憲政黨内閣に代り、例の頑夢連を率ゐて内閣を組織するや、人或は憲法中止の説を傳ふ、頑を以て名を得る推して知るべし、されども其實中々如才無き人にして、今日の世に憲法中止などいふ途徹も無き事をやッてのけるほどの頑固にあらず、持て餘した内閣を、どうやらかうやら伊藤侯に引渡して急流勇退（チト褒め過ぎる）と出掛けた處は左程拙とは思はれず、併し世間から頑拙と見られるのが此大將の老猾なる所、含雪、頑拙、音相通ずる之がためなり、杜詩の窓含西嶺千秋雪を取りなどは、ほんの表向き、其實は矢張頑拙と見て差支なかるべし、

○春畝　は俊輔の音より考へ付きしものならん、併春情春畫など、春の字の付いた熟語を並べて見ると、名詮自稱といふ事が知れるヨ、

○牡丹侯　侯が小田原で牡丹を栽培してより此綽號を得たれど、それは最早十餘年の昔となれり、併し牡丹侯の綽號は今尚依然たり、侯の富貴と花の富貴と偶然

適合せしもの其の原由ならんが、更に牡丹の字を調べて見ると、更に其適切なることが分る、即ち牝牡の牡、丹心の丹、台鼎の鼎、侯が丹心を以て台鼎の重任を荷ひ、拮据經營、老て益々壯なる事を證すべし、又其の姓伊藤は支那の伊尹、我朝の藤原鎌足、二人を合併したるものなりと、侯の盛德大業恐るべし〳〵、

○青萍　は古劍の名なり、古劍龍に化すとは支那の故事、貴人の婿になるを乘龍と云ひ、卑賤より出でゝ顯貴に至るを登龍と云ふ、一介の青書生より藤侯の女婿となり、終に身を青雲の上に致せしを以て此號を擇びしならん、

○越山　阿波の出身、義太夫の本場なれば、中々呻れる喉を持ち居る由、そこで越路太夫の向ふを張るつもりにて、越山と號せしといふ、チト牽强附會のやうなり、或ひは山縣侯の上を越す大政治家になるといふ大抱負を以て名けたりといふ、これもあてにならず、

○海東　松方伯の雅號、東海を倒にするの大手腕を有するとの御自慢より名けたる由、されども今は生きて居るか死んでしまッたか更に分らず、

○日生　誰の號かと思へば星亨氏なりと、即ち其性を拆用せるならん、日入群動息、日生雖亦滋とか云ふ事がある、氏一たび手を出せば白晝忽ち百鬼夜行の光景を呈す、此兩句を讀めば其所以を知るべし、又亨と云へる名は腹膨脝の脝と見れば差支無し、

○鳥山　島田三郞の號にして即ち島の字を分ちしなり、其饒舌喋々、群鳥の山林に囀づるが如し、

○枕流　は大東義徹の號なり枕字或は沈字の誤りならん、何となれば此人一時近江西鄕の稱ありしに似ず、今は鐵槌の川流れ、頭の揚る事無し、寧ろ大頭沈流とせば妙ならん、大東――は元來小西氏なりしに、何でも大きい方がよいといふので、小西を正反對に改めて大東とせしものなりと、併し義徹、蟻垤と音相通ずるを見れば矢張り小さなものなり、

○陶庵　は西園寺公望の號、皋陶は古の刑律を司りし大臣、カツヨウと讀む、侯は明治法律學校の創設者、皋陶の陶を取りて號せしといふ、さればヨウ庵と呼ぶこそよけれ、それで名が太公望に因みありとすれば、伊藤侯と併せて、古大臣四人に當る、恐れ入ッたものならずや、

○青淵　は澁澤榮一の號、氏の出身地は武州の血洗島とて何となくイヤらしき村名なり、因て其反對と思つて青い淵と名けたりと、

○一六　は巖谷修の號、明治の初年諸官省の休暇は一六の日にて、其日に當れば居士即ち處士の身と同樣、俸祿に束縛せられずとて、一六居士と號せしと云ふ、今は此語七の意に用ゐ、書生社會にては典舗を稱して巖谷銀行といふ、又數年前東京府の書記官を勤めた、渡邊孝と云ふ男は其眞似をして、日曜だけ居士なりとて、月前(月曜の前)居士と名けたことがある、

○三橋　東京府書記官坂本釤之助氏の事、新橋、柳橋、及び赤坂の溜池橋に至るまでお馴染があるといふ意味なる由、教科書審査にはしッかりし玉へ、

○巽軒　井上哲次郎の號、定めて易からでも引張り出せしものならん、チヨッとした事でたつみあがりになつて騒ぐ處名詮自稱、昔は艮齋と云ふ學者があッたが、艮は丑寅鬼門に當る、井上圓了に遇へば滅茶〳〵だが、辰巳方はどんなものだか、

●俗謠と文學者

四谷　愛住生

滊笛一聲新橋をと謠ひ出でし鐵道唱歌は、其名詮自稱の速力を以て、日本內地の殆んど津々浦々に至るまで、小供の口頭に上りしにもかゝはらず、時日に於て僅かに二三ヶ月を出でざるに、「直ちに此流行見を一蹴し去て已れ忽ち其寵壇を擅にし、剩へ先きには單に學童及び同年輩の小供に限りしもの、更に大に其流行區域を弘めて出で來りし、奇怪なる俗謠東明ぶしは抑も何か故にかくの如く全盛を極むるに至りしか、有体に云へば、吾人も其初めは口にするだも好まざりしが、あまりに耳嚚がしきに化せられて、一唱二唱人の口眞似するの間、忽然として其かくも流行を來たすに至りしことの偶然にあらざるを發見せり、試みに錄せんか、

一、流轉滑脫、謠ひ來て縱橫自在、鐵道唱歌等の如き究屈なる形式の比にあらざること

二、詩形の短小にして誰れにも覺え易きこと

三、單に新たらしき歌謠のみにあらずして、何人の頭にも已に知れる從來の歌謠をも、よく調和融合して、人に眞似するの動機を與ふるチヤームの多きこと、

四、人の常に用ふる言語を化成して、更らに人の尤も喜び易き嘲罵句調、即ち人々が他の歌謠を口眞似して、常に語尾に附する間投詞樣の口調の歌謠中に存すること、

吾人の淺見なる此他にも更に多くの動機を存するなる

べしと雖ども、此四つのものは遙かに所謂文學者の作なる他の高尙なる唱歌、及び大に流行見たりし鐵道唱歌をも、蹴飛ばして吾がもの顏に全盛を極むるに至りし所以なりとすれば、敎育者は勿論、文學者と云はれて、事に作歌に從ふの諸賢も、確かに一考を要すべきものにあらざるなきか、たとひ巧みに西歌の妙詩を譯出し得たりとするも、そはあまりに聞慣れざるを如何にせんたとひ巧みに擬古體の七五調を綴りえたりとするも、そはあまりに高尙に失するを如何にせん、一人唱ひ出せば何人も直ちに愉快に活潑に唱和して、國民の勇氣と快樂とを振ひ起し得べき、一の國歌を有せざる國民は如何に淋しきかを思へ、文學者とは唯文學の爲めとか云ふなる冑着て、卑猥なる小說を綴るのみに日を暮す者なるか、他人の惡口仲間の樂屋落ちに、すッたもんだの喧嘩のみに騷いで、原稿料を高くさへ賣れば能事終れるものなるか、堂々たる文學家諸賢の作歌が、東明節如き奇怪なるものに見代へられ、これ果して諸賢の面目なりと云ふをうべきか、

短文

（課題　憐れなる出來事）

▲余の長子客秋十一歳を一期として逝矣、兒性溫和にして言寡默容顏常に微笑を含む曾て朋友と相怒らず師を守り親に狃れず愛を婢僕に受けまた近隣に好せられしが不幸二豎の侵すところとなり而も假初と思ひの外、病むこと三日助膜肺炎と腦膜炎を併發して終に起たず、嗚呼悲慘乎生彼れが戲むれにまて君が代は千代に八千代にこけむすいはをと謡ひしものを、彼れさゝれ石の自身と伴なはでありしが、病中氷を求めて叫びし聲も今は夜々の思ひ出にさて余の耳底に印せられしのみ、噫人生の慘事兒を失ふより勝れるはなからむ、筆を採るも涙自ら書きて讀むも涙長く謂ふは多感の余には堪ふるところにあらず、たゞ之を示すは余の涙をして同情の人に分たんと欲へばなり、然れとも彼月島丸、今は之を想ひて聊か余自身を慰撫しつゝ過しぬ然れともなほ……（掬月柳窓）

▲予がまだ小供の時、ある雪の日さる家の軒下で、腕白童子が二人りの巡禮に、雪丸を投げていぢめてゐるのを見た、姉らしきは年の頃十三四で妹は四つと七つ計りだ、背の負笈には西國云々の下に同行三人と書いてあつた、妹は怖ろしさに姉に縋りついて泣き出したので、姉は顏を掩ふて世にも悲しげに慟哭した、予は覺えず宥めようとしたが、惡童子の返報が嫌なので意氣地なく過ぎ去ツた、あとで予は思つたのだ、同行三人と書いてあるのを見ると、父でも死んだので母子三人西國するのだろう、その母親も亦どこかで亡くなつたに違ひない、負笈の着樣も脚絆の着け樣も皆あの姉が世話するのだろう、それにしても二人りの小さき草鞋は誰れが作るのかしらと、夫から夫へ思ひ辿りて眞に可愛想と思つた事があつた、何れあのような孤兒の行末は離れ離れで、今頃は音信不通で暮してゐるだろう、（木村生）

▲月島丸の沈沒は日本に於ける拾九世紀掉尾の大慘事で、第二醫院の燒失は廿世紀劈頭の大悲劇だ、さて此れから　憐むべき出來事は果して何

たろう、(清華)

▲僕の町内に十日前妻を亡くした一人の大工がある、三才の男兒乳を求め母を慕ふてむづがるのを一人してなだめすかし居る樣憐れなる事の限りである、昨日夕方カーチャントコへ行きたいと泣く吾兒を抱きながら、夕日まばゆき西の空を指し、カーチャンは彼方だよと吾兒に指し示せるを見て僕は思はず貰ひ泣をした。(赤坂　藤本)

▲予が逢ひし憐れの出來事は八年前初めて業者に出でし時、月收僅に三十負債二千圓、恰も父は中氣にて病に臥し母は其以前に沒し、女手無き家に一人の下女を相手に家計の困難を凌ひたる時なり(ち、か、)

▲書物にて讀みたるは宋末の歷史、耳に聞きたるは金玉均の一代、目に視たるは小石川養育院の兒童　(芝　白金生)

▲日清戰爭の終りであつた、遼東に轉戰して芽出度凱旋した第五師團の一將校の軍馬が宇島の埠頭で陸に上げる時、人夫の誤ちで海に落ち大負傷をした、半死半傷の馬が其將校の勞はりつゝ立てる側で、悲しげに主人を見つゝ倒れて苦し相にもがき、將校も目に一ぱいの涙であつた、嗚呼牙山に平壤に朝鮮より滿州と主人と砲火の間に辛苦を共にし故郷に無事歸着、今や上陸の一刹那、此不幸に逢ふたのである、馬にして人間の樣な心あらば其殘念さ果していかゞであらう、又その將校の心事も推し量られ、予はその時程、悲しく憐れに感ぜられたことはなかつた(廣島　高田生)

▲一昨年の夏眞日中の炎天、余の乘れる鐵道馬車の馬が淺草の廣小路にて苦痛に堪へずして倒れたる、去年の春余が家に飼へる小鳥を其籠と共に庭前に出し、或る出來事の爲に取入るゝことを忘れ、夜中雪降りし爲に凍死せしめたる(K G)

▲憐れなる出來事は埃及、亞細亞土耳古、波斯、印度、暹羅、安南と東漸し來りて隣國の支那朝鮮に及べり、此の國家的憐れなる出來事はこれより東方は決して傳染せしむべからず、注意せよ我朝野の政治家、(興國生)

▲僕の弟に家計上余儀なくも學問を中途にして止め、商業もて身を立てんと斷然意を決して或商家に前垂に筒袖の番頭奉公をしたのがあつたが、同家の非常なる氣入ものとなり今一二年もせば故郷に歸り、業を開かんものと喜び居りし內、不圖肋膜炎てふ病氣に罹り連れ歸られ、自宅にて療養中病勢愈つのり、果は心臟の病まで加り大小便も寢床にて便せざるを得ないことゝなり、吾は母と共に晝夜看護に怠らざりしが、或日の朝の事なりし母は汚れしものを洗はん爲にとて河へ行き、吾獨り彼れの枕邊を守り居りしに呼吸も愈迫まりしなかに。力なき而も苦しき聲もて「兄さん藥飲む」と云ひ！時の憐れさ、其時の少し前已に藥は飲ましてあつたから葡萄酒にてもと思ひ、ハイ今飲ませるぞと鳥渡立て持來りし時、彼は早や彼の世の人となつて居た、吾の今日迄目擊せし憐の出來事一にして足らされども、此時ほど憐なる事はなかつた、彼が春秋は二十歲であつた、今年は丁度其七年忌である、彼が臨終の一語「兄さん藥飲む」之を思ひ出れば今も尙憐れの感に打たるゝのである　(一得生)

▲余が郷の東なる山脈を踰ゆれば加州なり、昨秋旅行して山中溫泉場に至り一泊せんとせしに、貧書生の單身を見て戶每に謝絕され、中夜止むなく露宿に決したり、晩秋の寒氣骨に徹し只雲間の明月を友とす、風流にも又憐れなりき、未だ世の憂き節を知らぬ一書生の我には憐れなることゝてはかゝる事の外になし　(花界)

▲平素はコンモンセンスをも有しシンパシーにも富めるものが、卒然殺人罪を犯すものあり、自己の身命をも顧みるに遑なく、人を殺す程の大罪を企つる、其の動機に至りては、隨分同情を表すべきものゝ存するな

らむ、既に這般の大罪を起す、悲痛怨嗟の極、一時狂して而して亂せしものなり、恐ろしき刑名の下空しくギロッチンの露と消ゆるとき、彼等が一刹那の心情ば、眞に憐むべきものならん、(愚哉)

▲濃美震災の時余は東京に在學し、悲慘の報知にやうやく國に着いたのは震災當日より五日目である、今も思へばその時の心は悲しみは嘆きは憐れさはとても口や筆に盡せぬ、余の母は七才の弟と三才と當才の妹を抱ひて臥したる儘四人とも非業の最後を遂げたのである、(登山)

▲憐れなる出來事は人生到處にあり、特に貧民窟よりも社會の上流に多し、語を寄す天下妙齡の婦女子諸君、決して當世の所謂紳士なるものに嫁する勿れ、紳士の家庭に和樂無くして其妻となれるものに苦痛多く、憐れなる出來事に逢ふの頻繁なるは、意想の外にあり (一食客)

▲一昨年の夏僕が或る家に寄寓した、その主人は公務の爲め臺灣へ出張して留守であつたけれども、何分最初は細君と十二才を頭に三人の兒女と僕と書生との六人暮したから頗る賑かで、如何なる惡魔と厄病神も此家を見舞ふの機會は無からうと思つたが一ヶ月經たぬ中に非常な不幸が此家内に起つた、夫は何時も健康と大食自慢な書生が脚氣病で醫師より轉地療養の勸告を受け、郷里へ歸つたので少し淋しくなつた處へ、細君は夏向最も治療の困難なる心臟、脚氣、腦充血の數病併發て、不意に全身不隨となつた、其處で世事には頗る疎い方なれども兎角物心のあるのは僕一人で、親戚は皆な遠く近所には更に知己がないから僕は自然に主人、下婢、書生、兼看病人といふ大役を拜命して、一周間程辛棒したが中々遣り切れない、夫計りでなく容體は日増に惡くなり全く人事不省に陷たので、余程心細くなつた、又醫師も度々危篤の旨を告げたから病人の本意に背て主人や親戚の方へ打電したが、臺灣よりは何の音沙汰もないので三回まで全一文句を繰回した、又三年計り前に主人の緣家へ遣した、長女も來ぬので實に業が沸えて頗る激烈なる書面を送つた、此始末だから集つたのは僅かに緣の遠ひ一二の親戚計りて、夫も長逗留の積りては無つたが、其容體の激いのに驚き、又僕の看護を氣の毒に思つて、一先商用を取片付けがた〳〵餘り騷々しいから兒女を連れ行き、更に來る答て新橋停車場に向つた數時間の後……枕頭には僕と看護婦二名のみ附添居る時……九月二日午前十時三十二歳を一期として永き眠りに就いた……嗚呼就床日數僅に十有五日、飲食を絶つ事旬日、余一語を發する能はざる事五日、然かも死の前日午前突然大聲に思ひ立つてから三年目だの一語を遺して……此語に就ては死後親戚故舊相會して小田原評議を凝したが更に要領を得なかつた

九月二日。午前十一時訃音十數通を電報す、午後兒女は親戚者と共に皈宅したが一向悲哀の模樣も見へず、却て平常よりも愉快らしく見え近所の小供に母さんが死んだのよと勇ましく吹聽するのを見ては思はず落涙した、又激烈なる病症を冐して出京した書生は數時間死者の枕頭に痛哭した後て僕が早く病狀を報告しなかつたのを恨んだ、併し之は細君が强て止めたので仕方がなかつたのだ、長女の養家より今立つたとの電報が來た

九月三日。午前長女が遣つて來た但し未た訃報の屆かぬ前に出發したので不意に目前病死せる母を見て殆んと前後を忘れて慟哭した僕等が交る〳〵慰諭して幾分落付たが、一時は實に困つた、何故此んなに遲くなつたと聞たら細君即ち母は養家を嫌ふて養女に遣はす事を拒み、數年を經過しても送籍の手續さへ濟まさぬ有樣だから先方では取戻しの策略と誤認したそうである

九月五日。午後五時子女四人、親戚五人僕及書生と都合十一人棺の前後に隨伴し日暮里火葬場へ送つて、或眞宗の僧侶を招して簡略なる假葬

式を執行した
九月十四日。主人漸く歸宅した、僕は直に數回の電報に返信の無かつたのを詰責すると、丁度其頃九州沿岸は暴雨で電線に故障を生じた爲め六日頃病報と訃報と同時に届いたので驚て出發したそうである(從空)

新刊紹介

◉哲學叢書　井上哲二郎編　第一卷第一集
小石川區小日向水道町集文閣發兌

純正哲學、倫理、宗教、教育に關する論文を集め、道德宗教の根底を解し、人間行爲の基礎を定むるを以て目的とせんと云ふ、其發行の抱負や大なりと云ふべし、多くは文科大學生の卒業論文を蒐輯す、悉く一夜作りの駄論文にあらずして多少心血を濺ぎたるものなるを以て、學者の參考とし最も必要なり、本集井上氏の認識と實在の關係西晋一郎氏の「ニッチエの哲學」野田義夫氏の「哲學評論」等を收む、一冊三百七十八頁(定價七十五錢)

◉仝書　仝氏編　仝第三集　仝所發兌

哲學の科學及び宗教との關係(虎石惠實)認識と實踐實在觀念　理想觀念(森内政昌)二程子の哲學(宇野哲人)哲學評論(井上哲次郎)等を收む四百三十頁(定價八十五錢)

◉社會學　岩本能武太氏著
京橋　大日本圖書株式會社

本書は著者が明治二十九年專門學校になしたる社會學の講義を基礎とし、社會學を萬人に解し易からしむる樣説明したるものなり、社會問題に關する新書は我國今日の最も必要なりとするところ、然も是に關する著書は、從來雜駁のものに非れば贋造のもの、未だ本書の如く明快に平易に且つ周到に社會學を説きたるものあらず、發兌早々賣行の多きは怪むに足らず、意を社會問題の解釋に注ぐものは必ず一本を座右に具ふべし、菊版四百頁　(定價八十五錢)

◉就職受驗案内　神田内外協會發行

上は高等文官より初めて、下は產婆看護婦巡査に至るまでの受職受驗案内にして、其手續資格問題等を親切に指示したる者なり(定價貳拾五錢)

◉陸軍志願者必携　横井鎮雄編
赤坂　兵事雜誌社發行

陸軍志願兵の爲に必要の諸法規を知らしめ、附するに各種志願兵の試驗問題を掲ぐ、其筋の人々には便利多かるべし　(定價貳拾錢)

◉雪紛々　露伴新泉合著　春陽堂發行

露伴氏の記す所によれば、此篇、二十二年の冬、讀賣新聞に掲げ中にして稿を廢したるを新泉氏、其案を得て完成したる也といふ、事は寬文の蝦夷亂を骨子として是に呑空法師、金堀庄太夫等、蝦夷地に因ある人々の事蹟を添加したるもの、沙耳泉及び鬼菱といふ二人が松前家の役人の暴横を憤り兵を擧げて一たび勝ちしも遂に敗るゝといふの筋也、趣向は純乎たる英雄譚にして沙耳泉、鬼菱二人の事蹟を傳ふるにあるも之に纏附せる情事の部分は切斷して小説とし見るも決してさまたけず。其一編の主眼たる講和の章に於て主公鬼菱が松前家の術中に陷るを曉りながら「死して耻なくは何をか憂へん」の語を遺し從容死地に赴くの一節、此篇にあらずんは見るを得ざる所、人をして(氏の他の作に於けるが如く)露伴氏、紙上に表出したるにあらざるかを疑はしむ、神威岬割腹の章、祖

雛落城の草さもに孺和の草に次ぐ文字にして一は悲壯、一は慘愴、讀み終りて尚悽凄聲あるを覺ゆ、要するに此篇は近時の快作也、露伴氏の補助、勞多かるべしと雖も新泉氏の手腕亦稱せざるを得ず（古爽人）（定價八十錢）

●新小說　第六年第二號　春陽堂發行

眉山氏の袖枕、無難の作也、松魚氏の雨夜、甚だ可ならず懸賞小說の赤富士に比して劣ること數等、荷葉氏の晝けぶり、唯可憐さ言ひて止まんか、探菊の見聞逸話、竹窩の異、共に春葉の春のおとづれに如かず、宙外氏の近松の新研究、例に依つて穩健閑精也、本號には露伴氏の一國の首都の續稿を添ふ

●新聲　第五編第二號　新聲社發行

今年より明星の體裁を參酌し紙質は舶來紙を用ゐ成美穩健等の畫を挿めり

近事彙報

社會雜報

●遊獵禁止と岩崎家　男爵岩崎久彌氏の弟康彌氏が伊豆の伊東にて、誤て同行の大學生稻垣長三郎氏を銃殺したるより、岩崎家にては非常に氣の毒に思ひ、長三郎氏の保證人村上專精氏を請し、淺草本願寺にて大學教授其他稻垣氏の生國三河出身の人四百餘名を招き、追弔會を行へり、且つ三河の方へ謝罪すると同時に如何なる要求にても應ずべき旨を申込みしに、長三郎氏の父は偶然の誤り、今更愚痴を溢すべきにあらず、又何の望みも候はず、只一ツの願ひは自分は佛教信者にて世に害を與へざる生物を慰みに殺すことを非常に殘忍なる樣思ひ居るに就き、若し差支へなくば遊獵を全廢せられたしと答へしに、岩崎家にては今回の過ちより特に遊獵を恐れ居る際とて、評議の上岩崎家の家憲として代々遊獵を禁止することに定めたりと

●東京府の交通力　十五區八郡九十二方里に於ける交通力の現數左の如し

汽車鐵道九十四哩五十七鎖　馬車鐵道七里六町二十間　乘馬車六百廿八　荷馬車三千七百六十三　人力車一人乘四萬二千四百九十二　同二人乘六千二百六十一　荷車十萬千七百四十六　日本形船舶五百八十艘（十萬七百石積）　西洋形船舶六百六十八艘　（十五萬九千四百七十三噸）郵便本支局四十一　同上受取所八十九　郵便函（柱）千三百六十六　同（掛）四百六十三　電燈（街燈）二百三十一基　瓦斯燈（街燈）七百四十四基　電話加入者三千八百五十機

●六年間吉原の統計

▲明治二十八年
娼妓の數　二千四百二十七人
遊客の數　百十八万六千三百五十五人
費消金高　百十四万六千八百四十三圓六十四錢七厘

▲明治二十九年
娼妓の數　二千六百七人
遊客の數　百三十六万四千百五十二人
費消金高　百四十七万五千五百六十一圓十七錢一厘

▲明治三十年
娼妓の數　二千七百三十五人
遊客の數　百三十二万五千六百六十八人

費消金高　百五十三万六圓二十九錢七厘

▲明治三十一年

娼妓の數　二千九百二十五人

遊客の數　百二十四万千八百五十六人

費消金高　百六十万九千八十五圓二十二錢

▲明治三十二年

娼妓の數　二千八百九十一人

遊客の數　百三十六万七千六百三十九人

費消金高　百七十二万四千九百八十九圓八十一錢四厘

▲明治三十三年

娼妓の數　二千四百十七人

遊客の數　百十五万八千百八十六人

費消金高　二百廿二万三千七百卅三圓七十七錢三厘

●自由廢業の數　毎日新聞が昨年九月より二月十八日までの調べにて全國自由廢業の數が同社に知れたるもの一千百九十六人

●徴兵檢査成蹟表　三十二年度に於ける全國十二個師團徴兵檢査に於ける兵役に堪へ得るものと全く徴兵に堪へざるものとの統計左の如し

師團別	總員	病氣事故により徴兵に堪へざる者	癈疾不具及四尺七寸未滿のもの	計
第一	八七、九五大	二一、〇八一	六、一七一	二八、二五五
第二	三三、三三五	八、四五〇	二、五五三	一一、〇〇三
第三	三五、三六二	一〇、〇一六	二、七七九	一二、七九五
第四	三八、一八〇	八、二〇八	三、一〇九	一一、三一七
第五	三二、七一一	八、九一三	二、五九八	一一、五一一
第六	三五、二三八	九、〇七五	三、六〇九	一二、六八四
第七	五、一一九	一、五〇〇	四七四	一、九七四
第八	三一、五二二	六、〇九〇	一、七九五	七、八八五
第九	三一、四六五	九、五三二	三、〇五三	一二、五八五
第十	三一、四〇三	八、四八二	二、二二三	一〇、七〇五
第十一	二七、一一一	七、二八六	二、二四五	九、五三〇
第十二	三〇、八二二	九、一七八	二、五八五	一一、七六四
計	四二〇、二二四	一〇八、八一二	三一、一九七	一四二、〇〇九

右の統計に依れば疾病癈疾不具者にして全兵役に堪へざるものは壯丁四人に對する一人の割なりと

●大坂市の猫　ペストの爲め其筋より調べたる最近大坂市中の飼猫總數一萬六千四百五十八匹

●公德涵養の提綱　日本弘道會長西村茂樹君の意見六要左の如し

一時間の定を守らざる事

二會合の節無斷にて缺席する事

三公園の花木を折り又は出入禁制の場所に踏入る事

四土藏板塀其他神社佛閣の外圍に落書する事

五役所旅館其他共同の便所を汚す事

六滊車滊船又は乘合馬車の內にて獨り便利な占領し他人の迷惑を顧みざる事

七滊車滊船渡船の昇降其他總て混雜の場所にて人を押退け獨り先に出る事

八已れの物を大切にして人の物を粗末にする事

九書物其外他人の物を借り損壞したるまゝにて返却する事

十　（借金返濟の期限を定る事殊に恩借金を甚しとす）
十一　甚しき重荷を曳て道路を破壞する事
十二　田畠屋敷地等境界に付きて私を爲す事
十三　共同の水利に付獨り便利を占めんとする事
十四　人家の果物を竊み又は他人の山林を盜伐する事
十五　器物等の外見の美にして內實の粗惡なる物を造る事
十六　織物等の如き其染色美なるが如くにして褪色し易き物又は口元の一二尺は丁寧にして奥の方は粗末なる品を作る事
十七　惡品を以て良品なりと稱し又は辯舌を以て人を欺き不當の價を貪る事
十八　已れ一個の大利を得んが爲に衆人を苦しむる事足尾銅山の如きは其著明なる者なり其外此類甚多し

●福澤翁の絕筆　として東京朝日の報ずるところに依れば福澤翁は生前十文字信介氏へ左の詩を寄せたりき是れ蓋し絕筆なるべし

稼財如上山　散財似下山
世間人多少　誰能上下山

十文字氏之に返歌して『世渡りのすべに別段秘傳なし儉は得なり奢は錢なり』

教育近事

●漢字大削減　文部省が小學校令改正の結果從來使用の漢字を制限する所ありしが帝國教育會國字改良部に於て調査したる漢字制限の方法は左の如くにして文部省の調査せしものよりも更に一層の削減となれり

一、假名でわかる詞言は漢字を用ゐぬ事（イ）我が國音の動詞、形容詞、助動詞副詞、感嘆詞、後置詞等、（ロ）固有名詞、（ハ）普通の外國語、本邦語にて通常使用し居る各種の名詞、（ホ）其他等にして此のうちには總ての名詞及びハヤリ（流行）等の言葉をも含む

二、字畫が多くてかくに手間どれ覺えるにむつかしい漢字を用いぬこと

三、字畫が少くとも間違ひ易い漢字は用ゐぬこと

四、假名でかくよりは便利な漢字は用いること

五、略字のあるものはすべて略字を用いること、圓、錢、匣、亂、當、臼等

等にして文部省のものと比較するときは『毛米』の二字增加して『也』の一字を削りたるものなれども前記の方法のため結局七百字以上を削除することゝなりしにて文部省の千二百餘字より七百字以上を減ずることなれば僅かに五百字計りとなれり

●二大學設置の消息　九洲及び東北に各大學校を設置すべしとの案は文部省より大藏省に廻送して經費の交涉中なるが今後十箇年の繼續費となし合計約四百萬圓の中百萬圓は其關係地方の寄附金に依る計算にて結局國庫より支出すべき金額は十箇年間に約三百萬圓に過ぎず

●未成年者禁酒法案　根本氏の提議に係る、未成年者禁酒法案は左の如し

未成年者飮酒禁止法案

第一條　未成年者は酒類を飮用することを得ず

第二條　前條に違反したるものあるときは刑法第十九條未成年者年齡の區別に依り違反者を一圓九十五錢以下の科料に處す

第三條　未成年者に對して親權を行ふ者情を知りて其飮酒を制止せざるときは一圓九十五錢以下の科料に處す

第四條　科料は十日以内に完納せしむ限內完納せざるものに刑法第廿

七條の例に照らし一圓を一日に折算し之を拘留に換ふ其の一圓に滿たざるものと雖仍ほ一日に計算す

第五條　未成年者其自用に供することを知りて之に酒類を販賣し又は飲用せしめたる者は十圓以下の罰金に處す

附　則

本案は明治三十四年四月一日より施行す

●女子大學近況　來る四月より開始すべき日本女子大學校は志願者豫想外に多く國文、家政、英語の三科共に各五十名の定員を越え國文は既に百名に逾し家政科亦八十名許りなるが獨り英文科は程度の稍高きが爲めに割合に志願者の少數なるにより更に入學者の便利を圖り同科に限り二ヶ年の豫科を新設することゝ爲したり

●萬國躰育會の照會　過般巴里に開かれたる世界躰育大會に日本委員として出席したる山根警察署長に宛て此程同會々長より左の諸件を照會し來れり

日本に萬國躰育會支部を設置し政府指名の委員十名を置くこと

日本支部の補助金及び躰育上の出版物其他の書籍購入費に充る爲め陸軍文部兩省より毎年六百法を下賜ありたきこと

●學制調査會の組織　年々三萬餘圓の經費を以て、文部省內に置くことゝし、大藏省の同意を得次第、議會に提出の運びとならんが、其の委員は二十五名乃至三十名とし、重に高等教育會々議員、及び在野教育家より選出する豫定にして此の事業は國語の調査と等しく、頗る浩瀚なるものにして、迚も短時日には調査の結了を見ること能はざるも、先づ三年位の時日を要する見込みなりといふ。

●學制研究會の代議員　學制研究會に於ては、曩に規約を改正して、全會員中より代議員二十五名を選擧し、同會の決議は、出席代議員過半數の同意を要することゝせり代議員左の如し

伊澤修二　市島謙吉　磯部武者五郎　波多野傳三郎
星松二郎　本多庸一　千阪高雅　尾崎行雄
川上彦次　鎌田榮吉　嘉納治五郎　高田早苗
辻新次　根本正　長岡護美　工藤行幹
久保田讓　藏原惟郭　山縣悌三郎　馬屋原彰
近衛篤麿　江原素六　安藤龜太郎　湯本武比古
鈴木券太郎

●宗教時事

●佛教新聞　眞言宗東寺派の有志僧侶は資本金一萬圓を以て新聞紙を發刊する事とし第一號は本月二十一日弘法大師命日を以て發刊す

●サクラメント佛教青年會　米國カリホルニヤ洲の全會は毎月第二の金曜日午後八時より說教、毎日曜日午後八時より通佛教の談話會を開き土日曜日を除き毎夜午後八時より十時まで夜學校を開き在留日本人の爲めに英學を授けつゝあり事業日々に進めりと

●基蘇教徒の新聞　基蘇教主義の日刊新聞を發刊せん爲め本多庸一、宮川經輝、押川方義等の諸氏は先づ歐米新聞社會の實況を査察し且つ各國の新聞社の交通の便を開くとを第一着手とし明治學院出身の川井運吉氏を發行準備員として近日洋行せしむる由なるが　同氏は重に米國に於て所謂大學傳道の資金幷に新聞發行の基金を募る筈なりと云ふ

●內務省と眞言宗　去月二十日衆議院請願委員會に於て各議員の紹介に依り提出せられたる眞言宗高野派御室派大覺寺派幷に醍醐派の四派獨立許可取消の請願に關し質問會を開きたるに對し末松內務大臣の答辯したる要旨を聞くに、當局者は最初より宗教規則に從ひ、成るべく教義を害せざる樣行政處分を爲すべき考なりしも眞言宗四派獨立の事情

は之を許可するの止むべからざる者あり、其教義に於ては一致すべき者なるに拘らず本山と末寺の關係各管長相互の間に於ける爭は之を千弋に訴ふる迄には至らざりしも宗教家としては頗る激烈なる者あり、到底之を獨立せしめざる可らざるの狀況なりしを以て政府は止むなく、本意に非ざる行政上の處分を施したる者にして若し之が取消を爲さば再び其紛擾は絶ゆることなかるべしと云ふにありしと

●海外佛教雜誌　米國佛教傳道の摸樣は「桑港佛教靑年會々報（毎月一回）、布哇の全景況は全地の「同胞」（毎月一回）にて承知し得らるべし、二雜誌共に佛教徒の發行せる日本文雜誌なり

●東亞佛教會擴張演說會　同會は發會後處々に同會擴張の演說會を開きたるが尙は逐次市十五區に各教發起人手を分ち巡回演說を行ふ由

●三老師の托鉢　東亞佛教會擴張の爲め眞言宗釋雲照、天台宗櫻木谷慈薰、禪宗渡邊南隱の三碩德は天澤文雅、古澤文能兩師を始め外二十有餘名の篤志僧侶と共に隨喜托鉢に去月十五日より市中を巡修せり

●大佛殿大修繕　奈良市の有力家木本源吉鍵田忠次郎、東大寺執事淸水公賢岩佐奈良市助役の諸氏は大佛殿大修繕の爲め過般上京して內務省其他へ運動中なるが右に付ては大佛を露佛させよ抔の說あれども正面十九丈、側面十七丈、高さ十五丈、土壇の高さ七尺の大々的日本建築物を此儘に捨てんは遺憾至極なりとて終に此運動を起したるなり但し大修繕費は約五十萬圓にて內十二三萬圓は東大寺にて負担し五年乃至七年の繼續さし國庫の補助を仰ぐ見込なりと

●池田榮吉氏の近況　大谷派より獨逸留學を命ぜられたる池田榮吉氏は先年來伯林に在りて宗教法を專攻し居たりしが來る四月よりは基督教審教地たる維納若くはミュンヘン地方に轉學し本年中秋歸國すと云ふ

●教學參議部の擴張　本派本願寺にては來る五月新門主の歸山を期し大に教學事務を改革し先づ教學參議部の職制を更改し其の職權を擴張せん筈にて豫て本願寺派出身にて大學卒業の學士は悉く參議部出仕に任命し布教學制等夫々分擔して調査を命じ海外へも派遣を命ずと

●山階管長の逝去　寺門派管長園城寺住職山階韶玉師は八十二の高齡にて遂に去月四日逝去せりと

●本派本願寺の學制　本願寺派本願寺にては從來の學制十一ヶ年度を改正し年限を短縮し、中學の五年、大學豫科を二年、佛教大學を三年とし都合十ヶ年に革め徵兵猶豫の特典を請くることに內定せり

●本願寺派の臺灣布教　本願寺が臺灣に布教の爲め出張せしめある現在布教師は基隆は高橋行信臺北に※雲玄範田中行普川原教道其の他四名臺中に小椋暢音藤谷峻岳苗栗に內藤良儀藤本周憲鹿港に光明智曉鈴川知之其の他二名都合十六名の布教師を派遣し末寺の數は全臺灣を通じて十七ヶ寺門徒粗三千五百七十二戶臺南には開導學校を、臺中には敬受學校を、臺北には龍谷學校を設けて土人子弟を敎育しつゝあり三校とも學生の數三百五十有餘名なりと其中尤も生徒の多きは臺南にして現今の調査に依れは三百餘巳上に達し何れも好成績なりと

●淫祠取締　佛閣神社に類似の殿堂を建築し衆人の參詣を導き愚民を誘惑し賽錢を貪ぼるもの往々あり京都府廳は之が弊害を矯正せん爲め目下高等警察課に命じ各淫祠を調査中なるが不日其取締に關する訓令を發布し不都合と認むべき者は容赦なく取壞ちを命ずるよし

●橫濱護國佛教會　橫濱護國佛教會は同市内の仁慈なる各專門

醫士の賛同を得て赤貧無告のもの醫藥を求むる事も能はずして徒らに死期を速ならしむる斗りの悲境に居る者の爲め無代價治療を施す

●**本願寺派と警察監獄學校**　内務省は此程兩本願寺へ向け第二期警察監獄學校へ入學さすべき者の學業履歴書差出すべき旨照會し來りたる由にて本願寺派にては佐竹靈瑞氏其の外二名を入學せしむ

●**法要經費**　大谷派本願寺の臨時議制局會議は去月十三日を以て議事を了へ閉會式を擧行せり今回附議したる三百年大法要經費豫算は廿七萬圓を減じて廿三萬五千圓となし大多數を以て可決したりと云ふ

●**韓國帝室の下賜金**　淨土宗にては曩に同國京城に開教院を設け之が主管に廣安眞隨氏任ぜられ同院に在りて專ら布教に努力し明成皇后の尊牌を安置して法要を修行せり同國皇室より去一月七日宮内部會計局長安學桂氏の手を經て一萬元を下賜されたりと

短文課題

日本の商業に就て（三月十三日迄）

自轉車に就て（四月十三日迄）



理學士山上萬次郎先生編　地理學上の大參考書!!!

巻一亞細亞　巻二歐羅巴と相待て外國地理書の完璧を得んと欲する者は

新撰大地誌

巻之一二三版發行!!!　毎巻定價壹圓卅錢　郵税十四錢

●巻之三新刊●　アフリカ、オセアニア　南、北アメリカ之部　●紙數大判四百廿頁●

新撰大地文學

四、五、六巻　三冊新刊　各冊定價五十錢　郵税金六錢宛

カラント及ラプラスの星雲説を詳細に了知せんと欲する者は　本書巻四　宇宙開闢論

地圖製作の原理と應用とを簡明に理解せんと欲する者は　本書巻五　地圖製作法

天文地理數學地理上肝要なる問題の釋義を求むる者は　本書巻六　地球星學續篇

發兌元　東京神田裏神保町（電話本局一〇三六）　合資會社　富山房

▲賣捌　神田小川町　寶永館其他

●と●讀●ま●る●べ●し

帝國東洋學會趣意書

本會は、東洋諸國に於ける言語、文學、宗敎、哲學、歷史、地理、神話、俗話、工藝、美術等に關する史實を現存の古文書に依りて研究するを目的とす、

現存の文書中、その材料最豐富にして、曾て學術的講究を經ざるものを一切藏經とす、その卷帙の夥しき實に八千五百三十四卷、加ふるに藏外の諸書を以てすれば、殆萬餘に達せんとす、殊に我國には、本邦選述大藏經の外、宋、元、明、淸、麗の各完本の現存するありて、佛敎典籍の完備殆世界無比と稱すべし、抑漢譯藏經の含蓄せる所は、他國現存の諸藏と稍その趣を異にし、獨宗敎、哲學のみならず、諸般の學藝に關する材料を網羅して餘さず、學術攻究に資する所亦實に大なり東洋の一大古學叢書と稱するも、亦過言にあらざるなり、而して之が對照硏鑽の用に供すべき諸國異譯の經典も亦その數多く、南方佛敎諸國の經藏は、既に印行流布する所となり、暹羅藏經全部、及龍動巴利書出版會社にて發行せるものも既に我國に入り、北方佛敎の典籍たる西藏藏經も、近時既にこれを得るの機に達せり、印度ニボール現存の大乘諸典は、曩に歐洲にて出版せるもの、外、現に露西亞帝國大學內大乘書出版部、及印度カルカッタ府佛敎出版會社に於て修成せるものも多く、蒙古滿州亦夥多の譯書を有す、此等の諸書を對校し、その材料を自由に運用し、攻究討尋の結果を世界の學術界に貢獻し得るの地に在るもの、獨我國學者あるのみ、故に我輩自ら揣ず、大方諸君の贊同を得て、玆に本會を組織し、內、藏經の內容を攻究し、諸般の材料を査定類聚し、外、異譯の諸聖典と對照考覈し、その結果を編纂大成し、本會の目的を達する第一段となさんと欲す、

本會は藏經調査の事業終るを竢ちて、漸次他の文書の攻究に及ぶものとす、

帝國東洋學會規則

一、名稱

第一條　本會を帝國東洋學會と稱す、

二、目的

第二條　本會は東洋諸國に於ける言語、文學、宗敎、哲學、歷史、地理、神話、俗話、工藝、美術等に關する事項を現存の古文によりて研究するを目的とす、

三、事業

第三條　本會は第一着手として左の如き事業の成効を期す

イ　印度學藝叢書編纂
ロ　東洋各國佛教史編纂
ハ　辭書編纂
ニ　原本調査
ホ　典籍出版
ヘ　原譯比較研究
ト　質疑應答
（右の外機關雜誌を發行することあるべし）

四、會員

第四條　本會々員を分ちて會員、贊助會員、名譽會員の三種とす、

第五條　本會と目的を同うしその平素の研究によりて直接間接に本會の事業に貢獻するものを會員とす、但會員は評議員の決議に依り之を定む

第六條　團躰若くは個人にして金圓を寄附し以て本會の事業を助くるものあるときは評議員の決議を經て贊助會員となす、

第七條　名譽會員は評議員の推擧によるものとす、

第八條　各會員は本會の編纂にかゝる叢書、辭書その他の出版物を實費にて購求することを得

五、役員

第九條　本會に左の役員を置く、

會長　一名、　副會長　一名、　評議員　十八名、　幹事　三名、
編輯員若干名、　書記　若干名、
役員職制は別に之を定む

六、雜則

第十條　臨時學術講演若くは懇話會を催し會務の進行を報告し又は會員相互の親睦を計るべし

第十一條　會計に關する規則は別に之を定む、

第十二條　本會規則は評議員の決議を經るにあらざれば變更することを得ず、

明治三十三年十二月十八日

會長　常磐井堯猷

評議員
渡邊國武　渡邊龍聖　高楠順次郎　坪井九馬三　南條文雄
村上專精　上田萬年　井上圓了　大內青巒　前田慧雲
松本源太郎　藤島了穩　澤柳政太郎　三宅雄次郎　三上參次
島地默雷　島田蕃根

東京市本鄉四丁目五番地
帝國東洋學會假事務所